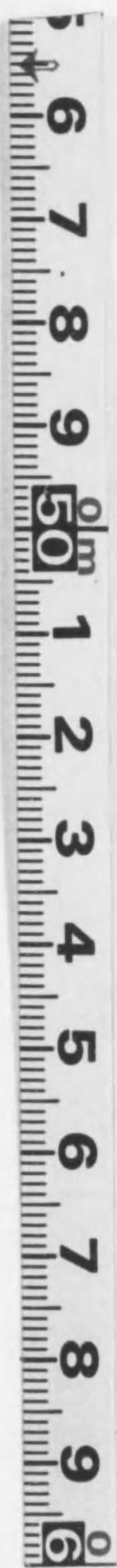


F13-Mi77-3aウ



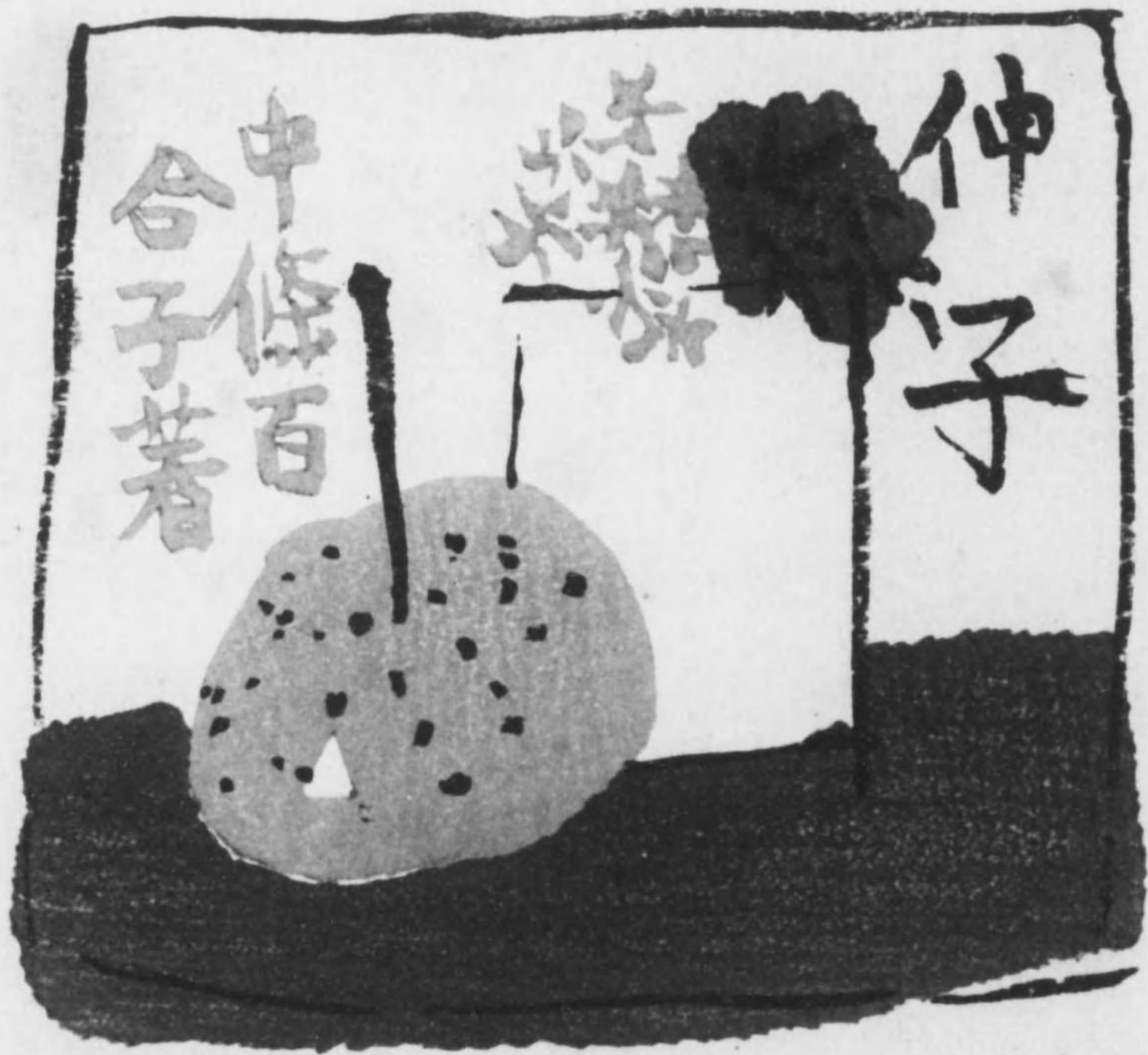
1200600808722

子 伸



始





F13
Mi77
3aウ

序

この小説は、大正十三年の九月から十五年の九月までの間に、一部分づつ改造に掲載されたものだ。

書き始めてから、終るまでの間に足掛三年経つて居る。其故、摺筆當時に見てさへも、最初の部分は、舊作の感があつた。其後、全體を一纏めにする爲にひどく時間をかけたし、印刷にかゝつてからも手間どり、今は事實上舊作になつた。然し、この作品は自分の生活と密接な関係のあつたものだし、作の上に年輪のやうに發育の痕跡が現れて居る點、自分は愛を感じて居る。

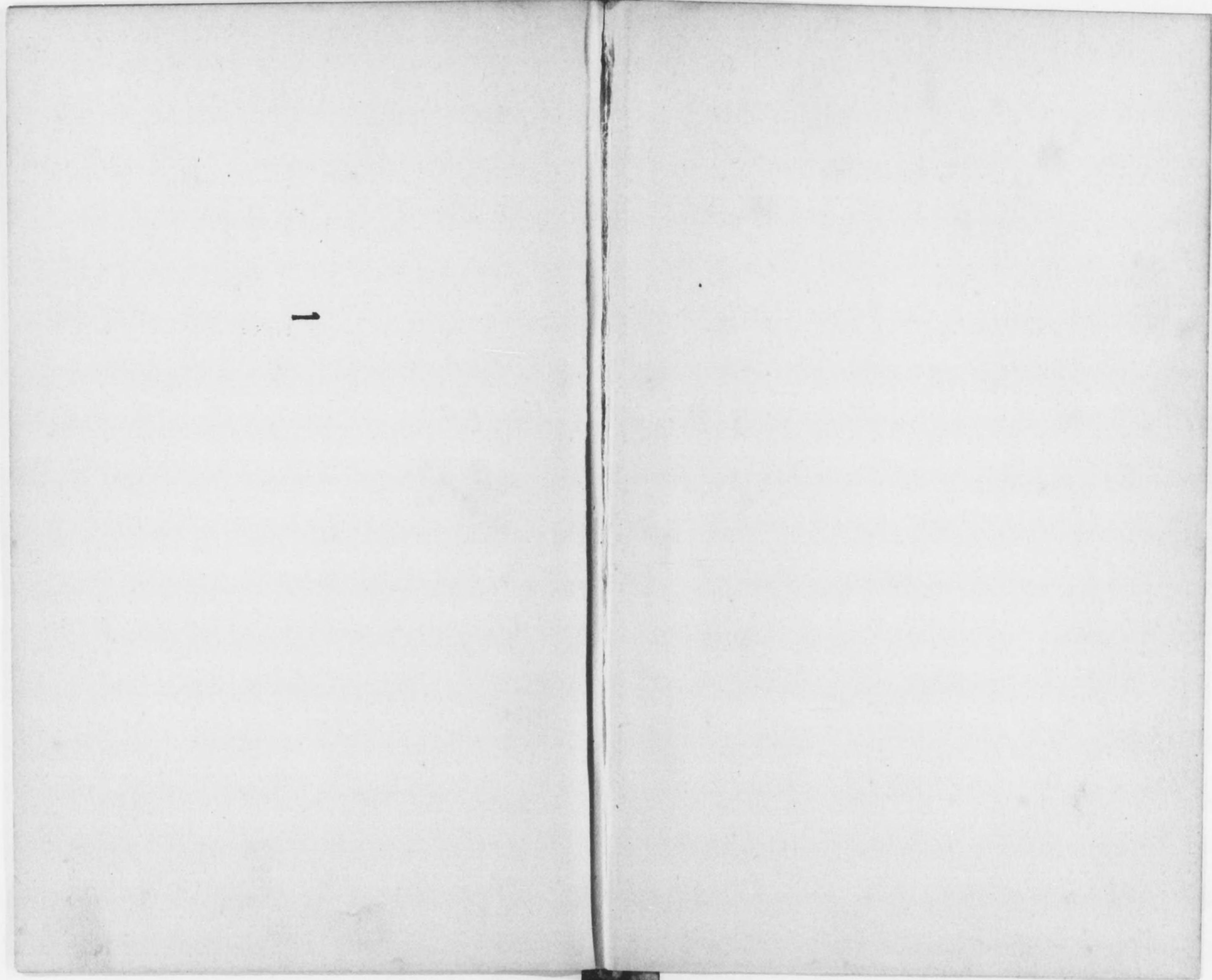
昭和二年十一月二十三日

作者



I種
W





伸子は両手を後に廻し、半分明け放した窓枠に倚りかゝり乍ら室内の光景を眺めて居た。

部屋の中央に長方形の大卓子があつた。枝形燈架の明りが、其卓子の上に散らかつて居る書類——タイプライターの紫インクがぼやけた亂暴な厚い綴込、隅を止めたピンがキラ／＼光る何かの覚え書——の雑然とした堆積と、其等を挟んで相對し熱心に読み合はせをして居る二人の男とをくつきり照して、鼠色の絨氈の上へ落ちて居る。

部屋中を輝かす灯が單調である通り、二人の男の仕事も單調で詰らなかつた。ホームスパンの服を着た、淺黒い瘡寄せた男が左手に綴ぢこみを持ち、眼を配り、頁をめくり、どん／＼桁の多い數字を讀みあげて行く。向ひ合つて、伸子の父の佐々木が椅子に淺くかけ、青鉛筆を持つて油斷なく數字をチエツクして居た。彼は品のよい縞で變り襟のついた喫煙着を着けて居た。くつろいだ装にも似合

はず、彼はもう卅分以上その忙しい、機械的な仕事に没頭して居るのであつた。

傍観して居る伸子には、仕事の内容も、今其をしなければならぬ必要も解つて居なかつた。彼女がおとなしく窓際に退いて眺めて居るのは、主として、子供のうちから父の多忙な時決して邪魔は出ないものと觀念して居る習慣によるのであつた。けれども、彼女は段々彼等の活動の調子に釣込まれて行つた。強くも弱くもならない平らかな聲が早口に

「二八七、二六〇。五九三〇三、四二七……」

勤勉な紡錘の唸りのやうだ。其につれ、佐々の青鉛筆は殆ど自動機能的敏捷さでさつさつ、三つさつ、細かく几帳面に運動する。そこに自ら獨特のリズムが生じた。凝つと見守つて居ると、機械の規則正しい運轉が人の心に與へる、力強い確乎とした、同時に精力的な亢奮に似たものを感じるのであつた。彼等は一息にふた綴大判の綴込を片づけた。そして、少しのろくくと、三つめの薄い覚え書を讀み合せて仕舞ふと佐々は、如何にも重荷の降りた風で

「やあ、どうも御苦勞様でした」

と、頭を下げ椅子をすらした。

四邊には、一時に緊張の緩みが來た。伸子まで何となく吻つとし、俄に外界の騒音が自分の背後か

ら幅廣く押しよせて來るのを感じた。丁度晩餐後、人の出盛る最中だ。彼女等の居る五階の真下に横るブロード街からは、絶間なく流れる無数の人間の足音、喋り聲、笑い聲等が溶け合ひ混り合ひ、とりとめのない雑音の濃い瓦斯體となつて昇つて來た。夜の空まで瀾漫する都會の巨大などよめきを貫いて、キロロロロ……と自働車の警笛が聞えた。燈柱の下で夕刊を呼び賣する子供の「ハイバア、ハイバア」と云ふ甲高い聲が途切れ途切れ聞えて來る。——ホームスパンの男は、手早く書類をまとめて自分の黄色い手下げ鞆に仕舞つた。そして、一言三言佐々と話し、伸子に遠くから挨拶すると、速しく氣取つて出て行つた。佐々は戸口まで其男を見送つた。戻つて來ると、彼は美味さうに葉巻の煙を吹いた。

「さて——そろそろ出かけますかな」

伸子は窓際を離れ、傍の長椅子に來てかけ乍ら、訊いた。

「本當にいらつしやる積り？」

「どうして？お前も行くんだらう？さう返事をしてありますよ」

「私——やめたいわ」

「何故？」

「草臥れて居るの。——それに……餘り面白くも無さうぢやないの」

「ふむ……」

佐々は、暫く黙つて自分の吐く煙を眺めて居たが、聽て徐ろに云つた。

「着物なんぞはそのまゝで結構なんだからおいで。——行けば何かしら行つた丈のことはあるものだ。それに僕の居るうち出来る丈人も知つて置かないと、いざといふ時一人で困るよ」

今夜、彼女は父と二人、日本人の學生俱樂部で催される或集り、茶話會のやうなものに招かれて居た。最近故國から來た某文學博士を中心として打ち解けた集りをするといふ案内を買つて居たのだが、伸子は一向好奇心が起らなかつた。彼女自身も紐育には新米の旅客であつた。彼女は、午後獨りで勝手の不確かな下街に買物に出かけ神經を疲らせて歸つた。夜まで行儀を守つて人なかに居なければならぬのは、彼女に少しうんざりなのであつた。けれども健康で活氣がある佐々は、伸子の引込思案を多くの場合うけつてなかつた。彼は、六十歳に近い老人と思はれない活潑さで、いつも伸子を引き廻した。それには、自分が滯留して居るうちに、地理も覚えさせ、交友も拵へて置いてやらうといふ心遣が潜んで居るのは明かであつた。彼は會社の用事で、僅か三箇月ばかり、此都市に來た。彼が歸つて仕舞へば伸子は獨りで居遺る豫定であつた。彼女は旅行の間、大抵いやでも父が行く處へは

跟いて歩いた。市役所から、或大銀行の金網の裡で、人間が金貨の山に埋り血の氣のない指で金勘定をして居る、空氣の流通のわるい暑い部屋の中まで。土地不案内な、此といふ定つた目的も持たない伸子は、又、さうでもしなければ一日が永く、捨てられた石のやうに退屈したに違ひない。——
今も彼女は確に行きたくはなかつた。けれども、父が出た後、ぼつたり獨りで旅舎の部屋に十二時頃まで閉ぢ籠ることを考へると、それも餘りぞつとした役廻りとも思へない。

伸子が足をふりふり愚圖々々して居る間に、佐々は其にかまはず活動家らしい足どりで寢室に行つた。間もなく、開放した扉から、水のばしやくいふ音、髮刷毛を置く軽い乾いた音などが響いて來た。窓からは、宵つばりな都會の眠氣知らずなざわめきと、向ひ側の建物の屋根の頂に廻つて居る廣告電光飾の氣ぜわしい明滅。下界の燈火を反射して、ぼうつと潤ひを帯びた黒い夜空の一部が見える。

伸子の胸にいきなり

「おいてきぼりにされては大變だ！」

と云ふ、子供らしい切ない思ひがこみ上げて來た。

彼女は、いそいで椅子を立ち、父の後を追つた。佐々は、もう髮の手入れもすみ、部屋の真中に立

つて上着に片手を通して居るところであつた。其を見ると彼女は慌てゝ云つた。

「すまないけれど一寸待つて下さらない？ 私、矢張り行くわ」

伸子は早足に鏡の前に行つた。

佐々は、時計を見た。

「もう餘りゆつくりは出来ないよ」

「すぐよ、五分！」

伸子は、迅速に髪をなほし、小さなまるい茶色の帽子をかぶつた。

丁目が殖えるにつれ、人通りが減り、街が寂れて來た。

父娘は、陰氣に目隠しの下りた大きな飾窓について角を左へ曲つた。表通から入ると俄に暗く、

緩く爪先下りになつた舗道の足許さへよくは見えないやうであつた。行手の大通り一つ隔てた彼方が

ハドソン川で、時々鋭い夜の河風が吹きぬけた。川沿公園の葉のない樹木の間、冷たい蒼白さで瓦

斯燈がぼんやり灯つて居るのが見える。

伸子は、寒さと淋しい處へ紛れ込んだ氣味悪さとで異様な緊張を感じた。彼女は、我知らず強く父

親の腕にすがりついた。

「——まるで暗いのね。——見當がおつきになつて？」

佐々は、靴の踵の音をさせて歩き乍ら、絶えず右側の家並に注意を拂ひ、幾分平生と違ふ壓へつけ

た音聲で答へた。

「もう少し先だらう。——然し斯うどれもこれも同じ形の家ばかりでは參るな。もつと街燈でもふや

せばいゝのに……」

全く、左右には低い鐵柵と三四段の上り口を持つた狭い家の入口が、どれも此も同じ型で幾十とな

く並んで居た。舗道のまばらな街燈の光は、一寸奥に引込んだ其等の質素な戸口まで届かない。彼等

は、段々佻しく感じ乍ら、殆ど一軒ごとに薄暗い家の入口を覗いて進んだ。大抵いやになつた時分、

彼等の前に、一つ明るく灯かけの洩れる弓形窓が現れた。窓帷の隙から、内部にちらつく男の立姿や

文句の判らない話し聲が聞えて来る。――

伸子は、父の腕を引いた。

「此處よ！」

佐々は、外廻りを一通り眺め、入口の段を昇つた。呼鈴を押した。短い、餘韻のない音が直ぐ、扉の彼方で鳴つた。伸子は、期待と好奇心を感じた。暗い横通りで變な不安に襲はれて来たところなので、彼女にはこの古くさい板硝子の嵌つた扉の一重彼方が何かの暖かさ樂しさを持つて居さうに思はれたのであつた。すぐ硝子に人影がさした。樞扉は内側に案内滑らかに開いた。扉をあけた男は、彼等を見ると更に入口を廣くあけ、改つた口調で挨拶した。

「よく被來つて下さいました。――どうぞ……」

佐々は玄關の間に入ると直ぐ外套を脱ぎ始めた。伸子は自分の周囲を見廻した。右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があつた。左側には、葡萄葉の厚肉浮彫のある腰架が置かれ、其前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。奥に重い垂帳で人目を遮つた開け放しの室があつた。その廣間から男聲ばかりの、壓力が籠つた談笑が響いて來た。其邊一帶頑丈な茶色の檜の圓柱や鏡板が艶々灯の下で光つて居るのが、伸子に快適な感銘を與へた。彼女の感覺に新鮮な一種の匂ひがその邊に滲みついてゐ

た。家具の艶出し液のほひ、煙草、羊毛ともう一つ何か乾いた皮製のものから立つやうな香が甚一つに溶け込んだ、男ばかりの住居らしい匂だ。

佐々の外套をたすけてぬがすと、扉をあけた男が云つた。

「――では此方へ、女の方も澤山來て居られますから……」

伸子は、軽く頭を下げる拍子に初めて其男の顔をはつきり見た。彼は白い低いカラアと黒いネクタイと黒い地味な少し手ずれた服を着て居た。陰氣な顔だが、圓みのある大きい顎が目についた。伸子は、階子を登り乍らは、

「安川さん、來て被居いますか」

と訊いた。

三十五六に見えるその男は、持ち前と見える低い調子で答へた。

「來て居られます」

二階へ登り切ると、一つの部屋の戸が半分開いて居て中から女の喋聲がした。彼は

「安川さん」

と聲をかけた。

「佐々さんが見えました」
中の話聲がびたりと鎮つた。

「まあ！ さうですか」

聲と共にやゝ前躰みな大股で、園の上に安川の姿が現れた。伸子を案内した男は階下へ去つた。安川冬子は、伸子がある専門學校に僅の間籍を置いて居た時、上級の學生であつた。彼女は勤勉な學業の優れた生徒として誰にでも知られて居た。伸子は、一二度口を利いた位の間であつたが、此處で兎に角海の彼方からの友達と云へるのは彼女ぎりであつた。安川は、一年許前から、C大學で教育心理學を専攻して居るのであつた。

安川は、珍しさうにじろく／＼伸子を見た。

「噂はきいて居たけれど、私は一向外へ出ないから、ちつとも知らなかつたわ。よくいらしつてね。

——いつ此方へ着いて？」

「三週間ばかり前」

安川は、學校時代と些も變らない、その變らなさに伸子が驚いたほど同じてきばきした口調で訊いた。

「お父様と御一緒だつて？」

「えゝ。腰巾着」

伸子は、自分がこの女性達の前でまるで年少者扱ひなのを感じた。

「今夜も下に來て居るわ」

「さう。——いゝわね。今どこ？ お宿は」

「XXXXホテル」

「あゝ、私あすこならいつだつたか行つたことがありますよ。——皆さんに御紹介しませうね、こちらは高崎さん——高師をおでになつて家政學をやつて被居る。この方は名取さん……音楽が御専門——」
伸子は一人々々に向つて克明に頭を下げた。

一通りの挨拶、短い應答が終ると、伸子は失望といふか、意外さといふか、ぼんやり寥しい心持を感じた。居合せる人の中には一目で何處か好きになれるといふやうな人が一人も居なかつた。彼女等は、それ／＼専門もちがひ容貌も違つては居るのだが、誰でもが確りものらしいところ、物質にも精神にも多忙で絶えず何かに追ひ立てられて居るといふ餘裕のない感じ。其等は、うるほひない身なりとともに、例外ない持ち前であつた。伸子は、傍の椅子の上に外套を脱いだ。

一旦途切れて居た學校の話、留學生の噂が間もなく廻つた。或人は、伸子に親切に話しかけた。彼女は愛想よく其々答へた。然し、心が變に沈鬱になつた。伸子は、この部屋をこめて居る生活の狭い、暢々しない雰圍氣が何となく窮屈で馴染めなかつた。折角新しい自然や人間の生活の中に入つて来て居ながら、何も見ず聞かず、友達とよつても課業、課題、いそがしさ、又は、第三者には興味の起しやうもない人の噂しか出来ない海外遊學生の境遇に、伸子は恐怖を感じた。

縛りつけられた感じは、階下の廣間に出ても伸子から去らなかつた。

廣間の隅では佐々が機械よく安樂椅子に納り、頻りに何か喋つて居る。

入口に近い垂帳の傍の柱によりかゝり、腕を組み、先刻彼女を二階迄案内した男が、もう一人の椅子にかけた男と話して居た。椅子にかけて居る男の膝には、場所柄になく白と黒との斑猫が一匹丸くなつて抱かれて居た。この男は打ち寛いだ風で、その猫の背を撫で、物を云つて居る。家庭的な

光景で、彼女に、心持がした。伸子は、隣りに坐つて居る中西といふ、おそく来た、美しい、情の籠つた聲で物を云ふひとに、其男の名を訊かうとした。

すると、先刻の男が大柄な骨つばい體をぞごちなく運んで来て彼女のちき前にある卓子の横に立つた。彼は、卓子の端で埃でも拂ふやうな手付をすると、低い聲で

「今晚は——」
と開會の辭めいた挨拶をし始めた。團りの幾つかの顔が聲の方へ振向いた、廣間ちゆうのざわめきが鎮つた、森とした寄木の床の上で誰かど椅子をすらせた。——改つた咳拂ひの聲がする。……男は、伏目になつたまゝ、平凡に多數の人々の集つたことに對する満足の意をのべ、松田博士への歓迎の言葉と紹介とを終つて席についた。松田博士は、懇篤さうな中老人であつた。彼は自席に立つて、坐談的に藝術の郷土的特質といふ見地から、亞米利加の繪畫に就ての觀察を話し出した。

話しては、やゝ暖がれた平坦な音聲で、常識的に話を進めて行く。伸子の興味は、又程なくそれに物足りなさを覚えて来た。彼女は、話をきゝ乍ら、向ひ側に並んで居る男達の顔を見較べ始めた。大極の男は廣間の右端に立つて居る博士の方に頭を振つて居るので、伸子の處からは澤山の顔の左半面だけが見えた。艶々した血色の上瞼の眼ればつたい凡俗な顔、皮膚が黒ずんで目鼻立ちの粗い、恐らくは口中が臭さうな容貌、又は、頬から口の邊にかけて肉の薄い、粘液質らしいすべくした皮膚の持ち主。——一寸した脚の置き方や、椅子の靠れ方が皆何處か隠れた性格の一部を現はして居るやうで、伸子はこの見ものを面白く感じた。正面から視た時は、伶俐さうに引緊つて居た或青年の顔が側面から見るとまるで魯鈍さを曝露し力弱く見えた。——伸子は不圖平生餘り見たことのない自分の横

顔について微かな不安を感じた。順々に亘つて、彼女と斜向ひになつて居る先刻の男、名も仕事も知らない中年の男の番が来た。

彼は椅子の奥に深く腰を落してもたれ、癖と見え確かり胸のところに腕組みをして、うつむき加減になつて居る。先方から見られる心配ない一瞥を興へ乍ら、伸子は微かな戸惑ひを心の隅に感じた。彼の横顔には、此迄見て来たどの男達にも無い何かとあつた。他のどの男でも、面貌と體軀とは同じ力の密度——つまり胸のところにあると同じ血や肉で一くるみに出来て居ると感じられるのに、此男ばかりは肩幅のひろい北國人風な體つきと、その上につて居る顔との間に、妙にちぐはぐなものがあつた。足許から同じ力を入れてすつと見上げて行くと顔へ来て急に視線が間誤つくやうな複雑なもの——地味さ、感傷的なもの、心持が暢やかに外部に發しきらず内攻して居るといふ印象を興へるものなどが、陰翳となつて、下唇の引緊つた蒼白い横顔にはびこつて居るのであつた。

伸子の視線は一二度後戻りをした。彼女の好奇心が、その陰氣な横顔に向つて動いた。彼の顔にあるものは、決して多くの人々の持つて居るやうな得意な男の快活さでもなければ、雄々しさでもなかつた。何か陰のものであつた。それは暗さに近い。視る度に、その陰翳は何處から来る何物なのかをひどく知りたい心持を起させる種類のものなのだ。

松田博士の話は終つた。

四邊には以前より打ち解けた談笑が起つた。廊下の方の扉が開き、アイスクリームや砂糖菓子や運び込まれた。すると、伸子が好奇心を持つた男が再び立つた。そして新しい顔ぶれもあるから、賑々りに自己紹介をしたらと思ふがと提議した。左様いふことの大嫌な伸子は、思はず救を求めやうに遠方の父親を見た。父はその申出がさも愉快さうに、愛嬌よい微笑を眼尻の鬘にたゝんで晴れ晴れと坐つて居る。

「それでは——請ふ陳より始めよといふことがございますから、失禮して私から申し上げます」

彼は、佃一郎といふ姓名であつた。C大で比較言語學を専攻し、古代の印度、イラニアン語をやつて居るのださうだ。國は裏日本で、研究の傍、Y、M、C、A、の仕事を手傳つて居た。彼は「私で出来ますことは出来る丈御相談にあづかりますから、どうぞ御遠慮なく仰云つて下さ」と結んだ。

古代語の研究と、極めて實利的なY、M、C、A、の仕事との間にどんな心持の上の必然なつながりがあるのだらう。伸子は腑に落ちない氣がした。が、彼の専門の題目が漠然とした満足に彼女に與へた。彼の顔に現はれて居るものとその研究との間に性格的な關係をもつ何ものかを感じたやうに思

つたのであつた。

後から立つた者は、殆ど皆、政治、経済、社会学、法律等が専攻であつた。猫を抱いて居たのは、澤田といふ植物學を勉強して居る人であつた。女達も、各々抱負や目的を手短かに述べた。仲子は極りわるさからぶつきら棒にたゞ「佐々伸子と申します。——よろしく」と云つた丈で坐つた。彼女は此等の人々を前に置いて、自分は廣い深い人間の生活を知りたなのだ、死ぬ迄に一つでも、よい小説が書きたいのだ、と告白する勇氣を逆も持ち得なかつたのであつた。

親娘は、十二時少し前に旅館に歸つた。

仲子が湯上りの部屋着で、晝間買つて來た細工のよい銀製の封蠟道具をいぢくつて居ると——其は歐洲戦争の第五年目で、毎日處々に赤十字や戦地慰問の爲の慈善市があつた。仲子はその一箇處で、古風なその道具を見つけて來たのであつた——寝衣に更へた佐々が來て

「明日の朝九時に何君が來るから覺えて居ておくれ」

と云つた。

「何さんて——今夜の？」

「うむ。——頼まれて來た南波の甥のことがどうも氣になるがとても一人でやつて居られないから、

あの人にもちと手傳つて貰はうと思つてね」

佐々は、大まかに云つた。

「あの男は此方に大分永いらしいから、きつと何か手がかりを見つけて呉れるだらう。案外、いやその人なら知つて居るといふやうな事がないでもあるまい。……此那に人間のうちやく居る處で、何年も行方不明の男一人見つけようとするのは、何しろ一仕事だ！」

そして

「早くお前もおやすみ」

彼はいかにも活動の後の睡眠を偷しむ風でさつさと寢臺に入つた。

次の朝、仲子はいつもの通り元氣を恢復し、爽やかな氣分で目覺めた。寢室の窓帷はまだ閉ぢたま

まであつた。窓帷の僅な隙間から、一本の震へる細い金線のやうな光線が薄暗い部屋に射し込み、化粧臺の上の白粉壺に、小さい燃える炬火のやうな閃きを作つて居る。

彼女は、静かな氣持で被布をはねのけて起き上つた。伸子は、首をのばし、彼方の寢床を眺めた。父は先に起きて仕舞つたと見え、床は空であつた。

伸子は、枕下の時計を見た。九時半になつて居る。彼女は、忽ち昨夜の約束を思ひ出した。――

彼女は、部屋着を羽織り、窓をあけた。今日もよい天氣だ。少し霽つぽい空で、朝日が暖く十月下旬の街路や建物に輝いて居る。伸子は、格別急ぎもせず顔を洗ひ、髪を結び、衣服を更へた。彼女は昨夜と同じ、白絹のカラアをついたさつぱりした紺の服で廣間へ下りて行つた。

朝の廣間は澄んで清らかで、大理石の圓柱や熱帯植物の鉢植が、埃一つない空氣の中に納つて居る。

伸子は、人影疎らな廣間を見渡した。食堂の入口に近い長椅子に並んで、父と何とが話して居る。

彼女は眞直其方へ行つた。

「やあ、起きたね」

彼女は父に朝の挨拶をした。そして、彼女の爲に、椅子を引よせた何に

「ゆうべは失禮いたしました」

と云つた。

「私こそ失禮いたしました。お疲れになりましたらう。」

佐々と何とは、すぐ話を元に戻した。彼等は、南波武二を尋ねる廣告を日本字新聞に出すこと、何が市の宿泊所の名簿を調べることを定めた。

傍で二人の話を聞き乍ら、伸子は何が此處へ來ても、昨夜彼女の目についた景團氣を顔や聲に持つて居るのを感じた。その上斯うやつて相對して居ると、彼には、彼女の廣い、漂つて居る情感を引きまゝとめて狭く何處かに引つけるやうな處があつた。その引きつけられるやうに感じるものは何なのか。外面的なものでないのは明かであつた。彼の服装は、朝のはつきりした光の中で昨夜にまして氣が利いても見えなければ、上等でもなかつた、寧ろ貧しげであつた。容貌にしる、それは美しき男性といふ範疇から遠いどころではない。燈火の反映の下で見たより一層陰氣であつた。其だのに、何故か彼には伸子に好奇心を起させるものがあるものであつた。――

話が一段落つくと、佐々は

「どうです、一緒に茶でも上りませんか。――實は我々もこれから食事をやるところですから」と何と誘つた。

佃は、一旦辭退したが卓子についた。伸子は、彼から、日本から来た労働者が浮浪者になる経路や賭博狂の或男の話などをきいた。佃は話下手であつた。自分から話題を展開させる性質の男でなかつた。彼は、教室に出る時間の都合があると云つて、間もなく中座して歸つた。

伸子は、十一時前に下街に行く父と旅館を出て、一緒に地下電車の停留場まで行つた。其處で別れ彼女が自分だけ、徒歩で美術館に行つた。

土曜、日曜以外館内はひっそりして居た。右のとつつきに、ロダンの作品ばかりを集めた一室があつた。レムブラントの「花を持てる女」の前で、イタリー人らしい一人の男がそれを模寫して居た。彼は熱心に、美術家らしくブラズを着た背をかゞめ、原畫と自分の畫面とを見較べ見較べ細心に、神秘的な原畫の素晴らしい色調を出さうと努めて居るのだが、伸子の眼に彼のカムズは醜怪以外の何ものでもなく映つた。或場所では雑誌の表紙にでも應用するののか、亞拉比亞人が槍を振つて躍り上る黒馬に跨つて居る繪を、石版刷のやうにはつきり寫して居る中年の女が居る。伸子は、軽い晝飯を階下の喫茶店ですまし彼方此方歩き廻つた。

もう歸らうといふ時、彼女は急に或事を思ひつきもう一遍階上へ引かへした。少時迷つた揚句、番人に訊き、伸子は一つの人氣ない陳列室に入つた。其處は古代波斯の美術品や寫本などの陳列室なの

であつた。

此迄、大ざつばに土耳其系統の美術品として好んで居た精緻な唐草模様の銀細工、絨氈、碧と黒との釉藥の對照が比類なく美しい陶器などが、皆イラン人の製作であつたのに伸子は驚いた。彼女は、特に、入つて突當りの廣い壁に懸つて居る裝飾瓦に異常な懐しさと興味とを覺えた。貴人行樂の圖で、花の咲き満ちた春の樹下に若い貴族の男女が語つて居、侍女が彼方から裳を春風に吹かれ乍ら酒瓶を捧げて來る樂しげな構圖だが、王女の下膨れに豊かな頬といひ、大どかな眉と云ひ、領巾をかついだ服の様子と云ひ、所謂天平時代の風俗をつくりであつた。其ばかりではない。一面に咲き亂れた花の愛らしい形から、樹木、飛んで居る鳥の形、而も其等を彩るたつぷりした釉藥の黃、紫、綠、碧の見覚えある配色に至るまで、寧樂朝の美術を回想させずには置かないものがある。

伸子は、體が熱くなるのを感じた。せはしく心の中で波斯、支那、日本と聯想が飛んだ。——然し、直ぐその三つの間に正しい連絡を見出さうとするに伸子の東洋美術史は餘り貧弱であつた。

彼女は、猶當惑と物好きの現れた眼つきで、幾つもの硝子棚の繪卷物を見た。纏布を卷いた、頭でつかちで眼ばかり大きな王が輿にのつて居る處や、狩獵の繪がある。餘白に記録らしい文字があつた。けれども、朱や金で裝飾された、模様はやうな文字は繪がなければ伸子には何方が上か下かさへ見分

のつかないやうなものであつた。彼女はこつ／＼美術館の數多い石段を降り乍ら、彼那文字を佃が本當に讀むのかしらと怪しみおどろいた。

土曜日に、伸子は父と朝から郊外の知人を訪問に出かけた。

三時過に市中にかへつて來たが、佐々は夕刻まで下街で用事があると云ふので、伸子獨り先にホテルへ戻つた。昇降機の方へ行きかけると、誰かが彼女の名を呼んだ。振り返ると、素ばしこさうな、雀班顔の侍僮が驅けて來て切口上で報告した。

「お客様です。丁度今被來つて彼方に待つて被居います」

伸子は、誰だらうと思ひつゝ廣間に戻つた。見ると、昨日の朝と同じ食堂の入口に近い隅に、佃が來て居る。彼の用向は直ぐ察しられた。彼が、自分のところと定めたやうに一つの場處を占領して居るのが、伸子に何んもなく彼の地道さを感じさせた。伸子は、くつろいだ氣分で挨拶した。

「今日は——。父はまだ歸りませんが、私で分りますこと？」

伸子は彼と向ひ合つて座をしめた。

「きのふお頼みを受けた新聞廣告を出すようにして來ましたから、その受け取を差上げようと思ひまして——」

「さう、どうも有難うございました」

伸子は渡された紙片を一寸見て手提げの中にしたつた。佃はその手元を見守り乍ら云つた。

「それから——今朝ミルス・ホテル——お話しした市營宿泊所ですが——あすこへも行つて見ましたが、近頃の帳面にその名は見當りませんでした。……三月分出して貰つてよく見たのですが」

「まあ、其那に一どきにして下さらないでもいゝのに」

伸子は、彼がどうして其那時間を持つて居るか驚いた。

「うちの父はあゝいふいそがしがりやだから、願ふ時は大急ぎにこたく／＼お願ひするけれども、貴方は、悠くり、お暇な時して下さればいゝのよ」

「いゝえ、かまひません。きのふは午後すつかり空いて居た日ですから——ではどうぞお父様がお歸りになりましたら、新聞には多分明後日廣告が出るとお話し下さい。——ミルスの方へは、又二三日うちにいつて見ませう、少し心當りもありますから……」

「どうぞよろしく」

——けれども、何となくこれぎりで立ち上り、左様ならと云ふ氣がしなかつた——佃も、いそがないと見え、傍の小卓に置いた帽子や手袋をとりあげる風も見えない。伸子は、やがて

「貴方のやつて被居るイラン語といふの——まるで不思議なものね。きのふメトロポリタンに行つたので覗いて見たけれども、私にはどつちが頭だか尻尾だかまるで解らなかつたわ」と云つて笑つた。佻も頭を振つて笑つた。その笑顔は、静かな湖に漣が擴つて行くやうであつた。彼は、

「どんなのを御覧になりましたか？巻物ですか、それとも石刷りですか」と訊いた。

「硝子棚に入つて居る巻物——繪のあるの。——波斯人は今でも彼那字を使つて居ますの？」

「字は大して違ひますまい。言葉の方は昔から大分違つて來て居ますが——字でも、大昔は彼那のでない楔形文字を使つたのです——」

伸子は、興味に索かれて佻の顔を見た。

「そんな字で、どんなものを書いたんでせう、記録や何かばかり？」

「いゝえ！」

佻は、力強く否定した。

「史詩や物語も澤山あります。——尤も、ずつと昔その楔形文字の時代は、王が他の民族を征服した

短い記録のやうなものが歴なんかに刻まれたものばかりですが——」

伸子は、話に入らななにつれ、飾りつけなく、卒直に口を利くやうになつた。

「字が段々複雑になり殖えるに従つて、種々な物語が書いて來たといふわけね。——どんな風な話が多いのでせう……どんな氣質が現れて居て？書いたものに——」

「——さあ」

佻は考へて黙つた。そして、どしどし話さないで、少し伸子をもどかしがらせた後云つた。

「——大體から云つて悲觀的でせうね」

「人間を悲觀して居るの？——それとも時代の境遇を不平に思ふの？」

「あの國民は昔から種々な民族にいちめられて來て居ますから、政治的に苦しんで居るのが多く原因して居るでせう」

「——……」

伸子は、彼の専門が學術上に持つ價値や、研究のめざして居る目的などを訊ねた。比較言語學は面白く彼女に思へた。民族の心理や社會組織、文明の消長と切つても切れない縁のある、活きた総合的な研究の一分野として興味を啜るものなのであつた。佻は決して迷惑ではないらしい様子で、丁寧

に、然し何處やら言葉足らずに伸子の訊くことを説明した。彼は小さい手帳を出し、現代文字の標本を書いて見せたりなどした。

彼等は、二時間近く話した。何は聽て見舞ふ病人があるからと云つて立ち上つた。

「——日本人の方？」

「え、さうです。もう大分いゝのですが、毎日一週づつ行つてやることにして居るので待つて居るでせう」

丁度其頃、殆ど世界ちゆうに瀾漫して悪性の感冒が流行して居た。紐育市中でも毎日夥しい患者が腦や心臓を冒されて死亡した。獨逸の潜航艇が、合衆國の沿海へ來て病菌を撒いて行つたなどといふ評判さへあるのは、伸子も新聞で知つて居た。

彼女は佝に笑ひ乍ら云つた。

「御見舞はいゝけれど、御自分で貰つて被來らないやうに」

すると、佝は案外眞面目に云つた。

「私は多分大丈夫でせう、三四ヶ月前に種々な豫防注射をしましたから」

「まあ、どうして？」

「Y、M、C、Aの方から、佛蘭西へ行くことにしてすつかり準備した時させられたのです。窓扶斯や猩紅熱の。——だからうつりますまい」

彼は、重々しく云ひ乍ら、卓子の上から老昔生らしい古くさい山高帽をとりあげた。

「それに、あゝ云ふ病氣は此方の心の持ちやうで違ひます」

どうして戦地へなど行く氣になつたのかと訊きたく思つた。伸子に何の説明も與へず、佝は丁寧に挨拶して、ぎこちない足どりで人ごみの間に隠れた。

伸子は部屋に歸つた。

閉め切つてあつた部屋には、午後の穏やかな斜光とともに、むつとするいきれが罩つて居る。彼女は窓を廣くあけた。そして、帽子をとり、外套を脱ぎ、先づ一休みといふ心持で、長椅子の上に横たはつた。

彼女の兩手は組合はされて頭の下にあつた。その下には坐褥が重なつて柔かく心持よく押しつけられて居る。脇かけの部分が高いので、長椅子は彼女の眼のところ程よい陰翳を與へた。暖い……室内は絶対に物音せず、僅に、開いた窓から氣にならない程度に市街のどよめきが流れて來る……神

經を撫で和らげられるので、伸子は眠いやうになつた。けれども、彼女は寝入りはしない。うつと肩した眼をあげ、閃のない老いた午後の日光の遊んで居る白い天井や小枝模様の濛い壁紙の上を眺める——考へる。何故なら伸子の心から、佝の古くさい黒い山高帽がまだ消えて居ない。……

佝に會ひ、彼と話したのは伸子にとつて興味でない事ではなかつた。旅行に出てから、彼女はそんな種類の話をする機会も對手も、佝に會ふまでは持たなかつた。佝の専門の研究について種々新しい話を聞くのは面白いのだが——伸子は考へた。彼は何故あゝ何か特別な印象をひとに與へるのであらう。彼は、まるで流行に反抗でもするやうに、猶太人の爺がかぶりさうな古びた山高帽を離さない。その山高のやうな特別さ、淋しいやうな満ち足りて居ないやうな何かと伸子の心を牽くのであつた。彼がもう若くないのに貧乏しつゝそのやうな研究を仕て居るらしいのが同情を誘ふのであらうか。或は、自分が生活力の充實を感じて活々とした女だから、逆に暗い彼の存在に興味を覚えるだけなのであらうか。——伸子は、くるりと長椅子の上で腹這ひになり考へつゞけた。

四

二三日置いて、佝は職業紹介所を調べた報告を齎して來た。

南波武二の消息は何處でも得られなかつた。佐々は、更に佝の友人を頼つて、中部の主な都會から發行される日本新聞に同じやうな廣告を出すことを頼んだ。佝は、屢々其打ち合はせにホテルへ出入した。又、伸子がふと話したC大學の講義目録を持つて來て貸したりした。

佝がその印刷物を持つて訪ねて來た晩、伸子は父と、客があつて階下の廣間に居た。伸子は父達の會話を一向楽しんで居なかつた。老人の其客は、伸子がまだ十位の女の子でもあるかのやうに時々じろく顔を永い間見ながら、口ではまるで彼女と無關係な、鐵の話をつゞけた。——ところへ、外套を腕にかけ、帽子を手に持ち、陰氣な顔つきで廣間の端に佝が現はれた。彼女は、活々彼を迎へた。佐々は、佝と東郷といふその老人の客とを紹介した。佐々は、持ち前の愛素よさで、頻りに客同志共通な話題を提供しようとした。佝も、丁寧な態度と言葉で佐々からの話、東郷のやゝ親父ぶつた質問に答へた。が、伸子には佝がちつともしんから愉快にその會話をして居るのではないとがはつきり感じられた。彼が、社交上の義務といふ風で應待して居ることが、伸子に不満であつた。段々その無言

の壓迫が堪へられなくなつて来た。彼女は、何の態度に拘泥する必要が自分にあるのかないのかを願
る暇なく、自分の場所から立ち上つた。そして、父と東郷に

「一寸失禮いたします」

と挨拶をし、側を

「此方へ被來らないこと、目録を來つて來て下さつたのでせう？」

と傍の卓子に誘つた。側は外套の衣囊からかなりの厚みがあるC大學便覽を出して、伸子の横に椅
子を引きよせた。彼等の小卓子の上には後にある背の高い、玉蟲色の笠のついた客室用ラムプから穩
やかな明りがふりそよいだ。

彼女は目録を繰り、面白さうな講義題目を見つけると、その評判などを訊いた。

「あら、こゝに貴方のがあつてよ。——先生、變なお名前ね、どれも」

「あゝそれはベルシヤ人です。シリア人の先生も居ます……ヨハナンといふのがありますでせう、
その邊に」

「——學生はどんな國のひと」

「もう少し先きの方……學生は今二人ぎりです、私と……」

伸子は頁を翻した。成程、學生は二人しか居ない。何と、ミセス、フロラ、シドニスといふひと。

「その女のひとは、もう随分永いこと勉強して居るんです。良人の人も矢張りC大學に居るさうです。
論文を書きたいのださうですが、ドクタア、フォセツトが弱いので思ふやうに進めない、よく怒つ
て居ます——」

「ドクタア、フォセツトもう御老人？」

「さあ——五十六七でせう。ウキスキーと煙草を餘り澤山飲むので、時々倒れます」

彼に三度目に會つた時からの疑問が伸子の心に廻つて來た。彼女はきいた。

「ドクタア、フォセツトは貴方を大事にして被居つて？」

むきつけない質問に側は一寸間誤付いたやうであつた。彼は又、さあと躊躇した後不明瞭に答へた。

「特別大事といふやうなことが云へるかどうか分りません。ドクタア、フォセツトは公平な人ですか
ら——然し數がないし、滅多に此那學課をとる者はありませんから——兎に角よく飽きずにやつて居
ると思つて居るでせう」

「——貴方この間佛蘭西へ行かうとしたと仰云つたでせう？……その時先生は何て仰云ひまして？」
伸子は、きゝ乍ら眞直に側の顔を見

「それはいい、すぐ行けと仰云つて？」

と云つたがまるで詰問でもするやうな調子なのにふと間の悪い顔をして、辯解した。

「いろ／＼伺つて失禮だけれど……」

佃は、別に感情を害したらしくもなく、寧ろ伸子があつけなく感じた平坦さで答へた。

「ドクタア、フォセツトは別に何とも云はれませんでした。先生は、私が一旦云ひ出したらきかない

事を知つて居られますから——」

そして彼は、それが本當の親切だと信じて居る風で

「夫人が大變よろこんで、わざわざ毛糸で編んだもの等を贈つてくれました」

とつけ加へた。

「……」

伸子には、教授夫人の鼓舞が、ありふれた愛國主義者の婦人らしくて不愉快に思へた。彼の周囲

には、さういふ時、親身で何とか云ふ者は一人も居ないのだらうか。

「お友達も賛成なすつたの？」

彼は後じさりでもするやうに伸子を防いだ。

「——私は自分で自分のことを餘り話さない方ですから……」

「それはさうでせうけれど」

伸子は、彼と彼の周囲に對して何か激しく不服を感じた。

「——」

彼女は、せきこんで云はうとした文句を制し、話を違つた焦點に移した。

「私、この間、貴方がそのことをお話しになつた時も、何だか不思議でした——別に強制的にそんな

義務があつたのではないんでせう？」

「さうではありません。……私は、自分の好きなことばかり斯ういふ時して居るのは我まゝすぎると

思つたから、苦しんで居る人の少しでも足しになるならと思つて決心したのです」

佃は、自信ある頑固さうな眼つきをした。伸子は、考へに捕へられた眼で癡つとその眼を見かへし

乍ら、開いたまゝのC大學便覧の上に兩腕を置き、のろい口調できゝ返した。

「自分の専門をつゞけて行くのが我儘かしら……道樂ではないんでせう？貴方のやつてゐらつしやる

こと。本當に自分の仕事なら、私は我まゝと思はないわ……」

「——然し、世界中が苦しんで居る時……」

「私は事情が許す間、本職をやめないでいゝのではないかと思ひます。だつて、戦場で駆け廻ることだけが人間の爲ではないでせう？戦争はどんなに永くたつて激しくたつて一時的の嵐だもの、私達はもつと眼を先につけてやつて行つていゝのだし、やつて行くべきと思ふわ」

伸子は、佝が若し強く自分の考へに信念を持つて居るなら、彼女の此意見は彼を黙らせて置くまいと思つた。彼女は佝の言葉を待つた。が、彼は

「ふうむ」

と唸つたなり、何も云はない。

「——勿論、自分の専門に見切りをつけたのなら話は違ふわね、自分の仕て居たやうなことが現在にも未來にもまるで意味がないと思つたのなら……」

伸子は、第二のさぐりとして之を云つたのであつた。これが、佝の心の底にかくされて居る動機にふれ得るだらうかと。すると、彼は、彼に向つて眞直に進んで來た質問を録し、極めて感傷的な語調で、獨り自分に呟くやうに云つた。

「どつちみち、私は先生の綽名通り苦行僧です。一生C大學の圖書館の御厄介になつて終ることでしょう」

伸子は、引はづされたやうな、驚いたやうな顔をして佝を見た。一生圖書館の厄介になるといふが彼はその考へにちつとも光明や悦びを見出しては居ないでないか。悲しさうでさへある！さげ難い運命だと歎息するやうでさへある。其なら、快活に、熱心に幸福を求める者らしく正直に振舞へばいゝのに、彼は、自分を閉鎖して居る。彼は、何故その大きな矛盾の裡に自分を置いて平氣なのだらうか。何故、どつちかに確かり自分を据ゑて、日光をたつぶり、空気をたつぶり、人間らしく生きようとする氣にならないのだらう。

伸子の若々しい感情は間諛付と苦々しさと可哀さうさの混つた勢で佝に向つた。

彼の顔にいつも變らず現れて居る一つの表情——何かが足りない。心を風が吹き過る、と云つて居るやうな表情——が、彼の全生活を支配するこの異様なこんぐらかりの照り返しであるらしいのを伸子は初めて理解したのであつた。

安樂椅子に埋り、いろ／＼感じ乍ら、そのやうな佝の生眞面目な顔を見守つて居るうちに、伸子は、變に重苦しいやうな、焦立たいやうな亢奮を覺えて來た。

彼女には佝がそんな風にして生きて居るのが平氣で見居られないやうな氣がするのであつた。

五

十一月に入り、都會はすっかり初冬の景色となつた。朝、ホテルの窓から向ひの屋根を眺めると、溶けた霜から湯氣ののぼるのが見えた。勤人や労働者などは、皆同じ舗道でも燦らかに日の照る側ばかりを選んで往來して居る。午後が短く、夕暮が灰色に侘しくなつて來た。夜更けの芝居歸りなど、思はず外套の襟を立て、肩をすくめるやうな氣難しい風が荒々しく市街を吹きまくつた。夏以降、一九一四年からの歐洲戦争の終結が目に見えて迫つて來て居た。

十一月七日の午後、伸子は珍しく朝からホテルに引籠つて居た。

彼女は、晴れやかな晝間の光線を喜び戯れ乍ら風呂に入つた。それからこまごま母へ長い手紙を書いた。晝食を済して再び部屋に戻ると、彼女は切手を貼るばかりの厚い封書の置いてある卓子を廻つ

て、ぶら／＼其邊を歩き出した。まだ二時前であつた。食堂のかへり、彼女は切手を買つて來るのを忘れた。どうせ階下まで又行く位なら、今朝から一遍も外出しない、少し歩いて來ようか。けれども——何處へ？

伸子は、何かきつかけでもさがすやうに、窓をあけて往來を瞰下した。午後の日光が窓々の閉つた建物の眞正面を照し、軒蛇腹のところの厚い金商牌を埃つぼく輝やかせて居る。歩道の赤白縞の日除の下を色彩の強い服装をした女が靴の留金を燦めかせて歩いて行く。藥屋の硝子扉が日を照り返しつゝ開いた。中から二人づれの男が出て來た。一人が、伸子を見て居る窓の正面にある郵便箱に何か入れた。傍で一人が爪先をコト／＼やつて居たが、やがて連立つと、几帳面に角を廻つて横丁に見えなく成つた。尻を振るやうにしてきくりと曲つた後姿に伸子は我知らず笑つた。空気が暖く乾き、軽やかで、ガソリンの匂が心地よく葉のない並木の梢に漂つて居る。伸子は、街路の活潑なほひに心を誘はれた。彼女は窓をしめ、寢室に行つた。そして帽子をつけ、外套を着、さて戻つて出すべき手紙をとりあげた時であつた。

伸子は、異様な音響を聞いた。何處か遠い處で一聲、急に、鋭く、長い尾を引つぱつて汽笛が鳴つたと思ふと、一時に彼方でも此方でも、太い、唸る、頭へる無數の汽笛が鳴り出した。音の林立とい

ふ感じであつた。ボー、ボー空気が濤のやうに揺れる。それに混り、ピーピー悲鳴のやうな他の汽笛が追つかけて追つかけて鳴る。伸子は思はず手紙を握りしめて部屋の真中に立ち竦んだ。何事が起つたのだらう！彼女、本能的に窓を押しあけ外を覗いた。パタン、パタン、あつちこつちの窓が同じやうな亂暴さで明いた。その刹那に見下したプロウド、ウエーほど、伸子は異様に平らな小さい街路を見たことはなく感じた。太陽は先刻と同じ處にある。自動車は走つて居る。然しボーボー、ピーピー。音は火急な何事かを叫びつゞける。

伸子は、窓をすて、廊下への戸をあけて見た。此方でも開いたり閉つたりして居る。先の部屋の前で、派手な部屋着のままの女が、兩手を引しほつて歩き廻り乍ら、ヒステリカルに何か叫んだ。――伸子は、その女でもよい、何が起つたのか訊きたいと思ひ、人影の見える方に向つて歩き出した。すると、ブズー、ブズー、昇降機が急速力で昇つて來た。ガチャン、網戸が開いた。中から、金扣釧の仕着せ姿の男が上半身を廊下に突出し、片手をメガフォンに口の邊に當て、太い低聲で怒つたやうに叫んだ。

「獨逸降服！無條件降服！」
叫んで居る男の頭を打ち破りさうな勢で網戸が再びたゞき閉められた。ブズー、ブズー。昇降機は

つと上へ向つてきりきり昇つた。

伸子は自分の耳が信じられなかつた。

「無條件降服……獨逸降服…………」

伸子は、膝頭がガク／＼するやうな気がした。彼女はもう一遍事實を確める様に窓から外を覗いた。たつた一二分で、かうも光影が變るものか！何時の間にか、旅館の正面入口に大きな米國々旗がつり上げられた。向ひ側の藥種屋でも、或はその上にすらりと並んだ窓々からも、一齊に大小の國旗が今はもう凝つとして居られないと云ふ風に、ヒラ／＼情に迫つてはためき出した。汽笛の音は益々入り亂れ、高まつた。伸子は感動から泣きたいやうになつた。街上を影しい自動車が、悉く國旗を吹き流し、人間を満載し、下街へ！下街へ！先を争つて疾走した。パン！パンパン！その間に爆竹が鳴つた。

伸子は長椅子に腰を下した。

それにしても本當に血腥い殺人仕事は、これで永久に終つたのだらうか？

伸子は、本氣にされないやうな、わく／＼切ない心持で又立ち上つた。彼女は出さうとして居た手紙を卓上に忘れたまゝ興奮して部屋を出た。往來へ、往來へ！

六

昇降機の扉が開くのを待ちかねて乗込んだ伸子とすれ違ひに、黒い外套を着た背の高い男が、此も氣ぜわしさうに片脚廊下に踏み出した。が、入つて来た伸子を見ると

「や」

と立止り昇降機へ後ずさりした。

興奮のためにうつかりして居た伸子は、男の顔を仰ぎ見た。——思ひがけず平野と云ふ佐々の親しい友人の一人である。伸子は平野の手を強く握つた。

「——私共の處へ？」

「留守ですか？」

「ええ。——私一寸其邊へ出て見ようと思つて」

「さうか、——ぢやあどつちみち階下まで行きませう」

平野はエレヴェーター・ポオイに手を振つて合圖した。

然し、此那時獨りで歩くのはよくありませんよ」

「ええ。ほんの其邊」

「其邊でも。——皆氣違ひになつて居るからね」

變にがらんとした廣間では、出るにも出られない侍候達が、氣の立つた眼つきで彼等を見た。

「——どうします？留守に出て御父さん心配されやしないかな」

「帳場へ傳言を頼むつもりだつたんだけれど」

「——凝つとして居るといふのはちと無理かな」

平野はキラ／＼輝く眼で伸子を見、短く笑つた。

「ぢや、どうせ私も何だか落付かないから一緒に少しのして下街の様子を見て來ませう」

彼は帳場へ伸子の鍵をあづけるついでにノートを置いて來た。

「さあこれでよし！と。今晚は一つ御禮にうんとお父さんに御馳走にあづからなくちやならないね」
たゞさへ満員の高架電車は、下街へ近づくと一停留場毎に夥しい乗客を詰め込んだ。

「や、どうだこの押しやうは！」

「グウキー」

乗客の中で、豚の悲鳴を誰かど真似た。ドツと笑聲。

「失禮ですが貴方日本の方ですか」

揉まれて落ちさうになる中折帽の庇に指をかけて平野に聲をかけた皺だらけの老人があつた。

「さうです」

「エヘン」

老人は亢奮の餘り頻りに咳拂ひをし、弱々しく震へる細い聲を強ひて張り乍ら云つた。

「實に今度の平和克復は、エヘン、我々聯合國民として御同慶に堪へませんな」

平野は微笑し乍ら

「いや實際何よりです。何しろ随分待つた揚句ですからな」

と答へた。老人は其を聞いてさも満足さうに頷き、猶も咳拂ひをつゞけた。

お祭り騒ぎの高架電車はレクタア街まで行つた。踏み躪られた號外で足元も見えないステイション

の鐵階子を降りて街上に出ると、伸子は混亂に壓倒され、確り平野の腕につかまつた。巨大な煤けた事

務所建築が、劇務にひしやげた鐵籠のやうに左右に迫つて屹立つて居る。數千の窓々が、一時に開いた心臟のやうに往來に向つて開けつ放しになつて居た。其だけでも既に稀有な觀ものだ。ガラんとした其等の窓々から五色の紙テープが吐き出され纏れ垂れ下つて居る。速記に使ふ黄色い紙、千切れた紐のやうな相場通信紙、一分まへまで、何等かの關係で金を意味した其等の紙屑を踏みつけ、歌ふ、笑ふ、旗を振る男女の群集が緩々練つて居る。事務所の内に人影の見える窓はなかつた。

或角で、車道の真中に一臺電車が乗りすてられたまゝになつて居た。運轉手さへ姿を見せなかつ

た。奇妙に無力なものに見えるその黄色い屋根の上で、二人の浮浪兒が口笛に合はせて踊つた。

狩り集めの急造樂隊が國歌を吹奏し乍らやつて來た。人波の間で

「さあ御祝のしるしに一本！一本いかにです。五仙！五仙！さあ記念に一本！」

兩手に各國の小旗を振りかざし抜目ない商賣をやつて居る男がある。

——自分だけ一足先に抜けたり、街路を突切るなどといふことは逆も不可能なことであつた。片手に小旗を高くさ上げ、片方では確り平野につかまり、體の小さい伸子は前の人間の外套の背中に鼻を擦りつけさうにしながら押されて行つた。

彼等はひとりでウォール、ストリートとブロードウェイとの辻に出た。三方から潮のやうに寄せて

来た大群集は、塵埃にまびれたウオシントン銅像の立つて居る廣場を中心として、どつちにも動かれず、渦巻いた。いかにも劇烈な商業戦場である下街らしく眞黒に穢い柱列の或建物の前で、一人の男が演説して居た。幾重もの群集に隔てられて居る伸子のところまではちつとも聲が届かなかつた。たゞ熱狂的な身振りで動かされる手や、売げ上つた額が辛うじて隠見するだけだ。其が却つて天地に漲る異常な亢奮を代表するやうで、伸子に變に悲しい印象を與へた。此方では、乞食が機械オランダンの把手にしがみついて、齒の浮くやうなワルツを軌ませて居た。それに合はせ、若い、帽子もかぶらない男女が亂暴に舞踏して居る。

誰も誰も顔が上づつて醜かつた。歡ばしい平和を迎へるらしい晴れやかで眞面目で美しい表情をして居る者など、男にも女にも、一人も見當らなかつた。一樣に動物的であつた。ギラ／＼光る眼を据ゑ、口元には酔ひ痴れた薄笑ひと、更に食欲に強烈な刺戟を追求してやまない淫擧を浮べて居るもう自分達の亢奮の原因が休戦の歡喜であらうと宣戦布告であらうと拘はない。欲するのはただ日常生活をでんぐりかへす熱狂だ。忘我に陶醉することだ！——そして前へ！前へ！と彼等は夢中になつて、腹で押す。肩で突く。一時停滞した人波は再びのろ／＼動き出す。文明を爆發させた野蠻な力が露骨に四方から迫つて来て、伸子は怖しくなつた。

「ね、どつちかへ抜けられないでせうか、私歸りたい」

「待つて居らつしやい。——トトトト、どうもこの騒ぎだからね。さ、今のうち！、早く！」

やつと向う側の歩道へすり抜けた利那、右手の横丁から、どつと喊聲があがつた。

「なに？喧嘩？」

平野は、前の男の帽子の鍔に顔をぶつ／＼け乍らのび上つて見た。

「——偉いものを持ち出したぞ、カイゼルの薬人形を擔いで来たんだ」

苦心して、伸子は人の間から覗いた。成程、高い竿の先に、古洋服やボール紙で作られたカイゼルが見馴れた髭を傾けて擔がれて来た。腕に「地獄へ行け！」と書いた札が下つて居る。擔ぎては、巧に竿を振り上げたり寝かしたりした。それにつれて、カイゼルは悲しげに面白可笑しい身振りをする。大喝采の裡に、人形はわつさ、わつさと辻の中央に運ばれた。

「焼いちまへ！」

「さつさと巴里へ行つとくれ」

「軍國主義を焼きすてろ！」

上氣せあがり、舌がひりついた最高音で刺すやうに絶叫した。

「悪魔！私共の子をかへせ！」
 何處からか神經的な歌が起つた。カイゼルの蕪人形は數千の顔の上で愈々愚かな身振をした。第二の喊聲が廣場ぢゆうに轟いた。ぼーつと火の手の上るのが伸子に見えた。カイゼルの格子縞の襦袢を火が走つた。機械オルガンは國歌を鳴らした。青い薄い煙が、初冬の午後の透明な、やゝ物憐れい空に靜に昇つた。微かにきなくさい匂ひが四邊に漂つた。

七

伸子は、何となく滿ち足りない悲しささへ交つた心持で、三時間許り後ホテルに歸つた。
 彼女は、廣間で歸つて来たばかりの佐々と落ち合つた。彼の陽氣さは、傍から苦情の云ひやうない程天真であつた。彼は、確に三鞭酒の機嫌で聲をかけた。
 「どうしました！おかげでいゝ見物が出来て結構だつたな。全く千載一遇の好機だ。これで御覽、も

う一ヶ月もおくれて陸しようものなら、此那素晴らしい歴史的風景なんか一生見られなかつたことになる。——機會だ。平野君のおかげですよ——」
 佐々は感激の遺つて居る熱心な速口で、自分が或實業家倶楽部の晝餐の席で汽笛を聞いたときのことを話した。

「まあ總立ちといふ形だ。何しろ聯合國の代表だと云ふわけで急に祝辭を呈してくれるやら、日本の爲に乾盃してくれるやら、——悪くない氣持でしたね。君は？事務所でしたか？あの時」
 「私は滑稽さ、バスの屋根で立ち往生に會つちやつて、此處へとび込んだんです」
 平野と二人で食堂に行く頃、今夜は特別に裝ひを凝した人群の彼方此方で今日の休戦報告は間違ひだと云ふ噂が傳り始めた。ワシントンの當局では、其那公報などまだ入手しないと夕刊で言明したのであつた。

けれども、夜に入つて市中の雜沓はそんな公報に頓着せず高潮した。
 伸子は、晩食後、夜景を見に出た。自動車の前にも後にも動けなくなつた四十二丁目邊で彼女等は徒歩になつた。

白熱燈の下に、晝間より一層色彩の烈しい人間の狂態があつた。人ごみを、ふら／＼に酔つた若い女

が大股で歩き乍ら、短い棒切れでひよいと、先へ行く男の帽子を突きあげた。男は周章てる。女達は肩を振つて仲間同志ぶつかり合ひ笑ひ崩れた。軍服を着た兵士が、それこそ大酔して、逆に群集を掻きわけて来た。蹠跟として、据りのわるい首を揺つては不躑に行交ふ女の顔を覗いた。が、いきなりどたどたとよろけると、伸子の直ぐ先に居た一人の大柄な女に眞正面から抱きついた。女は叫んで兵士の顔を打つた。彼は呻り、咬き、目を腫つて更に女にとびかゝらうと物凄面構をした。ぎつしり詰つた舗道で、女は右にも左にも容易く身を躲すことが出来ない。黒い影が亂れ、男が怒つた聲で何か叫んだ。伸子は駭いて力まかせに父の腕を引張り、燈柱の影にかくれた。

「歸りませう。よ！いやよ私、此那騒動——」

「ちと、百鬼夜行だね」

徹宵人通りと酔漢の大聲を伸子は窓の下に聞いた。

翌朝の新聞で、前日の報道は全く誤傳であつた事が判つた。本當の報告は、十一日の早朝までに、無線電信で戦地から傳へられる筈であつた。然し、一般は七日に受取つた休戦報告を疑けなかつた。彼等は皮肉混りに「政府はいつも事實より遅れて話す」などと云つた。

十一日の早朝、まだ寢床に居るうち、伸子は父に起されて公式の休戦條約締結報告の汽笛を聞いた。

白い霧のこもつた寒い外氣を顔はせて、彼女の眠いうつとりした耳に、入混つた汽笛が届いた。汽笛の響は、眞面目で、落付いて、七日の午後いきなり空に向つて吹きつけたあの熱情を失つて居た。伸子の心持も同じであつた。感動の新鮮さの失はれた實際的な心持で中途までを聞き、やまないうちにまたぐつすり寢込んで仕舞つた。十三日には、休戦條約修正案が公表された。次で、大統領ウエルソが平和會議の爲佛蘭西へ渡航する計畫に關するステートメントが、喧しい論議の種となつた。

伸子は、殆ど官能に訴へるやうな人間精神の戦きを感じた。一九一八年の冬は、民衆の心の上では春であつた。人間の社會が失つたものを新しい内容と信念で持ちなほさうとした。過去の總決算を濟せた社會は、深く疑ひ、強く建設し、少くとも世界を更に住みよい合理的な處にしようとする熱意が、嘗てない現實性を帯びて湧き上つて来たかのやうに見えた。伸子は、その刺戟を自分の胸に感じた。地平線に新たな光が閃き出した。その光は、如何那影響を自分の生活に與へるであらうか。……

最初、佃を佐々父娘の生活に導き入れた南波卓二の搜索は、終にそれなり不成功に終つて仕舞つた。けれども、いつの間にか佃は彼等にとつて内輪の人となつてその事の後に遺つた。土地馴れても居るので小さい便利が多く、佐々がちよい／＼した事をその後も頼んだ。その用向をもつて、佃は殆ど一日置き位にホテルに出入りする。佐々の居ない時も屢々あつた。彼は、歸りを待つ間伸子と喋る。そ

のやうなことが度重なるにつれ、伸子は何時となし何の身の上について細かい事まで知つた。側は生れて直き實の母に死に別れた、後第二の母に世話を受け、甘越した許りの時或宣教師をたよつて、渡米して来たのであつた。それから凡そ十五年間稼いで勉強する生活を續けて来た。彼の、生活に對する抵抗力の強さうなところ、求めたところで経済的にも時間的にも得られない社會の快樂に對して、ストイックな、同時に何か僻んだところのなくもない侮蔑を抱いて居るやうなところ、彼の身上話を聞けば、はつきりそれ等の心理的原因が理解されるのであつた。然し、側の魂はそれなら本當に氣強く、堅忍主義によつて朗かに安心して居たであらうか。

側が足繁く父娘を訪ねて來、又三時間でも四時間でも飽きず伸子と話して居る。その裡に彼女は側が自然に求めて居るものを告白して居るのを感じた。孤獨らしい側にとつて、自分が幾分慰めとなつて居るといふ意識は、若い女である伸子にわるい心地でなかつた。彼に何か頼むこと、彼にとつて頼まれることは、たゞの事務打ち合はせより何かほんのりした、人情の破片なのであつた。

——佐々の歸國すべき時が追々近づいて來る。伸子は獨り遺るなら遺るやうに身の振り方を決めて置かなければならない事になつた。何でもない問題と思つて居たのが、さてとなると彼女に容易に決定出來なかつた。父娘の間に、夜など折々話題に上つた、

「私ももう永くて後一ヶ月居られるか居られないのだが——何か適當な家庭がないもんかね。ちやんとした處へ落付いて呉れなけりや、男の兒と違つて放ぼり出しても置けんし」

「さうなの。私男の子に生れてた方が餘程よかつたわ」

「ハツハツハツ。母さんと二人でさう云つて居れば世話がない。——……チエツトウッドさんのところで世話になるのはいやですか」

「さうねえ……」

チエツトウッド博士はC大學の美術部の教授で日本の錦繪などに詳しかつた。佐々とは永年の知己なのであつたが——。伸子は、白レイスの肩掛をして、熾に政談を戦はして居た老夫人の險のある世話焼らしい顔つきを思ひ出した。

「私、閉口しさうだわ」

「ふうむ」

佐々も他に心當りはないらしかつた。そして、きまつて終りは斯うであつた。

「英吉利へさへ行つたらなあ、何の事はない、ミセス、レイマンが孫のやうにして萬事やつて呉れるんだが。——ミセス、レイマン——あの面白い書體でよく手紙をよこすお婆さんお前も知つて居ませ

ろ？私が居た頃、よくお前のよこす手紙なんか見せてやつたんで、今でもリットル、ノブはどうしたと云つて来る……」

伸子が落付き場の選定に苦しむのは、又他に理由もあつた。父について紐育へ来たのも、彼女は自分欲する通りに生きて見る機会を得たいのが主な動機であつた。佐々の家で伸子は長女であつた。勝氣な母の多計代の私な大望の偶像にされさうなところがあつたり、中流家庭の娘として、伸子が望むだけどしく、人生に突入することを許さない掣肘があつた。このまゝでは、自分が半分も生きるだけ生きて居ない。生活が未だ始つて居ないといふ意識が、少くとも過去三年彼女を苦しめつゞけて来て居た。(伸子はその時西洋流に數へて十九歳と數ヶ月になつて居た)父が旅行する、お前も一緒に居てよい。……：：：兩親が彼等の間でどのやうな相談をし、どのやうな意圖でそれを決定したにしろ、伸子にとつては、親の家を離れて生活出来るといふ丈でも大したことなのであつた。

十一月十一日の休戦布告後はよかれ、悪しかれ劃時代的な社會の騒音が、ホテルの窓硝子を叩いて伸子の心へも傳はつて来て居た。自分も、今までの寒くもなければ暑くもない、圍ひの裡の植物のやうな生活は棄てたい。その望を遂げる爲に、此から半年なり一年なり身を置く環境の選擇は伸子にとつて難しいのであつた。

大學近くのアパートメントに部屋借りをして暮して居た中西を訪ねて様子を見などした揚句、伸子は遂にチエツトウッド博士の意見通り、C大學附屬の寄宿舎に入る決心をした。その寄宿舎には安川も居た。

「何も經驗だから結構だ。暫く居ていやになつたら又其時何とか思案もつかうから、いゝさ」

「安川さんの話では夜芝居へなんか行くのだつて、断りさへすれば許して呉れるのださうだから、私いゝと思ふの。たゞ聴講生にならなければ入れないんですつて」

「それもよからう」

「……：：：二三日うちに行つて見てきめるわ。——佃さんに來て貰つてよくて？」

「暇なら頼んだつてかまふまいよ」

佃とC大學の登記掛へ行つたのは、暖く晴れた或月曜日であつた。彼等は學生等に混つて、公孫樹の植つて居るベエヴメントを彼方へ行き此方へ行きして登録をすませた。若い女學生が本を抱へて元氣に髪を風に吹かれ乍ら歩いて居た。伸子は

「私何だか少し楽しみになつて來たわ」

と、並んで歩いて居る佃に云つた。

「やつぱり學校はいゝわね。可笑しいでせう？斯那ところへ來ると私うんと勉強でもしたい氣になつてしまふの」

佃は、山高帽の頭だけを小さい伸子の方に傾け、軍隊教練を受けた人のやうに胸を張つて歩き乍ら、丁寧に答へた。

「——おやりになつたらいゝでせう」

伸子は笑ひ出した。

「私のやうに楽しみすぎの人間は逆も安川さんのやうに勉強出來ません。——たゞ私はいろいろなものに興味を持つといふだけよ——貴方こそ確りなさるといゝわ。——今何？」

「經文の翻譯です。昔拜火教徒が使つた呪文のやうなものです……」

「面白くて？」

「さあ……」

「たゞの参考品？——初めて貴方が御譯しになるの？」

「すつと昔にフランス人で譯した人があるんですが間違ひだらけなのです。それで今度やつて居るのですが……」

フォセット博士の研究室だといふ建物の横の枯芝生で、栗鼠が長閑に遊んで居た。C大學は市中にあつたが、構内のところ／＼に廣い芝生や並木道などがあり、牧神の鑄像のついた噴水なども見られた。彼等は大學の正門からプロウドウェイに出た。百十六丁目の地下電車のステイションが直ぐ目に入つた。

「——どうなさいます？ホテルに直ぐ歸りますか」

「さうね」

小春日和の街を見渡すと、伸子はホテルの部屋の窮屈さを頭の中に感した。

「——貴方御忙しいのぢやなくて？若し何だつたら私眞直ブラ／＼歩いて歸りますから、どうぞ御自由。……有難うございました」

「いえ、私はどうせ午後明いて居るのですから」

佃はいそいで伸子を追ふやうに云つた。

「では——リバアサイド、パークにいらしたことがありますか」

「いゝえ」

「ぢやあそこを抜けてホテルまで御送りませう」

八

車道を突切り、もう一つツルく、広い道を彼方へ抜けると、歩道に沿うて灌木の茂みがある。庭園の小徑らしく拵へた道がその植込みを縫つて居た。彼等は悠くり並んで其方へ降りて行つた。公園の芝生を縁どる散歩道から一目でハドソン川が見晴せた。

うつとり冬の太陽にぬくめられたハドソン河が流れる。重く軟い広い水面が眞珠色に輝いた。洋々と海に入る河下は一面霞んで居る。遠い對岸に冬枯れた疎林が薄靄くぼやけ、鷗に似た鳥が一羽伴侶もなく翔んだ。仄かな水の匂ひが伸子に懐しく新鮮な喜びを感じさせた。

「——静かね」

「今一番人の出ない時間ですから」

絶えず右手に河を見晴しつゝ、彼等は下街に向つて歩いた。

「學校からもホテルからも近かつたのに、私ちつとも知りませんでした、こんなに好いところがあったの。——散歩する場處が殖えてうれしいわ」

行く道にもところどころに居心地よささうな芝生や植込みがあつた。

「この公園は小じんまりして居ていゝわね」

すると佃が神経質な語調で遮るやうに

「此方では餘り獨りでお歩きなさらない方がいゝです」

と云つた。

「さうお？晝間でも？」

「碌でもない奴が居ますから」

「あゝそれはさうね」

伸子は佃の注意の意味を諒解して素直に答へた。

「それは氣をつけます——でも……日本の人は大丈夫でせう」

佃は一層疑はしげに、非常に意味深長に

「さあ………」

と返事を躊躇した。

「まあ段々お解りなさいませう」

充分根據はあるのだが、禮儀上控へて置くのだと云つた風な個の答へが伸子に好奇心を起させた。暫く黙つて歩いた後、彼女は訊いた。

「貴方は此方に居る日本の人のこといろ／＼御存じ？」

「知つてゐる積りです」

伸子が繼いで云はうとするのを、個は引たくつて

「大概狼のやうな者達ばかりです」

と短く斷言した。伸子は、思はず頬笑んだ。「狼——」。

彼女は速度な散歩後の氣輕な心持で、自分の室へ歸つて来た。馴れた無頓着で、いつも通り鍵を右に廻した。カチリ、變な抵抗が手先に傳り、扉は開かない。伸子は屈んで鍵穴を見た。次で念の爲把手を廻して見た。戸は難なく内側に開いた。錠は掛つてゐなかつたのだ。女中でも掃除に来て居るのだらうか——

伸子は、怪しみながら客間に歩み入つて四圍を見廻した。すると、全く思ひ設けない佐々の聲が寢

室の中から彼女を呼び迎へた。

「伸子か？」

伸子は、今までの爽やかに暢々した氣分が一時に飛去る愕きを感じた。佐々は今朝九時に彼女と個と三人で旅館を出た。夕刻まで歸る筈がなかつたのに。——伸子は、急いで其方へ行つた。

「どうなすつたの？」

佐々は、寢臺の上に蒼ざめた顔で半身起上つて居た。彼は伸子を見て、いつもの輝やいた暖い笑顔をしようとした。が、餘程氣分が悪いと見え、微笑は途中で消えた。父の眼に現れて居る不安を認め、伸子も不安な心配な心持になつた。彼女は、知らなかつたとは云へ自分が公園でぶら／＼いゝ心持に時間潰しをして居たのが濟まないやうになつた。

「いつお歸りになつたの？」

彼女は、寢臺の端に腰かけて父の手を執つた。

「もう卅分ばかり前に歸つて來たのさ急に。——どうも氣分がわるい。——ひどく頭痛がするし熱があるらしし」

「どれ」

伸子は、父の額に觸つて見た。かなり熱かつた。

「寒氣がなさる？」

「正金に居ると、どうもぞく／＼するんでね、此奴は怪しいと、いそいで自動車で歸つて来たのさ」

佐々は、言葉をきり、自分の容態を熟考するやうな顔をした。彼はやがて強ひて冗談にまぎらすやうな調子で獨言した。

「感冒かな——到頭とりつかれたかな」

伸子は、心の中が冷えるやうに覺えた。彼女も父の聲を寢室に聞いた瞬間其を思ひ、ぞつとしたのであつた。秋から流行して居る悪性の感冒は未だ猖獗して居た。多くの流行病は、終りに近い程病毒が輕微になる筈なのに、今年の感冒は逆であつた。澤山の新患者に澤山の死亡者があつた。一生懸命な泰然さで、伸子は

「さうかも知れないわ。でも早く氣がおつきになつたから大丈夫よ。——氣を確り！」

そして、急に母親になつたやうな確乎とした快活さで

「私はいゝ看護婦だから安心してまかせて被居い」

と云ひ乍ら、手早く外の仕度を脱いだ。

佐々は伸子の歸るのを待ち切つて居たらしく、彼女が外套をぬぎに次の間へ行き、聽て戻つて手を洗ふ、その一舉一動を目で追つた。

「そこにあつたのか、私は又大きいトランクの方かと思つて探したが見つからなかつた」

などと云ひ乍ら、彼は自分から寢衣をくつろげ伸子に検温器を腋に挟ませた。

卅八度九分あつた。

「どの位あるかい」

伸子は検温器を振つて水銀を下して仕舞つた。

「——大したことないわ……口がお乾きになるやうだつたらアイスウォーター云ひませうか」

暫くして伸子は云つた。

「澤村さんに來て貰ひませう。ね」

「……よからう」

佐々は伸子の顔を見るまでは氣を張つて居たらしい。心が弛むと口を利くのも大儀さうであつた。二つ重ねた羽根枕の上に火照つた顔をのせ、時々太息をついた。

醫師が來るまで小一時間病人と二人ぎり、伸子は名狀し難い孤立感を覺えた。この大都會の生活

と自分達の生存とはいざとなると何と無関係なことか。周囲の冷然とした感じが伸子の心に徹へた。

九

佐々の病氣は、伸子も見當をつけた通り目下流行の悪性感冒の初期といふ診断であつた。澤村は家庭醫らしい物馴れた調子で云つた。

「然し決して御心配なさるには及びませんよ。極めて輕微な兆候が現れたばかりですし、やつぱり斯ういふ病氣は、かゝる人の平常の健康状態によりますからな。貴方なんぞ榮養はおよろしいし、痼疾はおあんなさらないし——大丈夫、十日もすれば御全快でせう」

佐々は、ホテルでは不便だから、入院してもよいと云つた。

澤村は寢臺の傍に立つて居る伸子を眺め乍ら

「立派な看護婦さんがおいでらしいから、却つて今お動きなさらん方がよろしいかもしれませぬ。

——尤も、家へ来ていたゞいた方が儲りますがな、ハツハツハと笑つた。

藥劑師の買物やさしづめ澤村へ薬とりに行つて呉れたりする者は何しかなかつた。伸子は彼に電話をかけた。

佃は間もなく薬品類の包みを抱へて現れた。彼は伸子を助け自分の立場を理解して居るものゝ自信を以て振舞つた。佐々は夜少量の葡萄酒を飲んだ丈であつた。佃と伸子は食堂へ行つたが、華やかに装つて談笑する人々、燦々食卓の光景は、今まるで彼女の心に迫る力を失つて仕舞つた。佃は「餘り御心配なさらない方がよろこびます」と伸子を慰めた。

「私は度々もつと悪い人を見て居ますが——違ひます。眼がひどく血走つて居るだけでもすぐ見分けがつきますから、本當に御心配なさらないで大丈夫です」

四日間、佐々の病勢は次第に充進した。三日目など側に見て居る伸子さへ息が樂でない程、病人は苦しうであつた。咳は殆ど出ない、たゞ四十度を上下する熱と烈しい頭痛が襲ふのであつた。體の關節が悉く疼んで、寝がへりを打つてのさへ一人では出来なくなつた。それでも、佐々は一言の苦痛

も娘には訴へず、耐へようとして居る。——父親の情愛から生じたその忍耐は却つて伸子の魂を壓しつけた。父は病弱い人であつた。母でも居たら決してこれで済む筈のないのが、伸子にはよく判つて居た。その上、彼も感情の鈍い人ではない。外國のホテルで、油斷出来ない病にかゝつた。暗い想像が、たゞの一度も彼の腦裡を掠めない、どうして云へよう。伸子は屢々その不吉な想像に苦しめられた。其故感傷を制御しようとして居るらしい父。いつか眠りに落ちた父の寝顔など、凝つと見て居ると、一しほ心を撲つものがあるのであつた。

佝はホテルの佐々の部屋で過す時間が、他の何處で費す時間より一日中で長い有様になつた。彼は先づ朝来て、一通り必要な買物をした。濕布の交換などを手傳ふ。大學に時間があると一旦去り、三時か四時、或はもつと早く再び訪ねて来る。そして大抵夜まで止まつた。病人の寢臺の左右に黙つて永い間腰かけて居ることがある。熟睡した病人のところから忍足で次の間に來、沈黙勝ちに茶を飲むこともある。そのやうな時、カサツとシーツが鳴るやうな音がしても、神経質になつて居る伸子はぎくりとして耳を欬てた。佝は直ぐ彼女の心持を察したらしく、席を立ち爪立つて境の垂帳の間からそつと病人を覗いた。又そつと垂帳を元通りに閉ぢ乍ら、彼は頭を横に振る。伸子は病人が何事もなくやはり眠つて居るのを知つて頷く。………佝が其那長時間を彼女等とともに過すことが、伸子に何

の不思議も感じさせなかつた程、彼は生活に必要な人となつて居た。佝が餘り暇つぶしをすると、心配して病人が

「どうもとんだ御迷惑をかけますな。今日は大分業ですから、どうぞ御遠慮なく……伸子よからう？」などと云ふ事があつた。けれども、佝は落付いて答へた。

「私はいそがしければ勝手に失禮致しますから、氣をお揉みなさらない方がよろこびます。精神の安静が大切ですから」

六日目位から、ほんの少しづつ、然し、ぶりかへすことなく病人の熱は下降し始めた。醫師は、胸を打診し、舌を検べ

「さあこれで今度こそ大丈夫です」と確言した。

「もう時は立派に越しましたから、後は豫後ですが……」

衣裳棚の前に立つて居る佝の方を、時々好奇心をもつて偷見るやうにし乍ら、彼は云つた。

「貴方のこんなのは謂はゞ麻疹の輕いのみたいたいものでしてね、これですんだと油斷すると、又ぶり返して却つて豪い目に會ふことがあるものです。——紐育の風は有名ですからなともこれからは……」

十幾日ぶりで佐々が初めて次の間の長椅子まで起きて来た時、伸子は嬉しく
 「萬歳！萬歳！」

と叫び乍ら其處いらを跳び廻つた。

「御覽なさい父様、私随分いゝ看護婦だつたでせう？」

「よしよし」

佐々は伸子の手を捉まへて自分の傍にかけさせた。

「さあもうお母さんのところへ手紙を書いてやつてもいいぞ」

嬉しい。安心した。感極つた涙がはら／＼伸子の頬を轉がり落ちた。彼女は泣き笑ひし乍ら減茶減

茶に父の腕の下へ自分の頭を突込んだ。

佐々は手間どつて恢復期を進んだ。一三分のところまで平熱にならない日があつたり、時々まだ劇し

い頭痛が再發したりした。佐々は、初めての日こそ勇み立つて次の間まで出て来たが、翌日から、

洗面所へ立つただけで矢張り終日臥床して居た。然し、いづれにせよ恐ろしい時は過ぎ去つた。種々な

人が彼の寢臺の周圍に出入りし始めた。笑聲もした。茶器が運び込まれる。伸子は最も恐怖や不安や

必要に満ちて居た時は自分達から遠のき、鳴りを鎮めて居た世間が、再びさり氣なく姿を現したのを
 見る、一種の清新さと皮肉とを、日常生活の復歸から感じた。

此頃、朝の寒さはなかく／＼厳しい。伸子は氣疲が出た故か、毎朝床離れが辛かつた。充分眠つた
 筈なのに、目が醒めても筋肉が弛緩して居るのを感じ、背中がベッドに貼りついたやうに起き上り難
 い。晝近くまで愚圖ついて居る事があつた。さういふ或朝、伸子は勇氣を出して、七時少し過に床を
 離れた。どうしても九時迄にBカレッツチに行かなければならなかつた。前日、學生の指導をして居る
 ローレンス教授から葉書が来た。十五日も前に、英文學と社會學を聽講する届をしたぎり父の病氣で
 放つてあつた。其等の細目について話したいから来いと云ふ通知なのであつた。

伸子は睡眠不足で變にゾ／＼する體を外套に包み、珈琲に玉子を食べたぎりで出掛けた。出勤時
 刻で、地下電車のステイションには新聞と鞆を抱へた男女が群れて居る。伸子は丁度來合はせた急行
 に乗込んだ。ホテルからは甘分足らずで大學まで行ける豫定であつた。百十六丁目といふところで降
 りた。プラットフォームの工合が、この前個と降りた時と少し違つて居るのを訝り乍ら、改札口を抜
 け往來に出た。街頭を一瞥し、彼女はさてと途方に暮れた。街は百十六丁目に違ひないのだが、それ
 がプロウドウェイでないこと丈は確實であつた。ステイションの廣場からC大學の建物が見えるどこ

ろか、街路の左右に並んで居るのは倉庫のやうなものばかりであつた。一緒に地下から吐き出された人間はさつさと冷淡に其々の角を曲つて消えて仕舞ひ、古新聞が散らばつた朝の穢い歩道を疎にのろろ歩いて居るのは、縞ズボンに黒上着烏打帽子といふいでたちの男か、働きの労働者だ。

伸子は決心し一圖に上街に向つて歩き出した。學校は百廿丁目にあつた。この通りを百廿丁目まで溯れば、右か左かにプロウドウエイを繋ぐ横通りがある筈だ。散々歩いて彼女はやつと一人の交通巡査に會つた。そして、初めて自分が電車を間違へ、プロウドウエイよりすつと東に来て仕舞つて居たのを發見した。

ローレンス教授は日本にも來たことがあるさうで、伸子の迷兒になつた話にひどく同情して笑つた。用件は、英文學としてとつた時間のうち一部を自由作文にしたら爲になるだらうといふ勸告であつた。彼女は、其爲にミス、ブラットといふ人のところへ紹介された。

十

ローレンス教授は、日光や鎌倉のこと、左馬五郎の眠猫が鳴くといふ云ひ傳へなど思ひ出し、ローマの何とか云ふ寺院では、壁畫の天使がその教會の檀家で死ぬ人があると枕邊に立つといふ傳説があるなど話した。伸子は、話の間から段々頭が痛んで來た。普通の頭痛とは異つた。額から後頭まで籠でもはめるやうに締めつけられる感じであつた。時を切つてその締めつけが強くなると、眼球を動かすのさへ辛く成つた。眼球が硬くつて動かさうとすると痛い、さういふ氣持だ。

室内の温度が不自然に高かつたから、平常健康な伸子は初めたゞ上氣せたのだと思つた。散歩して血液循環をよくしたらよからうと思ひ、彼女は外に出ると、日向の歩道をホテルの方に歩き出した。麗らかな十二月の眞晝だのに伸子は悪寒がして堪らなくなつて來た。背骨から全身に胴震ひし、種々な刺戟——自動車の警笛から、靴の小さい踵を傳つて來る舗道の堅さまで、皆恐ろしい容赦なさで頭に

響く。ちやんと眼を開いて居ようとするのが先づ努力であつた。行き倒れになる心配さへしなかつたら、一刻も早く、何處でもよい、暗い隅に頭を突込んで眠つて仕舞ひたい。………彼女は頼りなく弱々しい泣きたい気分になつて或街角から電車に乗つた。電車は黄色い車體を悠長に日に照らし乍ら、少し走つたかと思ふとガタン、又ガタン、小五月蠅く一丁目毎に止り乍ら進む。藤を張つた冷たく堅い座席の上で、眼を瞑り、伸子は動搖につれてこみ上げる嘔氣をやつと堪へた。彼女は半分意識を失つたやうになつてホテルの部屋に戻つた。

寢室では、佐々が枕に靠れて起きかへつて居た。佃も居て、彼は壁の前に立つて何か話して居る。

伸子は、どちらをも見ず

「たゞ今」

と云つた。帽子を脱ぐと彼女はそれを放り出すやうに父のベッドの裾の方に置き

「私気分がわるくて仕様がなないの」

と訴へた。父の顔を見たら、泣きたい心が募つた。陽氣に喋つて居た佐々は、伸子の泣き聲で、本當に愕ろかされた。

「どうした」

佐々は伸子の額に手をかけて顔を自分の方に向けさせた。
 「何といふ色だ、この顔は！寒いのかい？え？何？苦しい？そりやいかん直ぐおやすみ、さ、すぐ此部屋でお寝」

伸子は、それに答へずむつとりし、鏡覗みのやうな眼つきで佃の服装をじろく見た。彼女は、とつてつけもなく

「馬にお乗りになるの？」

と訊いた。佃は上着だけ背廣を着、下にカアキ色の粗織褌衣と膝まである長靴を穿いて居た。佃は伸子の問ひに却つておどろいたらしく

「あゝこれはY・M・C・Aの服です」と手短かに答へた。

「——おやすみなさるがいゝですよ。……疲れが出たのでせうきつと——心配されたから」

彼に手傳はれて伸子は外套をぬいだ。

「さ、隣りへ来ておやすみ」

父は隣りにもう一つあるベッドの方へ體を動して、その上覆ひをはねた。

「あつちがいゝわ」
伸子は仰に引立てられるやうに足を引ずり乍ら自分の寢部屋へ行つて戸をしめた。
「あ、どうか鍵をかけて仕舞はんように云つて下さいませんか」
といふ父の聲がした。

寢衣のつめたいこと！シーツの冷や／＼すること！冷たく、寒く、餘り寒いので、伸子はウワ、
、歯を鳴らし乍ら出来るだけ小さく自分の體を縮めた。頭は石になつたやうに苦しい、あゝこの頭を
誰かに撫でて貰つたら！もつと暖かく暖く懸けものをかけて貰つたら、どんなにいゝ氣持になれるだ
らう！……………

誰も居やしないし、此那懸けものしかありやしないし……………寒い……………濡れた鬼だ。本當に濡
れた鬼だ。伸子は子供のやうに枕に顔をすりつけた。

「母さま……………母さま……………」

伸子は段々ぼーつとなり乍ら眼尻から涙を流した。

フツト伸子は我にかへつた。四邊はもう夜であつた。電燈が煌々として、父が和服のまゝ困つた
やうに立つて居る。彼女は眩しく、寢返りを打ち乍ら、父もまだ無理をしてはいけないのにと心配を

感じた。それを云はうとしたが聲が出ない。又寢がへりをしなほさうとしたはづみに、百尺もあると
ころを墜落したやうに頭が痺れた。再び渾沌が来た。悪寒はやんだ代りに高い熱と痙攣が起つた。
體が妙に突き上げるやうな不可抗力でヒクリ、ヒクリ、そり返る。體ちゆう噓をする。伸子は其度
に悲しげな、斷れ／＼な叫びを上げた。彼女は何かに確り捉まりこの苦しい疲れる衝動を制したかつ
た。然し何處にも手應へがない。頭の裡も外もフラツシユライトに取巻かれて居るやうに一面の光の
渦巻だ。その光の海は絶えず揺れる。閃く。走り廻る。いそがしい。明るい、明るくて苦しい。
「疲れるわ私……………眠らせて。眠らせて」

彼女は讒言を云ひつゞけつゝ、頻繁に引つけた。意識が明るくなり暗くなりした。

午前二時頃、全く夢中な伸子がホテルから病院へ擔ぎ込まれた。自動車の中で彼女は一度正氣づい
た。彼女は自分が病院へ行く途中にあることを理解した。けれども誰が自分をこのやうに抱きかゝへ、
頭にクツションを當てがつて居るのだらう、ゴロ／＼して痛い眼を開き、薄暗い中で熱心に對手を注
視した。側であつた。彼は伸子が眼を開いたのを認めると、子供を賑すやうに彼女の體を膝の上にゆ
り上げつゝ云つた。

「苦しいですか？もう少し我慢して下さい。今すぐ樂になりますよ、直きですよ……………」

伸子は眞夜中、病室ですつかり衣服を更へさせられた。夜勤看護婦と入れ違ひに佃が入つて来た。彼は伸子の額を撫で乍ら

「さあ此處まで来たからもう安心です。……安心しておやすみなさい」と云つた。

「——大丈夫です、私が此處に居ますから」

どうかしてぐつすり眠りたく、眠りで苦しさを逃れたい伸子は、眼を瞑つた。眠りさうになると痙攣が襲つた。體がびくりとする。その度に彼女は先刻と同じやうに叫びた。

「眠らせて……眠らせて……」

「あゝ眠れますよ、さあおやすみなさい」

伸子はいつかそれでもとろりとした。體の節々が溶ろけるやうになり、心が暗い遠い居心地よいと

こへ引込まれるやうだ。伸子は、髪のもしやくになつた頭を枕に落し、一つ躰をかきさうになつた。妙な感覺で彼女は半醒した。何かと頭に觸る。不意に柔く永く一つの唇が彼女の唇に押し當てられた。全神経が目醒めた。佃の存在が焙きつくやうに避つた。伸子は體ぢゆうに新たな戰慄を感じ乍ら、再び氣を失ひ乍ら、佃の頸に兩腕を巻きつけ彼の唇に自分の唇を押しつけた。

誰かど、伸子の腕に觸つた。

「さあもう朝になりましたよ」

そして伸子の腕を佃からはなさせた。

「今度は私が居てさしあげます、この方もお寝みなさならなければなりませんからね」

他愛なく枕の上に腕が落ちた。伸子は視點の定らない熱にうかされた眼で看護婦を見た。室内に流れる冷たい灰色の拂曉の光線を感じた。伸子は反射的に咬いた。

「さう——朝になつた」

自分は眠つたのか眠らなかつたのか一向はつきりせず、たゞ一晩中齧る大波に揉れて居たやうな心身の疲勞を極度に感じた。眠い、やたらに眠い。

「さうさう、いゝお嬢さんですね、おやすみなさならなければいけませんよ」

伸子は、微かな歪んだ頬笑を浮べた。佃の聲がした。

「——それでは又參ります。何か持つて来るものはありませんか」

重い睡眠の中へ引込まれるやうな感じと戦ひ、伸子は辛うじて注意をまとめた。

「ぢやあ箱をもつて来て——青い革の——櫛や何か入つてる。——それから、父様によろしく、一粒の丸薬をのまされた。仰はもう居なかつた。矢張り時間の知れぬいつか、嘔きたい程不味いコアを二匙のまされた。」

伸子は不圖ひそく戸口のところで何か云ひ争つて居る人聲で目を醒した。夕方なのか四邊は薄暗かつた。薄暗い中に険しい調子が響いて居た。

「どうぞ話しはなさらしないで下さい。」

「そんなことは私の自由です。私はちやんとあの人の父親からたのまれて出入りすることを許されて居るのです」

「え、それはよく承知して居ます。ですから、部屋にお入りになるのはよろしいが、どうか病人に口を利くだけは御遠慮下さい。絶対に神経を休ませる必要があるのですから」

佞が入つて来た。寢臺の上の伸子を見下し乍ら、彼は聽て普通の人に云ふやうに

「どんな工合ですか」と云つた。

「Oh! Please don't!」

伸子は彼が變に頭張るのが看護婦に對して耻しいやうな氣がし、厭かれてちつとも嬉しくなかつた。彼女は泣きたいやうな頭の中で呟いた。

「どうしてあの人は口を利くのだらう」

黙つて居ると、佞はもう一度押しつけるやうにきゝなほした。

「いかゞですか氣分は」

伸子は其に答へず、悲しげに咎めた。

「何故貴方はものを仰云るの?」

いきなり神経的な涙が臉一杯になつた。伸子は滅入つた氣持を感じ乍らそのまま眠つた。

八階の頂上に寄宿舎の食堂があつた。其室は建物の翼の出張りにつれて奥の方で擴つてゐる。今、晩餐の最中であつた。白布をかけた數十の卓子と、其を取繞んで坐つて居る夥しい娘達。さわめき、陽炎のやうな話聲、笑聲、食器のふれ合ふ音等が空中へ鳴つた。伸子のところから大厨房に通ふ扉の一つが見えた。その扉は絶えず開いたり閉つたりする。給仕盆を抱へた給仕女が出入りに靴の爪先で扉を蹴る度に、料理女の姿だの、大鍋のかゝつた料理ストウブだのがちらりと見えた。暖い臺所の風も来る。伸子の卓子は八人詰であつた。が、そこにはいつも七人しか居なかつた。彼女は今夜特別安川に會ふことを楽しみにして居た。咲子の顔を見たら、

「あゝお腹が空いた！」

とでも何とでも呑気に喋つて、朝からの減入り込みを退散させることを楽しんでゐたのであつた。

けれども、咲子は、一寸おくれて入つて行つた伸子を見ると、行儀よく二つの腕を腕の下で組み合せてまゝ軽く首を傾け、外國人の友達に對して通り、

「今晚は。——如何？」

としきたりの挨拶をした。

伸子は空腹でゐながら味の無い夕食を食べ始めた。

その朝、伸子は十時から十一時まで十九世紀の英文學史の講義に出席した。時間が終ると、彼女は急いでアヴェレー・ホールへ行つた。其處は、美術、建築等に關する圖書館兼研究室であつた。

寄宿舎に入つて數日後、伸子は偶然安川を探ねての建物へ來た。安川は、日本の美術圖案に古來使用されて來た便化の傳統をこゝで調べて居たのだが、人氣ない静けさ、建物の小ぢんまりした工合が伸子の氣に入つた。大圖書館は壯大な代り、内部が議事堂のやうでひどく落付き難かつた。伸子は翌日から讀んだり書いたりに來ることにした。佝も此處へ來た

伸子は、毎朝のことだが一種速まる鼓動を感じつゝ、大衝立で通り路から遮られた一つの机に近よつた。佝はもう自分の講義に出で行つた後であつた。机の上に見馴れた彼の黒革靴が遺してある。伸子は、彼が後程再び此處へ來る積りで居ることを理解した。伸子は小説を讀み始めた。

數頁讀み進んだ時、衝立の外に軽い女の聲音が止つた。

「おや——こゝだつたの」

伸子は驚いて頭を擧げた。帽子も外套も黒づくめで、皮膚の美しい顔が猶引立つて見える珠子がそこに立つて居た。

「まあよくわかつたこと！ さあ」

伸子は中西の兩手を執つて、自分の隣りにかけさせた。

「いつ歸つていらしたの」

「昨晚、十一時過に」

互に顔を見合はせ何となし彼女等は莞爾ついた。

「どうだつて？」

珠子は一週間ばかり前から、ポストンの許婚の處へ行つて居たのであつた。

「ようござんしたよ、こゝから行くそりやあ静かね、宿でも氣持がよかつたわ落付いて居て……」

「御丈夫？」

「有難う、元氣だつたわ」

珠子は、冷たい外気に觸れて来たばかりの活々とした顔に新鮮な歡びを耀やかせ乍ら、持前の打ちあけた親密な態度で云つた。

「それに私行つてよかつたわ、今の人そりや素晴らしい研究を始めたところなのよ、出来上れば逆も有望らしいけれどなか／＼なんですつて。だから私が行つたのが大變勵ましになつたんですつて……」

彼女は、聽て艶々した體で、撫でるやうに眞正面から伸子を見守り乍ら、

「どうなのその後、あなたがたの方は……」
と訊いた。

「……」
伸子は、苦笑とも極りわるがりともつかない複雑な笑ひ方をして頭を曲げた。

「まあ大抵同じことだわ」

「——今日は？来てゐらつしやるの？」

「今時間で行つて居るらしいけれど——あゝ貴女御晝一緒に食べませうよ三人で——久しぶりだから……ね？」

「ありがたう——だけれど——何時？今……」

珠子は一寸腕時計を見た。

「今日はさうして居られないわ、これからブレンタノへ行かなければならぬから。それより大事なお傳言を頼まれて来たのよ。あなたこの土曜日何か御約束があること？」

珠子が近頃親しくして居る横尾、樋口といふ青年等が、彼女と伸子とをオペラに招きたいといふのださうだ。佃と同じ俱樂部に彼等も居て、折々伸子も口など利いた。

「さうね」

「サムソンとデリラですつて——」

曲目をきくと伸子は行つて見たく成つた。然し、土曜日と云へば誰でもが特別賑やかに過したい夜だが——佃は如何するだらう。彼一人放ぼり出して行くのも心残りのやうな氣がして返事を躊躇して居る處へ、佃が入つて来た。伸子は挨拶がすむのを待ちかねて、佃に今受けた招待のことを話した。

「貴方どうなさること——私少し行きたいんだけど……」

立つたまま喋つて居る珠子や伸子にかまはず、佃は椅子にかけた。伸子の云ふことを仕舞ひまで聴くと、彼は不機嫌さうに、

「僕は勿論招ばれては居ないんでせう？」

と反問した。珠子は喫驚したやうに伸子を見た。

「今度は私だけよ……若し貴方の方に豫定でもあるといけないと思つて、中西さんに待つていたのだよ」

伸子は二人の方は見えず、山高帽を片よせ書籍やノオトを机の上に並べ始めながら云つた。

「貴女がいゝと思ふ通りに返事なすつたらいゝでせう」

伸と四ヶ月の交渉の間に、伸子は度々このやうな言葉をきいた。彼女はいまも、それが初めてのやうな苦痛を感じ、

「………両方いゝやうにした方がいゝぢやないの」

と云つた。

「自分の判断で返事をなさればいゝです。——然し………」

「なあに」

「貴女方には、横尾君や樋口君といふ人が其那によく判つてゐらつしやるのですか」

珠子まで妙な立場へ引き込んだので、伸子は切ない悲しい氣で一杯になつた。彼女はひすんだ表情

に成つて暫く黙つて居たが、やがて思ひ切つたやうに珠子に囁いた。

「——私やめるわ今度は。……折角だけれど……私がやめても貴女行らつしやる？」

「私の方は大丈夫よ」

珠子は察しよい氣輕さで、元氣づけるやうに伸子の肩に手をかけ乍ら云つた。

「ぢやあ、その方がいゝかもしれないわ、あんなとこいつだつて行けるところですもの。よろしく云つて置きますよ」

彼女等は入口まで連立つて行つた。

「約束があることにして置いて頂戴」

「さうしませう——」

珠子は歩き乍ら不意に女らしい、氣のよい小聲で云つた。

「………佃さん、嫉妬があるのね、でもそれだけあの方の愛が強いんだから、あなた幸福ですよ」

伸子は信じない顔をした。すると彼女はさも先輩らしい暖さと押しつけとで

「本統ですよ」

と睨む眞似をした。

伸子は机の前へ戻つた。佃は彼女を見もせず口も開かない。伸子はさういふ不自然さに、永く堪へられない性質なのであつた。彼女は、

「ね」

と呼びかけた。佃は顔を擡げた。

「何ですか」

「——今のやうな場合ね、はつきり貴方の心持を云つて下さる方がいゝのよ、相談なんだから」

「貴女のいゝと思ふやうになさいと云つてはいけなかつたんですか」

「さうぢやあないけど……何だかあれぢやさつぱりしないぢやないの。口では好きにしろと云つて、様子で迎も好きになんぞされないやうに爲さるのなんかいけないと思ふわ。——相談する以上貴方の心持を立てるつもりなんですもの」

佃は、黙つて居たが、白眼勝の視線で斜に伸子を見上げ、愁訴するやうに云つた。

「私に行くなといふ権利のないのは知つて居らつしやるでせう？」

伸子が涙組んで沈黙して居ると、彼は急に焦立ち熱したやうに低い速口で呟いた。

「行らつしやればいゝですよ、行らつしやればいゝですよ。決して私のことなんぞ心配して下さらな

くていゝのです」

「行きたいから云つて居るのぢやないのよ。——これからだつて度々あることだから……」

云ひかけた處へ、五六人學生が入つて來た。がら空きであつた前や後の大机に、各々彼等の座を占めた。伸子は勢、口を噤まなければならぬ事になつた。

そのまゝ午後二時から、伸子はミス・プラットの處へ出かけた。

ミス・プラットは大柄な、何處かにダツチ風な重々しさを持つて居る人であつた。そのと云ふにも紐育女らしいせわしい鼻聲ではなく、叮嚀に字と字との間をのばして悠くり發音する。母親と下宿人とで生活して居る女教師の平穩な雰圍氣に、伸子はいつも家庭的な慰安を感じた。

先週の火曜日、話が寄宿舎の事になつた。伸子は寄宿舎の生活には幾日経つても氣質的に馴染めないところがあつた。第一人間が多すぎる。伸子は半分冗談に、

「まるで蜂の巢のやうです。それに皆が女王蜂だから……」

と笑つた。ミス・プラットは栗色の髪の濃い頭をかしげて考へて居たが、

「木曜日の午後からうちへいらつしやいな、氣が變つていゝでせう。お喋りでもしませう」

と云つた。その約束があつたので、伸子は、佃と氣持の行きがかりをそのまゝにして出かけたので

あつた。

ア・パートメントの扉を敲くと、ミス・プラットの母親が取次に出た。

「今日は」

「あゝ、今日は。ようこそ」

老婦人は、愛嬌よく伸子をホールに導き入れた。そして、正直さうな碧い眼に訝るやうな表情を浮べ、地になつて居る呼聲で訊いた。

「今、生憎他に御稽古の方が見えて居りますのですよ、どんな御用ですか」

午後が暇なので招かれたと思つて居た伸子はやゝ意外であつた。

「今日は木曜日でせう？」

「えゝ、確に……」

「では、恐入りますが一寸ミス・プラットに私が來たと仰云つて下さいませんか。御差支へだつたら、又出なほして構ひませんから」

入れ違ひに日本の羽織を羽織つたミス・プラットがいそぎ足で出て來た。彼女は、伸子が何か云ふ時を與へず挨拶し、自分の居間に案内した。

「もう卅分ばかりですから失禮ですが待つて居て下さるでせう？」

彼女は書棚を覗いた。そしてオウステインの普及版を一冊とり出して伸子にあてがつた。

「これでも読んで居て下さい。では一寸御免なさいね」

ミス・プラットの部屋の二つの大窓から、大學構内の空地の一部と、大學總長の邸宅の側面が眺められた。長椅子や寝臺の上には小綺麗な更紗や小布陣があつて、落付いてさつぱりした部屋の飾となつて居る。伸子は、搖椅子にかけ、あづけられた本を読み出した。

聽て廊下で別れを告げる聲、此方へ來るミス・プラットの衣擦れの音。

やつと二人の間で話が心持よく弾みかけると、又稽古の人が來た。ミス・プラットは初めからその積りで居たらしく、伸子に二言三言云つて、客間へ去つてしまつた。――更にたつぶり一時間待たなければならぬ。――

伸子は、ぶら／＼室内散策を始めた。前の空地に一本大きな冬枯れの樹木があつた。簾を逆にして空に沖らせたやうなその梢に、如何して遺つたかたつた一枚、眞赤な楕圓形の朽葉がひらく／＼動いて居た。それが透明な二月の碧空の前に、ぼちりと滴つた血のやうに美しく見える。

其を眺め、此を見して居るうちに、伸子は不圖自分が變に間の抜けた端目に置かれて居るのに心付き

出した。ミス・プラットはあゝやつて勝手に彼女の稽古をして居る。それなのに自分は決して居たくもない彼女のこの居間に、帽子を脱ぎ外套をとり、悠くりしなければならぬ命令でも受けたかのやうにぼんやり待つて居る。何の爲に自分は此處に居るのだらう？ 伸子は、我知らずクスリと笑つた。——だが、本當に自分は何しにこゝに居るのであらう？

弟子ではあるが、彼女から呼んで置いて、斯うも續けさまに獨り放つて置くのは、變ではないか。伸子に違つた部屋を與へようと云ふ親切であつたら、何故前以て、彼女はいそがしいが獨りで何かして居るのならば、と云つて呉れなかつたのだらう。平常ミス・プラットはよく氣のつく人だ。其を思ふと伸子は神経的に居心地がわるくなつて來た。彼女は腕を組んで、質問をするやうに自分の脱いだ外套や帽子を見下して突立つた。………

さう云へば思ひ當る事がなくもなかつた。

十日程前の事であつた。稽古の後で、ミス・プラットは誰からきいたのか、

「貴女この頃始終伸さんと御一緒ですつて？ さうですか」

と訊ねた。伸子は左様だと答へた。

「伸さんは以前高崎さんにも大層親切にして、一緒にいろいろして居らしたやうですよ」

ミス・プラットの話しぶりに何か暗示らしいものがあるのを感じ、伸子は單純に答へた。

「さうでございましたつて。——彼からききました」

「元——西部の大學に居た時にも、何か婦人のことで面白くない事件があつたんですつてね——まあ謂はゞ紳士としての體面を失ふやうな——この間其那話をひよつときましたよ」

「あゝあの話でせう？ 夜何處かで話して居た女の人を、警官が誤解してどうとかしたといふ………」

ミス・プラットは、

「伸さんが話しましたか」

と少々豫想外らしく云つた。

「えゝきゝました。——でも、何故貴女にそんな他人の噂を喋る必要があつたのでせう」

伸子は、軽く不快を現して云つた。

「噂なんぞは、そのまゝ本氣に出來ないと私は思ひます、無責任に事實を脚色するのが平氣な人も居ますから」

「さうですとも。私だつて決して全部を信じようとは思ひませんよ」

ミス・プラットは何氣なく話題をかへた。けれども、あゝ云ひ出した心持が、今日の奇妙な招待——

まるで「部屋で靜に獨り考へて居て御覽なさい、私に話すことがある筈ですよ」といふやうな處のある招待——になつたのではなからうか。

さう心附くと、伸子は、自分の子供らしい暗示に負け易い性質を見抜いたミス・ブラットの、恰かな仕かたが不愉快になつた。此那ことをされなくても、彼女は佃とのいきさつをミス・ブラットに隠して置かうといふ氣は持つて居なかつた。必要な時が來れば、敬愛して居るミス・ブラットに眞先いろいろ打ちあけるに違ひないのだ。然し、それは決して此那強ひられた機會に於てではない。又、それは對等なもの同志の打ちあけ話として、ミス・ブラットが暗に心待ちにして居るらしい、彼女の意見を求めて如何しようといふ性質のものでもない。

伸子は決心した。「今日はどんな事があつても自分から佃に關して口は利くまい」假令明日の朝駈けつけて一切を話すとしても、——今日は、決して！決して！

伸子は兎も角ミス・ブラットが時間をすまして來る迄待つて居た。それから連立つてモウニングサイドを散歩した。ミス・ブラットは伸子の感情を洞察したらしく、自分の内心にあつたかもしれない計畫について云はなかつた。一二度、ほんの偶然と思はれる機會に、佃の名に觸れたぎりであつた。

二一

その一日は、謂はゞ偶然心持の上へ陰翳が重り合つたのであつた。然し、それなら絶対にいやな事のない日が、いつかあるのか？

體は一人の學生として寄宿舎に入つたが、既に佃との繋りが深く心に及ぼして居るので、伸子の内生活は、女學生の其のやうに單純に行かなかつた。學生の中にも愛人や許婚を持つて寄宿舎に居る人は澤山あつた。寄宿舎の向ひ側にあるメゾン・ド・プランタンは、朝寢をした學生に重寶がられるばかりでなく、さういふ人々によつて夜など殊に賑やかであつた。彼女等は訪ねて來た愛人達と一緒に愉快さうに喋つたり、土曜日だとダンスなどして興じて居た。友達同志が互の愛人同志を又友達にして一團となり、陽氣に夜會へなど出て行くのもある。

或時 安川が、

「日本人は實際まだ社會的訓練が足りないから駄目ですよ。こつちの學生達は、自分の好きな人だつて友達の見をきいて選ぶ。——友達が馬鹿にするやうな男は友人にするのだつて愧ぢますよ」と云つた。安川は非常に外國崇拜であつた。それで、時々却つて氣持が逆に動く伸子は、その時も「どこまでもリブリックね」と笑つた。

「私はやり方が違ふわ、自分が好き、だから好き。それでいゝわ」

伸子と佴との戀愛は、それにしても彼女の周圍にある戀愛と比べて、比較にならない獨特の暗さと切なさを持つて居るやうに思はれた。病院へ行つた晩、佴は半ば夢中であつた伸子に接吻した。伸子は其を彼の情熱の告白と感じて應へた。彼にはもう再びそれから感情を元に戻すことが不可能であり、伸子にも出來ず、次第に離れ難く互を思ふやうになつて來たのだが。……戀愛は常にこのやうに動搖や不安や悲しさの感情を伴ふものであらうか？

自分が愛し愛される者を得たといふ確信は、初め、伸子に、たつぷりした精神の落付きと希望とを與へた。佴の方ではさうでなかつた。そして、感情の熱が高まるにつれ、彼の絶間のない内心の不安が募つて來た。それは伸子にも感染せすにすまなかつた。互の愛によつて一層生活の力を感じ合ひ、

扶け合つて行く、平和な、同時に高貴な輝きはなかく、惠まれなかつた。

佴は、餘り自信のない愛人なのであつた。

廿日程前の或晩、伸子は數人の友達から晩餐に招かれた。佴の知らない會社や公務關係の人々であつた。伸子の他に多く婦人連も出席した。翌日佴は異常に神経質になつた。

「貴方——私が昨夜行つたことで不愉快さうにして居らつしやるの？」

すると佴は眉毛の下から伸子を瞥見して云つた。

「何か其那わけがあるのですか」

「ほら！ほら！それが曲者よ」

伸子は、指をふつて佴を嚇す眞似をした。そして、云つた。

「これからもあることだからどうぞよく分つて居らして頂戴………ね。私貴方を本當に思つて居るし、愛して居るのよ。だから、却つて誰と居ても安心だし大丈夫だといふ信念があるのです。——わかるでせう？私の心持。私にはもう護り神があるの。本當に大切に思ふ人がある時、人間は自墮落になんぞなれやしないわ。それに第一お互の不面目よ、こんな何でもないことさへ平靜にとりあつかへなんて」

伸子は仲子の正視を避けるやうにし乍ら、譲らず呟いた。

「私は決して貴女がどうだといふのではないのです。貴女が私に眞心をもつて居て下さることは知つて居ます。けれども——貴女は人をすぐ信じる。世間の人間は決して表面から見るやうなものではありません。如何してさう安心して人とつきあへるか……それが不安です」

「人間を信じていけないものなら、どうして貴方を此那に信じる事が出来て？」

彼女が移り氣でないと思ふのなら、伸子は心苦しう感じた。伸子の知であらうか。その嫉妬にしろ、自分の心持が分るなら、いらぬことだと伸子は心苦しう感じた。伸子の知らぬ人とは會つてもいけない。交際してもいけない。——それでは餘り窮屈だ。伸子は臆量な個が腹立たしくなり、一思ひに、自分は自分で彼の氣持を一々忖度などせず、自由に信ずるまゝに行動してよいのだと思ふこともあつた。彼も苦しむ丈苦しんで、自分のさういふ心持をどう處理すべきか會得すればよいのだ。熱つぼく殆ど決心に近いところまで行く。が、さう思ふ一方、伸子の心には忽ち彼の頭を抱きすくめ、接吻で被ひ、

「あゝよくてよ、知つて居てよ」

と云ひたいやうな情が燃え上つた。伸子には彼の苦痛が理解された。彼は卅五歳だといふことや、

極めて貧乏だといふことや、地位のないといふこと、餘りいゝ評判でもないといふ事、其等を氣にやんで居るのであつた。それ等の事に煩らはされつゝ、彼は伸子の若々しい熱に牽かされる自分を苦しみ、自分の自信なさに苦しみ、幾重にも苦しい心持なのに違ひないのであつた。伸子は、どうかして自分の心を燃え移らせ、互に堂々とした生活に入りたいと思つた。彼等にとつて路はもう前にしか明いて居ないのは分つて居た。——伸子は、然しどうしたら安心して、こゝまで来た感情を彼女とともに健に育て、ゆけるのであらうか。

考へて來ると、伸子の眼に涙が浮んだ。彼も結婚しなければ承知出来ないものであらうか。

三

人々は皆結婚する。男も女も結婚する。結婚といふことは、人間に眼と鼻とがあるやうに當然な人生の一つの約束のやうに行はれる。伸子はそれに對して何だかぼんやりした質疑とでも云ふものを抱

いて居るのであつた。人間が家庭を欲す心持、又愛し合ふ男女が共に生活したく思ひ、一組として扱はれたい心持の強いこと、それ等は彼女にもわかつた。佝に對して、伸子は、中世的なブラトニツクな感情だけで居るのではなかつた。いつか彼と自分とは肉體も一つにするであらう。一對の男女として取扱はれたら、如何那に便利が多いかといふ事は、今でも充分察せられた。然し、結婚といふことに到ると、漠然とした重苦しさ、狭さ、凡庸さ、不安の感がいつも伸子を襲つた。人間は結婚すると、何故あゝも、人生の或ゴウルに到したやうに落付いて、世間と調和的になつてしまふのであらう。多くの男女が、何か自分ならぬ者に導かれるやうにして、一生をいつの間やら過して行く。自分が結婚し、そんな風に此世を送つて仕舞ふのは、伸子はいやであつた。結婚して子供が欲しいといふ氣もなかつたし、良人が所謂立身をして、某夫人と云はれたい慾も、彼女にはなかつた。佝には佝の仕事がある。自分には自分の仕事がある。そして、經濟的にも、伸子は彼を稼げてとしなければならぬ必要はなかつた。彼と生活をともにし、互に扶け合ひ、一緒にやつてゆきたいのは、たゞ、互の愛を眞直育てられる位置に於いて二人が、より豊富に、廣く、雄々しく伸びたいからだけなのであつた。愛し合ふ男女にとつて、結婚が唯一のものなのであらうか。男女の愛は、本來が、さういふちよつと狭くなるしいやうな性質のもの、なのであらうか。人生には何か、もう少し違つた形があつてもよかりさうなものだ、といふ氣が、結局

にゆくと、いつも伸子の心に、強く生じるのであつた。

佝は結婚といふ字さへ自分の口から云ひ出した事はなかつた。けれども、彼は何と苦しむことか！その苦しがりやうを見ると、伸子は彼が、眞に求めて居るものの何かを、感じずには居られなかつた。彼が進んで云ひ出す権利を、自分自身に許して居ないので、猶更、その内に争つて居る心持は、伸子に苦しく責任をもつてかゝつて來るのであつた。

四五日で三月にならうとする或晩のことであつた。

伸子は獨り部屋に居た。自習時間で、寄宿舎中、最も靜かな時刻であつた。時々、コンクリートの廊下を歩く、小さい靴の踵の音がするだけだ。伸子も机に向つて居た。綠色笠の讀書用電燈が、帳面の白い紙面や本の背革を森と照して居る。伸子は、ミス・ブラットの處へ持つて行く爲に、竹取物語の一部を書きとつて居るのであつた。

物語は、元から彼女のすきなものであつた。自分から選んだ仕事だから、彼女は感興に満ちて、日によると面白さにつり込まれ、文法の間違ひや、途法もない言葉使ひに頓着なく、没頭するのであつた。けれども、今夜は如何も抄取らない。必要を表現が、彼女の貧弱な語彙に無ければかりでなかつた。興味の湧く迄心を集注する熱が、何だか胸の邊で缺乏して居る。さういふ感じであつた。伸子は、

考へるにも字を書かうにも、自分といふ全存在の影が、俄に薄くなりでもしたやうな手答へなさを、内部的に感じるのであつた。淋しいと彼女はさうなつた。

佃は紐育の北に在る或る市にY・M・C・Aの用事で旅行中であつた。

その話をきいた時、伸子は寧ろ悦んで賛成した。

「結構だわ、行つていらつしやい。たまには別々になるのもいゝわ。気が變つて——」

自分の心持を考へなほして見る事も、興奮しがちな神経に休を興へる事も、よいと思つたのであつた。最初の晩伸子は夕飯後、階下の廣間へ自分を訪ねて来る者がなく、といふ安らかさで、早くから部屋着にくつろいだ。氣まかせに衣裳箱篋を片づけたり、讀書したり、久しぶりの獨居の樂しさは、魅するやうであつた。九時頃風呂に入つて眠りにつく時、伸子は日頃忘れて居たゆつたりした無爲の歡喜が、さし上る月のやうに我身を照すのを感じた。

次の日、即ち今日は一日暇な日であつた。其でも習慣で、十時過にアヴェレーホールへ行つた。そして、いつもの定りの卓子に向つて坐つて見ると、伸子は、何とも云へず物足りなさを、身のまはりに感じた。爽やかな空氣の一種の冷たさ、人の聲音のしない建物全體の、廣すぎるがらんとした感じ。空虚なとはかういふ感じか。伸子は其邊に在るすべてのものを、異様に新しく、強く感じて見た。

入口の扉が開いたり、近よる人の氣勢がしたりすると、彼女の神経は極度に緊張した。

佃は今數百哩離れた處に居て、もう二日は歸つて來ない。其事實によくよく分つて居るに拘らず、若しや、といふ心持が、その瞬間、彼女の動悸を高めるのであつた。午前中が一日の永さであつた。仕舞ひに、伸子は、自分の心が、餘り自由を失つてゐるので、情なく苦しくなつた。

彼女は圖書館を出た。ハドソン河沿の公園を散歩したり、プロオドウェイで買物をしたりした。そして、どうやら夜になつたのだ。……

伸子は、自分の心持と戦ひ、一時間の種になるだけの竹取物語を、やつと寫すと、いそいで帳面や字引を片よせた。さもいゝ事でも待つて居るやうに、勢こんで机から立ち上つた。が——寄宿の小さい部屋の中には、自分が居る許りだ。彼女の濟むのを待つて居る者も無いし、「あゝやつと濟んだ！」と、向つて云ふ者も居ない。化粧臺の鏡は、明るく室内の白壁を寫して居る。伸子は淋しい獸の仔のやうな顔をした。彼女は、持て餘すやうに兩方の腕を頭の上で組み合せ、窓の前へ立つた。

とつぶり暮れた寒い夜を透して、同じ寄宿舎の、鍵のてに突き出した翼が見えた。灯のともつた切抜萬燈のやうに、澤山の窓があり、その内部は燈火で煌いて居る。窓帷の引いてない一つの窓から、凍つたやうな外氣越しに、若い女の頭や、白い上衣の肩がちら／＼見えた。どの窓の中も平和で暖くて、人

に知られぬ幸福が舞ひ降りて居るやうに見えた。伸子は突然、何でもよい、楽器でも、力一杯掻き鳴し、自分を溺らすこの寂しさを破りたい衝動を感じた。彼女は寝臺の端に腰かけ、靴の爪先で拍子をとる乍ら、鼻歌を歌ひ出した。これが自分の聲だらうか？此那惨めな、弱い震へ聲が？

ぽつんと歌を切り、今度は雑誌をとりあげた。

伸子は然し、聴てその抵抗力をも失つた。彼女は、この心持は紛らさうとしても駄目なのを知つた。

伸子は、自分が何なしではやつて行かれないのを知つた。この、世界が空っぽになつたやうな寥しさ、何をしても——路を歩いても、讀んで居ても——總てはたゞ彼に會ふ迄、時間をつぶす方便だといふ感じ、空氣まで妙に稀薄になつたやうな息苦しさ、何でない誰がこれを救つて呉れよう。彼は、自分が此處で、このやうに彼に憧れ、切ない思ひをして居るのを知つて居るであらうか。

伸子の眼の前に、何の顔が浮び上つた。段々それは大きくなつて來た。何は、彼の、見馴れた古くさい山高帽を挙げ、伸子を見、近づき、よき微笑を洩した。伸子は、眼を嘆り、熱く、寒く、體ぢゆうで顛へ乍ら、幻の抱きしめた。彼の頬の感觸……彼の唇——柔かい髪を撫でるとき掌につたはる、その手觸り。伸子は呻くやうに彼の名を咬いた。

壁に頭を寄せかけ、恍惚して居た伸子は、ノックの音で我に返つた。

彼女は、いそいで両手の甲で涙に濡れた眼を擦つた。

「お入んなさい」

然し扉は開かず、外から受付の少女が叫んだ。

「御電話ですから、廣間へ被來つて下さい」

「さうお、有難う」

誰から掛つて來たのだらう。伸子は怪しみ乍ら、氣のない様子で身づくろひをし、階下へ下りた。廣間では、愉快さうな男女が、彼方此方に群れて居た。夜會服をつけた娘が三人、花束のやうにかたまつて、嬉しさうに耻しさうに、人中を抜けて出て行つた。黒い服をつけた監督の老嬢が、隅の大理石柱の下に、活々したさよめきを眺め乍ら、作りつけた微笑を湛へて坐つて居る。

伸子は、電話箱へ入つた。彼女は、若し誰かに、何處かへ招かれるのだつたら斷らう、と思ひ乍ら受話器をとりあげた。

「もし、もし」

「佐々さんですか、すぐ其方へつなぎますから」

カカカと接續の音がした。

「もしもし」

「もしもし……あなたは」

非常に不鮮明に、遠く途切れ／＼乍ら、一聲聞くと、伸子は思はず、卓上電話の銀色に光る蓋を握りつめてのり出した。

「佃さん？」

「佐々さんですか？どうして居られます？」

伸子は、こみ上げて来る嬉しさと戀しさで、口が利けなくなつて仕舞つた。やつと先方に聞える位の聲で彼女は、

「もしもし……もしもし……」

と囁きながら、動顛した熱い額を、ぐい／＼送話口に押しつけた。

佃の聲にも、優しさがあつた。

「紐育のお天気はどうです？此方はひどい吹雪ですよ——」が聴えますか」

伸子は鎮らない感動で、息づまつたやうな低聲を出した。

「寂えてよ——よく、かけて下さつたこと」

「御一人ですか？」

「ええ」

「つい先刻まで會議があつて、いそがしい思ひをしました。——餘りひどい天気なので、——一寸どろして被居るかと思つて……」

「有難う」

伸子の胸には再び、火の塊りのやうなものがこみ上げた。出来ることなら一飛びに、彼の手許へこるがりこみ、この我武者羅な熱情を、同じやうに激しい燃える彼の手で捕へ、締めつけて欲しい——言葉に言へない感情で、伸子は送話口に額を壓つけたまゝ、黙つて仕舞つた。

「もしもし」

「——なあに？」

「どうなさいました？」

「……」

向う側にも情の深い沈黙が生じた。伸子は、夜の電線を傳はつて、まざ／＼と迫つて来る彼の心持を感じた。その感じは迫り迫つて、二人を隔る距離がまるでつまり、遂に、佃は、ちき壁の彼方側ま

で来て居るやうにさへ思はれた。聽て、先から云つた。

「そろ／＼時間になるかもしれないね。——切りませうか」

「さう？」

「すつと部屋ですか？よくおやすみなさい。私は豫定通り明後日歸ります」

「何時頃？」

「多分あしたの夜行で此方を立てるでせうから、夕方迄には着くでせう。夜おめにかゝります」

彼女はさやうならを云つた。そして、夢中で昇降機にのつて部屋へ歸つた。

四

伸子は、其夜、殆どまんぢりともしなかつた。

翌日は、陰鬱な小雨であつた。ミス・プラットの處から歸つて、玄關で洋傘の雫を切つて居ると、昇

降機から安川が外出の仕度で出て來た。彼女は伸子を見つけて聲をかけた。

「佐々さん、あなたこれから時間がありませんか」

伸子は、昨夜からの絶えない内心の思考に囚はれ、ぼんやりした顔つきで安川を見上げた。

「なぜ？」

「若し何もないなら、一緒に百二十五丁目まで行らつしやらないかと思つて」

「買ひもの？」

「えゝ一寸」

伸子は少し歩いてもしゝ氣になつた。決めることは、既に昨夜のうちに決つて仕舞つた。

「ちやあ一寸待つて頂戴、このごたく／＼あづけて來るから」

伸子は本や帖面を受付にあづけた。

近いからこそ細かい用を足すのだが、百二十五丁目邊は下等な街だ。塵埃、バナナや林檎の皮、貨物自働車の粗悪なガソリンの臭氣が街路に満ちて居る。窓硝子が破れ、黄ばんだ半地下室に、鞆直し、古着買、いかもの、鏝職が、鼠の巢のやうな店を張つて居た。寶石商の店頭飾られた何百弗、何千弗と正札つきのダイヤモンドが、贗物としか思はれない場處柄であつた。

安川は靴を一足買った。伸子はリボン一卷と、白レース卓子掛と、可愛い家鴨の子の玩具を二つ買った。安川は伸子の子供らしい買物を見て、

「可笑しな人ね、どうするの其那もの二つも」

と笑つた。

「可愛いぢやないの、まるで可愛い恰好だわ、佃さんにも上げるの」

伸子は、ふわ／＼手應へない紙包を大切に抱へ、傘をさし、びし／＼濡れた舗道を戻つた。

眠らなかつた割に、伸子の心持は、はつきりして居た。永い間悩んで居た問題が、ひとりで来るころへ来た。さういふ落付きがあつた。其は決して樂な行手を示しては居ない。自分に女性としての苦勞が始るだらう。佃に協力する熱誠さへあれば、伸子は其を恐れる自分とは思はなかつた。彼がよし、と云へば自分の決心は出来て居る。伸子の胸には希望と一緒に、云ひ難い一筋の悲哀、不幸の豫感があつた。それは、親の事であつた。彼女は両親を愛してゐたし、彼等が伸子の伴侶を想像すれば、凡そ如何那青年を考へるか、見當はついて居た。公平に云つて、佃は彼等の空想の中に現はれるだらうどの人物とも、縁が遠いのは明かであつた。彼等は自分の決心を知つたら、驚き、不快を感じ、憤るかもしれない。否、憤るであらう、一應は。然し、自分は後に引くまい。最も悪い場合を考へて、

其が假令一生感情上の不和の原因となつても。昨夜も、伸子はこの事を考へ、咽び泣いた。そして、どうか両親も、自分の心持は理解して呉れるように。佃も、萬一運命がさう向いたら、彼等のよき息子と成つて呉れるように、祈つた。

次の日、午後の五時過、佃から電話がかゝつた。伸子は、自分が行くから、七時頃圖書館に来て居て呉れるように頼んだ。

夕食を、伸子は儀式にでも臨んで居るやうに味なく、嚴かな氣持で食べた。部屋へ戻つて、子家鴨の頸に細いリボンの薔薇飾を結びつけ、薄紙に包んだ。髪に刷毛をかけ、帽子をかぶり、伸子はいつもより少し蒼ざめた顔で外へ出た。

前日の雨は上つて、風もないしつとりした晩だ。潤みを帯びた黒い空に、夥しく星が燦いて居る。街燈の遠い光で、葉のない樹木の梢と、大圖書館の圓屋根が、模糊と浮立つ大學構内を抜けて、アヴェレール、ホオルに行つた。佃の姿は見えない。伸子は図書館へ行き、三階の隅の特別室の戸を開けた。隈ない明りの下に、書架が木のやうに並び、伸子の足音は高く天井に反響した。讀書室で、誰か席から立ち上つた音がした。伸子は足を速めた。佃は居た。獨りだ、彼は入口の方を向き、来る伸子を迎へるやうに、椅子の背に左手をかけ、立つて居る。——何處か少し寒れたやうな彼の顔を見た刹那、

伸子は、今まで自分を支へてゐた軸が、響を立て、崩折れるのを感じた。

最初の感動がやゝ鎮ると、伸子は佝と並んでかけた、短い言葉で旅行の有様を尋ねた。彼女は、薄白い紙包みを出した。

「お土産、——あけて御覽なさい」

佝は、珍しさに、覗き／＼包を解き、中から出て来た子家鴨を見ると、一時に微笑が顔に輝いた。

「これは可愛い！有難う。どうしたのです？」

「きのふ見つけて買って来たの、安川さんと」

佝は、無骨に平らな指先で、ふわ／＼した和毛を撫でたり、靴の上を歩かせて見たり、罪なく子家鴨と戯れた。伸子は、その平和な顔を、苦しい心持で眺めた。彼は、この自分が、次の瞬間に何を云はうとしてゐるのか、まるで知らない。自分達の運命が、この數分に定らうといふのに！

伸子は、重大な話を切り出すに、一種の辛さを感じた。彼女は伏目になり、佝の手に自分の手を重ねた。劇しい感情の動搖が先きに立つて、舌が重く強張つた。伸子は、だしぬけに彼の名を呼んだ。

「——佝さん」

驚いて佝は伸子を見た。その眼と眼を見合はせた途端、伸子は胸でも急に痛むやうな、苦しげな顔を

した。彼女は手を延し、彼の頭を自分に引寄せた。そして、びつたり耳に口を寄せ、呟き始めた。

「私ね……私ね……」

が、いきなり、伸子自身豫期もしなかつた涙が、ひどい勢でこみ上げて来た。彼女は佝の横顔に自分の顔を押しつけたまゝ、嘔りあげて泣き出した。佝は譯も知らず、周章て、自分の胸から伸子の顔を離さうとした。

「どうしたのです？え？どうしたのです」伸子は、一層きつく彼にしがみつき乍ら、途切れ途切れに涙の間から囁いた。

「私ね……考へたの。……若し結婚するなら……私は……」

佝は打たれたやうに體をのぼし、ぐつと両手で伸子の顔を挟んで自分の前へ持つて来た。伸子は、涙でぐつしより濡れ、上氣し顔へ乍ら、懺悔する子供のやうに一氣に云ひ切つた。

「貴方とでなければイヤ」

五

リヴァサイド、ドライブの端に、グラント將軍の墳墓があつた。石段の上に廣場が、記念塔めいた建物の周囲をとりまいて居る。目の下に暗いハドソン河と、冬枯れの公園があり、寒い夜風の中を散歩する人影もない。伸子と側とは、圖書館を出て此處へ來た。彼等は明に興奮して居た。けれども、心持は眞面目で、寧ろ沈んで居た。伸子の告白をきいた時、側は、

「此那ことがあり得るだらうか！此那ことがあり得るだらうか！」

と呻いて、骨が砕けさうに伸子を擁き締めた。彼の眼から涙が溢れ落ちた。これ以上の承諾が何處にあらう！伸子は自分が、幸に誤らず、彼の内心にも在つた希望を切り出したのを知つた。

彼女は次第に落付いた。

「もつといろく、聞いて戴かなければならない事があるのよ、少し歩きませうか」

そこで、彼等は、この季節のこの時間では、往來も疎らなリヴァサイドへ來たのであつた。

伸子は自分が、彼那風に自分の心を打ち開けやうとは思つて居なかつた。もう少し冷静に、自分が其決着に來た心持の経路から、實際上の種々な相談をし、最後にあの一言を云はうと考へて居たのに、順序や考へなど、けし飛んで仕舞つた。今逆に戻つて、初めの方を彼に話さなければならぬ。

側に腕を執られ、ゆるく石畳の廣場を廻り歩き乍ら、伸子は考へ考へ口を利き出した。

「これから云はうとするのは皆、私の我儘なのよ。妙な工合で後先になつて仕舞つたけれど、——でも大切な事だから、どうか聞いて頂戴。毎日の生活は、たゞ可愛いといふばかりで行かないことが、澤山あるから……ね」

「勿論さうです」

側は熱心な調子で云つた。

「何でも云つて下さい。よく相談して、私は自分の力の及ぶ限りの事はします。この四五年、私は結婚といふことなんかすつかり断念して居た。——實に思ひがけない——信じられない程です。——今頃「私にしても其は同じよ。思ひがけないわ。……でも、私——貴方の被居らない間考へて、かう定めたのも、私共の心に育つてるものを、眞直伸して立派なものにしたいからなのよ。たゞ旦那様と細君を

作りたいからなんぢやあ本當になくつてよ」

「其は解つて居ます」

「お五が安心して、少しでも深みや廣さの増した人間になりたい。——若し心持の上で、故障なしにやつて行けるものなら、私は一つ家に住むといふことや、他のいろんな事なんか、如何でもよいと思ひます。でも、貴方が安らかでないと、結局私も安らかでないから。——」

彼等は數歩沈黙の裡に歩いた。伸子は、訊ねた。

「——これが私の我まといふ處なのだけれど——貴方御自分の細君が、家のこと下手で、勉強したがかりでも、平氣でゐらつしやれる？——私は本當に貴方を愛してよ。けれども、仕事も愛して居ます。貴方と同じ位！ね、これは言葉で云ふと何でもないやうだけれど、我々が若し生活を一緒にするやうに成ると、なかく大變な事だと思ふの。私は——」

伸子は、勇氣を失ふまいと努力して、力一杯、佾の腕を自分の體に壓しつけ乍ら云つた。

「逆も貴方に會はなかつた時の心持に戻れないと思ひます。だから、思ひ切つてそれを、育てるだけ育て、見ようと思ふ……其でも、仕事はすてられなくてよ。其だけは出来ない。一生確なことは出来ないかも知れなくても、やめることは出来ないの。萬一其を止めなければならぬなら……私——……」

左様ならをするしかないの」

唇をかみしめ、伸子は辛うじて涙を制した。佾は、全身の身ぶりでその疑念を晴さうとするやうに、心をこめて斷言した。

「其那心配こそ無用です。——貴女が大切に思つて居るものゝあるのは判つて居ます。假にも貴女を愛して居る者が、どうしてそれを捨てろなどと云ひます！——私は自分をすても、貴女を完成させて上げたい、と思つて居る程です。決して私は家政婦を求めて居るのではない……私は元から、何か自分の仕事を持つ女のひとを助けて、立派なものに仕て見たい、と云ふ考へを持つて居たのだが……力の足りないのが遺憾です」

伸子は嬉しさに思はず其處で棒立ちになつた。

「本當？本當にさうお思ひになるの？」

「本當です！御覽なさい」

佾も立ち止り、伸子の兩手を、自分の二つの掌の中に握つて、彼女に顔を向けた。

「私を御覽なさい。——嘘は云ひません」

「——有難う！有難う！」

伸子は、涙ぐみ乍ら、執られたまゝの両手を強く強く振り動かした。

「本當に有難う！どんなに嬉しいか、貴方にお解りになつて？有難う！あゝ全く！有難う！」

伸子は、霜の下りた石の腰架に腰を下した。彼女は、この寒い夜の自然に向つて跪き、「この幸福を、私に授けて下さつたのは、どなたですか。私は其程、恵み愛されて居たのでせうか」と、感謝したい程であつた。あゝ本當に、このやうなことに廻り合はうとは！伸子が涙を止めあへなかつたのは、彼の理解の嬉しさばかりではなかつた。彼が、初めて、男らしい權威を以て、自分の心持を明言して呉れた歡喜である。あゝ！彼は初めて、男らしく口を利いてくれた。

彼は心配して、度々伸子を撫でた。

「大丈夫ですか？……：……餘り興奮するといけませんよ」

「大丈夫よ。病氣になんぞ成るものですか。……でもお互に、氣をつけて丈夫で居ませうね、私共はどうせ貧乏よ。お互が助け合つて生活して行くのよ。私は親達から何も貰ふ氣はないのだから——勿論呉れるものもないけれど」伸子は、二人の貧乏さへ、悦び愛するやうに笑つた。

彼等は歩道に降り、厳しい河風が、寒氣を吹き通すのも、頓着なく歩いた。

彼は、やがて心付いて、時計を見た。

「九時半すぎて居ますが……：……いゝのですか」

伸子は、寄宿舎の出入簿に、圖書館と書いて來た。圖書館はもう閉る頃だ。伸子は一寸考へた。

「——いゝわ。若しいけなかつたら、明日、ミス・リイに理由を話したつてすむことですもの」

伸子の心は、もう何でも、彼と一緒にだといふ信念で勇氣に満ちた。けれども、晩くもう二時間ばかりで、彼と別れなければ成らないとすると、彼女には、心がかりな事がもう一つあつた。其は重大なことだ。何も未だ其には一言も觸れない。伸子は、緒口を見出すに又新たな工合悪さを感じた。伸子はきこえない風で、

「もう一つ大變なことがあるんだけれど——」

と云ひ出した。

「何ですか」

「……：……」

伸子はつい云ひ遊つた。

「何ですか」

「——……：……子供のこと」

「……解つて居ます」

「——どういふ風に？」

今度は佃が躊躇した。

「つまり……」

「私は、悦んで、適当な境遇で育てゆけないうち、子供は決して、何方にとつても幸福でない、と思ふのです。貴方の思つて被居るのもそのこと？」

「さうです——仕事もあるし……」

「第一私共は、二人でやつと生活をするに定つて居ます。満足な教育も、させてやれない親になるのはいやよ。それに……私の心持の中に、何だかすらりと母親になれないものがあつて——」

伸子は、低い聲で云つた。

「男のひとに、この可怖さ解るかしら……可怖くて堪らなく成るやうなものがあるの、本能的に——」

すると、佃はひどく散文的に云つた。

「何んでもないでせう、其那ことは」

伸子は、彼の情味の缺けた調子で、微に傷けられた感じがした。

「何でもない事とは思はなくてよ。私は、其那心持がし乍ら、此方の女の人達のやうに、さういふことを平氣で、純科學的に取扱へない心持が強くあるんですもの——自分や、何か斯う晴れ々と高く美しいものに對して極りわなくて——ね。……私には二つとも本當の氣持だから——」

彼等は寄宿舎へ曲る横通りに出た。佃は、伸子を自分の心で被ひかぶせるやうに云つた。

「安心なさい。——私は貴女を苦しめるやうな事は決してしません。さういふ心持も、いつか變るかもしれないから……何も私は——解るでせう？さういふことについても、少しは分つて居る積りです」

今になつて、彼等は自分達が、かな氷のやうになつて居るのに心付いた。彼等は寄宿舎のすぐ前に在る喫茶店に入つた。

佃は、もう灯を暗くした寄宿舎の玄関口まで、伸子を送つた。

六

冬と春との入れ換る三月だ。天候はむらになつて来た。朝ちらく粉雪が降つたかと思ふと、晝頃はつと日が照つて、夜は濃やかな霧が市街を包む。次の日は風が強く吹いた。喉が痛む程空気が乾燥する。——晴れても曇つても、冬が日一日と溶け去る氣勢は争はれなかつた。街路樹の梢は、いつか靱やかなな機みを持ち始めた。買物がてら通りを歩いて居る時など、不圖、高い高い塔の頂に、ヒラ／＼はためて居る赤と碧の旗が目に入る。何もあるのではない。たゞ、空高く見なれた一つの星條旗が翻つて居るばかりだ。けれども、人は、その旗の色や、その空から、今日ばかりはことさら何か閃く歎ばしさのやうなものが、自分の心にとび移るのを感じる。訝りつゝ瞳がなごむ。………其こそ春の遠慮深い先觸れだ。

其日は、夜前降つた淡雪が、大學の芝生の上や舗道の日かげに積つて居た。

伸子は、午餐を、或實業家の夫人に招待された。伸子は、思つても思つても思ひ盡きないものを、確かに心の中に抱いて、尋常な人々の間に坐つて居る楽しさから、愛嬌よく、よく喋り、よく笑つた。

二時から、ミス・プラットの時間があつた。けれども、前の晩、おそくまで何と居た上、今日招かれたので、何も仕度が出来て居ない。

五分程早めに着いたのに、ミス・プラットは、いつも彼女等の坐る側部屋の長椅子で、もう伸子を待つて居た。伸子は卒直に云つた。

「——今日私は大變なまげやだつたのです。準備が出来ないで参りましたが、勘辨して下さいませるか」

ミス・プラットは、房々栗色の前髪を仰向けて、伸子を見た。

「どうして？………まあこゝにお坐りなはれ」

背中に腕を廻して、彼女は伸子を、びつたり自分の傍に腰かけさせた。

「何故出来ませんでした」

「本當は昨夜する筈だつたのですけれど、餘りおそくまで何さんと話したので、つい駄目。今朝は阪部夫人におよばれたつたので、時間がございませんでした。………今日は何か話を口で申しますから、

それをなほして下さいませんか」

「勿論それでかまひません……けれども」ミス・プラットは、伸子の背中から手を離さず、却つて愈々凝つと、情をこめて、自分の方に壓しつけるやうにしながら云つた。

「貴女は、この頃少し、いそがしすぎるのではありませんか？ いろ／＼なことで……」

伸子は、ミス・プラットの聲に、眞實な憂慮があるのを感じた。

「落付いて居りませんか？」

「さういふわけではないけれども……」

伸子は、この間から溜つて居たことを、自然に話し出した。

「私は、先達から、何さんと私のことについて、御心配いたゞいて居ることは知つて居りました。……」

「いつぞや私をお呼びになつたのも、その事に關係がありましたのでせう？」

ミス・プラットは、彼女獨特の重々しきで、yesと云つた。

「さうだつたのです——貴女は感じが早い方ですね……」

伸子は、信頼に満たされて云つた。

「有難う、すつかりお話が出来て嬉しうございます。あの時はね、私の心持も定つて居ませんでした」

し……それに、あゝいふ工合で其那ことを云ひ出すのは、私いやだつたのです」

「……けれども、いつか時が来れば、そして必要なら、貴女はきつと、私に相談して下さいさう、とは思つて居ましたよ。私が、及ばず乍ら貴女の幸福を、心から願つて居ることは、知つて居て下さるのであるのね」

伸子は黙り込んだ。彼女達の並んで坐つて居る前方の白壁には、外の雪明りが映つて居た。雪解が速いで、どん／＼立昇る水蒸氣の揺れが、明るく白い中にも見えた。伸子は困つた揚句、無技巧な一本調子で云つた。

「——私は何さんを愛して居ます」

「……さうでせう」

「……私共は婚約をいたしました」

「婚約を？」

穩やかであつたミス・プラットは、其時思はず伸子が目を逸した程、驚愕の色を現した。伸子は悲しい氣がした。自分が何と婚約したといふのは、其那不快な、愕きを與へることなのであらうか。ミス・プラットは、聽て氣を鎮めて、彼女に詫びた。

「御免なさい。餘り突然だったので……本當に思ひがけないことです……貴女が……」
永い沈黙が来た。ミス・ブラットは暫くして、感動の餘り涙組んだやうに呟いた。

「貴女は本當に若い！可愛い人です。私はどうかして一生幸福な貴女を見たいと思ひますよ」

彼女は、伸子を自分の胸に抱いて、額に接吻した。

伸子は魂にしみ徹るやうな痛さで、自分が初めて受けた祝詞ともいふべき、これ等の言葉の性質を感じた。これは普通の婚約者が受ける祝福ではない。傷み、あはれみ、歎息する響があるではないか。

伸子は、或場合には、更に此上、冷笑や輕蔑の加はることさへも、覺悟しなければならぬのを悟つた。

ミス・ブラットは訊ねた。

「貴女の御父様は、佃さんを御承知ですか」

「知つて居ります」

「云つてお上げになりましたか？そのこと」

「すぐ書きました、詳しく。——それに、すつと前から、自分の心持は知らせてありますから……」

ミス・ブラットは、頻りに、佃が何か爲にする處があるのではないか、と危ぶんだ。伸子には、何より其が辛く、彼の爲にすまなく思つた。彼が若し金持の息子なら、彼の名が紳士録に載つて居たら、

誰が其那ことを云ふだらう。假令、其男が、實際は騙してなぐさむ氣でなかつたとしても、世間は黙つて居るだらう。佃はその點、辯明さへ信じられ難い立場に居るとは！

伸子は、自分が卑められるやうに、苦痛を感じた。彼女は、頑固らしく云つた。

「ね、ミス・ブラット。あの人を愛して居るのは私です。あの人を信じて居るのも私です。私は皆が、どんなにちやほやする人だつて、愛さないものは愛さない、信じられなければ信じません。けれども、私が愛し、私が信じたなら、少くとも私に、その心持がある間動かさせません」

伸子は、日暮れ近くまで、ミス・ブラットの處に居た。彼女は、内心を吐露した一種の輕やかさと同時に、自分等の結びつきに對するやや憂鬱な感傷に満されて歸つた。

七

日曜日、——伸子はミス・ブラットと、市の繁華な場處にあるミセス・チャアテルの茶に招かれた。

ミス・プラットは、
「面白いのですよ、紐育ではいつでも、最新な生活様式や流行で皆が暮して居るやうに云ふでせう。
處が、さういふ都會の真中に、ヴキトリアン・エイヂの破片が、ちやんと、ミセス・チャアチルといふ
名を持つて生きて居ます。一度行つて見ませう、貴女が窒息しないうちに、きつと連れ出してあげま
すよ」

さう云つて伸子をつれて行つたのだ。伸子は、興味を以て、然し實に窮屈に、二時間其處で過した。
彼女は、珍しい紋章學の話を、家柄の自慢と共に、ウールの靴下をはいて、薪をストウブに燃いて居る
ミセス・チャアチルから聞いた。

五時過に、二人はC大學の集會所へ廻つた。Y・M・C・A主催の、コスモポリタン俱樂部の日曜晩
餐會があつた。世界各國から留學して居る學生の大多數が會員で、新世界主義を理想とする討論や研
究、講演があつた。その前に、大廣間に幾列にも並べられた卓子で、簡単な食事をするので。

伸子は、規定通り、入口で渡された紙に、自分の名と國籍を書いて、胸にピンで止めた。今日は、他處
に大して面白い催しもないと見え、盛會であつた。絶間なく扉が開いて、種々な國の男女が參集する。伸
子はミス・プラットと、廣間の暖爐の傍に坐つた。伸子は、出入口に向つて席を占め、其となく人の出

入に氣をつけた。昨日の夕方から、彼女は佃と會はなかつた。今夜は彼も來る筈だ。伸子が、大して
氣もないのに來たのは、彼に會ひたいからだとさへ云へた。

大方待ちくたびれかけた時、伸子は思ひがけなく、期待したとはまるで反對の方角に、佃の姿を認め
た。彼は、奥の男子控室のすぐ前で、玄關の方に向いて立ち、比律賓の青年と話して居る。話し乍ら、
彼もちよいく外を氣にして居る様子であつた。青年と別れ、彼は、癖のある歩き方で伸子の方へ來
た。彼はまだ、伸子が、一團の人のかけになつて、ついその椅子に居るとは知らなかつた。段々近
よつて、佃がその人むれの向う側を、自分を認めないまゝ通り過しようとした刹那、伸子は我知らず左手
で、ミス・プラットの膝に觸つた。

「ミス・プラット」

聲が唇を洩たと一緒に、伸子は自分の失策に心付いた。何といふ馬鹿だ！ミス・プラットはもう前か
ら佃を知つてゐたではないか。彼を見た瞬間、何故か伸子は、改めてはつきり、

「ミス・プラット、あれが佃さんです」

と、告げ知らせたい烈しい衝動を感じた。考へる暇なく、ミス・プラット、と呼びかけたのだ。然し
告げてどうしようと云ふのだつたらう。永年支那で傳道して居たといふ婦人と話して居たミス・プラ

ツトは、その間に悠くり頭を廻して答へた。

「何ですか？ 佐々さん」

呼びかけと、彼女の應答とに間があつたので、伸子はやつと愚かな混亂から救はれた。

「あゝ御免下さい。人違ひだつたのです」

餘興に、ボウランドの青年が熱情的なポロネイズを演奏して、會は終つた。

九時少し過ぎた許りであつた。ミス・プラットは、佃と伸子に、自分の家に来るようにと、頻りに勧めた。彼女はもう一人、佛語を教へて居る白耳義婦人と一緒であつた。

「よろしかつたらどうか来て下さいな。久しぶりで、日本の緑茶のおもてなし致しますよ。ね、いゝでせう？」

伸子は、餘り云はれるので断れなく成つた。彼等は四人で、ミス・プラットのアパートメントへ行った。

母夫人は留守であつた。彼女が獨りで茶器を揃へ始めたので、伸子も食堂へ出て行つた。

「お手傳ひいたしませう、このお湯をかけますの？」

伸子は電熱機のスキッチを捻つた。外から歸つたばかりですぐ用を始めた故か、ミス・プラットは少

し、せか／＼して居た。彼女は菓子鉢に盛り、客間へ運んで行つた。

戻ると、

「どう？ もう沸いたでせう？」

と、湯沸しに觸つた。かけて三分も経つて居なかつた。

「まだかけた許りですもの、もう少し待たなけりや駄目でせう」

ミス・プラットは、猶、掌でアルミニウムの光つた湯沸しの胴に觸り乍ら云つた。

「かなり熱くなつて居ますよ」

「外側だけでせう」

「ようござんすよ、もう！」

伸子は笑つた。

「大變せつかちで被居ること！ 私、丁度よくして持つて参りますから、彼方で待つて居らつしやるとようございます。わかつて居ますから」

彼女は、いつも物判りのよく、泰然として居るミス・プラットが、湯ぐらわのことせか／＼のを、愛らしく面白く感じた。けれども、ミス・プラットは理窟なく、もう湯は沸いたと主張した。

「いゝんですよ、確にわきましたよ。——御覽なさい、音がして居ますよ、おろしませう。」
彼女の、聲や眼にある強情さが、ふと伸子を警戒させた。其は、早く彼方に行つて皆と一緒に
たい、といふ、子供らしい氣ぜわしさではなく、一徹な、何かに反抗するやうな頑張りであつた。
「では消しませう」

と、彼女はスウキツチを切つて客間へ運んだ。

湯は勿論なま沸きで、不味い不味い茶が出た。ミス・プラットもさすがに苦笑した。

「佐々さんに負けましたね、夏向のお茶が出てしまつて……」

伸子は、漠然、四邊に妙な雰圍氣の醸されてゆくを感じ、居心地よくなかつた。ミス・プラットは、
絶えず話題を提供するのだが、不自然な處があつた。彼女は、誰にともなく、ぼんやり話してすむ處
を、故意に佝を焦點とした。一々、

「佝さんはどうお思ひになりますか」

又は、

「貴方の御意見をおきかせ下さい」

佝は迷惑らしく、はき／＼した返事をしなかつた。而もミス・プラットは繰返し迫つて、調子をかへよ

うとしない。

彼女が、

「佝さん、貴方の御専門は何でしたか、いつぞや伺つたんでせうけれども、つい失念して……」
と云つた時、佝は神経の焦立つた様子を制さうともしないで、突き離すやうに答へた。

「別に面白くもないものです」

伸子が間から口を入れた。

「彼の専門は古代言語學なのです、特にイラン語の……」

そして座をとりなすやうに云つた。

「いつかよろしかつたら、御一緒に美術館へでも行つて見ませう、佝さんを説明役にして。——きつ
と面白いでせう」

すると、ミス・プラットは、自分の言葉で伸子を後ろに控へさせるやうにした。

「私は佝さん御自身からいろ／＼と伺ひたいのですよ。——それで……如何那目的で研究してゐらつ
しやるのですか？」

座談ではない。詰問めいて居た。伸子は、何故今夜に限つてミス・プラットが變なのか、解らな

つた。はら／＼して居る伸子の注目の前で、佯は腕組みをし、益々不活潑な拗ねた風で答へた。

「研究の爲の研究です」

「……失禮ですが、私、それは遁辭だと思ひます。勿論、眞の研究が功利的なものでないのは知つて居ますが、研究の爲にする研究なら、猶更、其處にはつきりした御自分の、學問上の目標があたりでせう？それが伺ひたいのですよ——。犬でさへ土を掘るのは、何か嗅ぎつけて居る證據です」

「——失禮ですが、今晚、私は議論する氣分になれません。——又いつかゆつくりした時に」

「あら、私共はちつとも議論などしては居ませんよ、たゞ眞面目な話、ありふれたことをほんのちよいと本氣で話して居るのぢやありませんか」

ミス・プラットは、伸子をぞつとさせた笑顔で、傍の二人を顧みた。誰も、それに應じて微笑出来なかつた。彼女と佯との間に戦端の開かれたのは明瞭だ。伸子は初めて、ミス・プラットが、この話をしたさに、佯ぐるみ自分の家に誘つて来たことを諒解した。

「まあでは、私は不幸にも貴方の御専門について理解出来ないとして——これだけは伺へるでせう？貴方が一人の人間として、人生にどんな目あてを持つて被居るか……」

先刻から、凝つと三人を眺め乍ら、當惑して坐つて居た白耳義婦人が、此時口を出し

「ミス・プラット、もうよろしいでせう？餘り問題が——」

「いゝのですよ、心配なさらなくなつて——」

ミス・プラットは、佯を正面から見据ゑ、上體をぐつと椅子の上で立てたまゝ、きめつけるやうに云つた。

「私は自分の申すことを辨へて居るのですから。——佯さん、沈黙も場合によつては、いつも黄金といふわけには行きませんですよ」

「……」

「佐々さんは」

伸子は、豫想もしなかつた自分の名が引合ひに出されたので、眼を瞪つた。

「もう自分の仕事や人生に、或目標を立てゝゐらつしやいます。貴方は何も仰云ることがないのですか？仰云れませんか」

伸子は、居たゞまれないやうになつた。彼女は、佯の態度に對する齒痒さと、それをわざ／＼斯様にして、他人と自分との前に暴露させるミス・プラットの冷やかな畫策とに、むら／＼とした。ミス・プラットが、斯うでもしたらと、伸子の爲を思つて、佯の赤裸な姿を曝らさせ様として居るのは、伸子に

よく判つた。「人前で器量を下げるやうな男！」ミス・プラットは、自分がさう思つて愛想づかしをすると思ふのだらうか。

執拗に黙つて居る佷に向つて、ミス・プラットは平手打ちを與へるやうに云つた。

「仰云られないのは、貴方の人格が空虚な證據です。——理想も熱情も、思想もありはしないのです！ 貴方はそれで伸子さんに」

「——ミス・プラット！」

ミス・プラットは蒼くなつた伸子を見た。——彼女は神経的な身じろぎをして、口を緘んだ。

八

ミス・プラットの好意を、伸子は次第に重荷に感じた。ミス・プラットのやり方には、何か、伸子が素直になれないものがあつた。次の稽古の日、日曜の夜の事に就ては互に一言も云はなかつた。が、ミス・プ

ラットは不圖、

「この間の晩、コスモポリタン倶楽部で、私心付いた事があつたのですよ」

と、云ひ出した。伸子は、帖面の上に両手を置き、弱つてミス・プラットを見た。

「食卓についた時、佷さんが貴女と私とに椅子をなほして呉れたでせう？あのとき、彼のなほしかたが、貴女に對してと私に對してとは違つて居たのですよ——氣がつかましたか？」

伸子は、頭を振つた。

「——え」

「私に對しては丁寧で、些も非難出来ない様子でした。けれども貴女にはすつとぞんざいに、片手でしましたよ」

ミス・プラットのところへ行くと、何か、此に類した話が出た。此迄一番樂しかつた時間が、さつぱりしないものに成つた。ミス・プラットが、佷によい感じを持たないと云ふ以上の自分に對する偏愛が、伸子には苦しかつた。女らしく行届いた殘酷さで、佷の細かいあらまで云はれると、伸子は却つて反抗心を燃やされた。

紐育市からフランスへ出征して居た兵士の凱旋當日であつた。

寄宿舎は早朝から、殆ど空になつた。伸子は近頃、さういふ事に餘り興味が持てず、寄宿舎にとつて未曾有な朝の静寂を楽しみ乍ら、部屋に残つて居た。窓から見下す街路も人氣なく、日曜の朝のやうな感じであつた。伸子は、編み下げのまゝの髪の手を指に巻きつけ乍ら、窓際に佇んで、祝日らしい戸外の景色を眺めて居た。すると背後で、扉を敲く音がした。突嗟に、佃が来た知らせかと思ひ、彼女は困却した。十一時頃から彼等は、ハドソン河を彼方に渡つて、永い散歩をしようと約束して居た。扉の方に歩き乍ら、伸子は、

「お入りなさい、——どなた」

と、聲をかけた。

「居らしたのね」

扉をあけて現れたのは、高崎であつた。

「まあ珍しいこと——どうぞ」

高崎は、研究が家政學であつたし、或亞米利加人の家庭に暮して居たりする關係上、平生現しく往來するといふ間でもなかつた。

「よく早く御出かけなつてね」

「ええ。私この位普通ですわ——ついさばを通つたんで、およりして見ましたの」

直子は、伸子のすゝめるまゝに外套の襟を開いて、椅子にかけた。

「——外套なんぞ、脱いでしまひなつた方がいゝわ」

「ええでも——さうも御邪魔して居られないから……」

小柄だが、たつぷりした黒い髪や、濃い眉、意志的な大きい口元など印象づよく、美しいところさへある顔で室内を見廻したり、伸子の健康をほめたりして世間話を始めたが、直子の様子には、何だか樂々しないところがあつた。何か心の中には、考へて來たことがあつて、それを切り出す前置きの爲だけに、實際の興味は大してないことを喋つて居る、其那ところがあつた。不安定な相互の心の状態で數分経つと、直子は、

「實はね」

と、本論に入つた。

「今日およりしたのは、久しくお目にかゝらなかつたこともあるし、傍々少し、私の老婆心をきいて戴かうと思つて上つたんですよ」

「さうお、有難う。——如何那ことなの？」

「大したことぢやないんですけれどね……」

直子はその時、感情の動搖をまぎらさうとするやうに、手をあげて、一寸帽子をなほし乍ら云つた。

「貴女——佃さんと大變お親しくなすつて被居るんですつて？此頃」

「さうよ」

「其について——貴女もきつと御承知でせうけれど、一年ばかり前、私大變佃さんに、いろく御厄介になつて居た事があるんですよ。勿論金銭上の事や何かではありませんけれどね、學課の手傳ひをして戴いたり、仕事を紹介して戴いたりして……」

直子は、云ひ出して仕舞ふと、彼女の確かりした氣象を現はして、澀みなく進んだ。

「本當に此方へ來てから、やつと御近づきになつただけのお友達ですけれど、年もとつて被居るので、私叔父さんにでも頼るやうな氣がしましてね。——かなり永いおつき合ひでしたから、私は、佃さんが人から彼此云はれなさつても、決して下等な方ではないのは知つて居ます。アバアの部屋で、夜おそく迄二人ぎりで居たつて、其はちゃんとしたものでした。其は私、誰の前でも、公明正大に云つて上げられるんですよ」

伸子は、聞いて居て、微笑ましい心持がした。求めもしないのに佃に與へられた信用狀を、喜んだこと

もあらう。直子が佃の行狀を保證することで、間接には自分の潔白さをも力説するのが、伸子に、自ら微笑を齎したのであつた。伸子は、優しく相手の言葉を承認した。

「其那ことについて、私何とか思つたことはなくてよ」

直子は、輝きの出た眼で伸子を見た。

「貴女はさうですとも。わかつて居ますわ。たゞ當時、随分迷惑な噂を立てられたのでね、私自分に疚しいところは一點もないけれども、佃さんにもお氣の毒だし、自分も困るから、一先づおつき合ひを御断りしたんですよ——お話ししようと思つたのはね、佃さんには、私、今だつて好意を持つて居ますが、あの人は友達以上に入つてはいけません、と云ふことなの……貴女がよ——きつと幸福に行きま

せんよ」

「さう？何故」

「何故つて……私さう思ふんですもの」

「どんな根據で？」

直子は、自信ありげに答へた。

「あれ丈御交際しましたもの、少しは解つて居ますわ、決してわるい方ではありません、けれどもね

「私はどうしてもさう思ふのです」

伸子は、云つた。

「貴女がさう仰しやるのも、私には解る氣がしてよ。あの人の性質の裡にあるものがね。——さうでせう？其はよく判つて居るのです。——私何れも彼も分らない程、上氣せ切つて居るわけぢやないんですもの。——でも、貴女如何お思ひになつて？私には一つの信仰があるのよ。——愛は人間を變へると思ふのです」

直子は、急に、漠然とした掴み得ない眼付で伸子を見た。

「……さういふことも、そりやあるかもしれないけれど」

「私きつとあると思ふの。つまり、境遇や何かの爲に下積みになつて居たいものが、順當な光りで育ち出すといふわけね」

「……… 佃さんは御親切だし……それは私だつて、あの方の幸福は願つて居ますわ」

伸子は熱心に云つた。

「私は、それに、たゞ元氣で快活で交際上手な薔薇色の青年は、どうしても好きになれないのよ。人間の苦しさも抜けて來た人でなくては詰らないわ、暗いところ、悲しいところ其處も知つて居るが、立派

な明るさ、晴れぐしさを、そこも判る。……佃さんは今、暗い方が周圍にありすぎるといふ状態でせう

「私、あの人が其處を抜けて、段々確りした高い明るさを持つ。それをまるで期待して居るわけなの」

直子は、さういふところへ來ると、伸子の心持が見當つかないらしかつた。彼女は溜息をついて、ぼんやり頷いた。

「でも、何故私のところへ、かうやつて、佃さんは駄目だつて云ふ方ばかり、來て下さるんでせう……あのひとの方も、こんななのかしら」

伸子は呟いた。

直子は聽て、自分の云ふ丈のことは云つたといふ實際家らしさで、袋や手套をかきよせた。

「兎に角、私いつかつから、思つて居たことを聞いて貰いて、さつぱりしたわ。用ひて下さらうと下さるまいと、矢張り申して仕舞はないうちね」

直子は片手の手套をはめ終ると、

「とんだお邪魔を致しました。では又いづれね」と、伸子の手をとつた。

「さうやう？」

伸子は、何だか變で、間の抜けた返事をした。直子は、しやん／＼した足どりで廊下へ出た。
「左様なら」

「さやうなら」

直子は、自分の良心的任務を果たした、といふ信念に満ちて居る風で、右手に袋を抱へ、左手を振つて、廊下を遠のいて行く。——角を曲る迄其後姿を見送つて、扉をしめると同時に、伸子は、何といふことなく、力無い歪んだ微笑を口の邊に浮べた。

二週間経たないうち、伸子はもう一つ、不意な訪問を、不意な人から受けた。

或午後、一枚の名刺が渡された。田中寅彦と云ふ、伸子の父の友人の子息であつた。彼女は、其青年とは初対面であつた。伸子は、廣間へ降りて行つた。彼は、凹室で待つて居た。いかつい、稍々ぞんざいな調子で初対面の挨拶をすますと、彼はいきなり怒つたやうに訊ねた。

「きのふ或處で、貴女が佃君と婚約をするとか仕たとかいふ噂をきいたが、事實ですか？」

何用かと思つて居た伸子は、驚いて青年を視た。皮膚の淺黒い、東洋人的に眉の吊り上つたこの青年が、其事に何の拘りがあるのだらう。伸子は、不快を感じ、冷やかに答へた。

「何か貴方に關係おありになりますの？」

「關係なんぞあるもんですか。私はたゞ、自分の親父と貴女のお父さんとが友達だと云ふ縁だけで來たんです——解つて居るのに注意をして上げないのは悪いと思つて。——佃君は偽善者ですよ」

伸子は、正面から凝つと田中を見つめた。

「何故さうお思ひになりますの？」

「さう思ふのではない、さうなのです！」

此等の訪問者以上、伸子の神経を疲らせるのは、佃の、再び懷疑的になつた感情であつた。グラント將軍の墳墓の圍りを歩き乍ら話した夜の、熱の籠つた確乎たる彼は何處かへ消失した。佃は却つて、前より恐ろしく感傷的に成つた。伸子は、外界から來る不安や不愉快さを、彼との對座で忘れ、互に勇氣づけようとした。

ね、本當に私共は好い生活をさせよう、自分達さへ動じずにやつて行けば、何が來たつて安心よ。ね、助け合つてよく仕あふ生活をさせようね」

佃は、喰ひつくやうに伸子を見守つた。そして、沈鬱極まる調子で呟く。

「どうかさうしたいものです。然し……分らない……時が萬事を證明するでせう。それまでは Great big "IF" です」

「——どうして？私共はもう決心したのぢやないの？決心したら決心し甲斐のあるやうにやつて行く丈ぢやありませんか。卑怯よ、今更そんな……」

彼等は、互に片時も離れられないやうに、益々執着を深めつゝ、絶間なく、さういふこぢれた熱情の衝突から涙を流し合つた。

復活祭が過ぎ、北方の氣が速くなるやうな五月が來た。樹々は一齊に新緑に包まれ、溢れる日光を受けて歡び戦いだ。空氣には、朝も、晝も、夜も、鼻翼を擦る若葉の香が満ちた。郊外の林間では、腐つた去年の落葉の下から、種々な野花が咲き出した。夕暮、眠い霧がその上をこめると、沼地で、シユアーシユワア。シユワア、シユワア、馬の毛の弓で胡弓をこするやうな、小動物の合奏が起つた。ツチ。ツチ。ツチ、チュル……行々子が囁る。自然は夜ちゆう、氣ぜわしい春のさわめきを聴いた。

伸子は、初夏の波に押されるやうに、自分達の運命に對して性急になつて來た。彼女は、よく夜通し眠らなかつた。

伸子は、大學の永い夏期休暇が始まるとすぐ、佃と一緒に、或湖畔の避暑地へ出發した。彼女は、その計畫に不賛成であつたミス・ブラットや寄宿舎の監督等との、一切の交渉を、非難を覺悟して絶つた。

伸子等は、十月近くまで湖畔に居た。都會へ歸ると、彼等は、自分達の結婚を知人の間に通知した。彼女にとつて記憶すべき其日は、秋の細雨が市街を濡して居た。彼等は、晚餐に、ブロードウェイの或料理店へ行つた。彼等は言葉寡に、食卓の上の飾電燈の輝を見守つて居た。すると、伸子のすぐ背後の仕切りの向う側で、無遠慮な男の日本語がはつきり聞えた。

「おい、佐々伸子が結婚したつてさ」
別の噺れた聲が應へた。

「へえ、………一體どんな奴だい」
「狎くしやんさ。——佃とか何とか云ふ亞米利加ごとくつついたのさ」
——伸子は、高く酒を啜る音を聞いた。

雨夜で、壁に行燈形の電燈のついて居る玄關は陰氣であつた。古びた天井が低くかぶさるやうで、薄い絹の靴下一重の下に、畳がつめたかくかく觸つた。如何したのか誰一人出て来ない。屏風の置いてある狭い板敷へ来かゝると、ひよいと突當りの曇硝子の戸から、女中の不用意な顔があらはれた。四人、父を先立てゝ来るのを認めると、喫驚し抜いたやうに、

「まあ！」

挨拶もせず、いきなり奥へ駆け込んだ。さら／＼と爪先を摺るやうな聴きなれた母の登音がした。伸子は、母が床について居ると許り思ひ込んで居たので、その軽い速い熱心な足どりを聞きつけると、自分が歸つたときいて、亢奮の餘り立つて来たのではないかと、ぎよつとした。伸子は、急いで厚い扉を開けようとした。向う側からも急にハンドルをガチャ／＼云はせ、戸が開かれた。女中と重り合ふ

やうにして、多計代が出て来た。

「まあ如何したえ、伸ちゃん！」

感に迫つた顔なので、伸子も言葉が出なくなり、母の手を執つた。

「大丈夫なの？ 起きていらしつて」

「あゝもう大丈夫なの。さぞ寒かつただらうね、……それでもまあよく無事で」

伸子は、

「さあお床へ行きませう」

と、お召のどてらを羽織つて居る母の背中に手を廻した。

「もういくらでも悠くり話せるんだから」

母は、伸子が軽く押すのを拒むやうに、足に力を入れた。

「本當に大丈夫なの心配しないで。——大抵起きて居るのだから」

「——だつて——」

伸子は、疑問を感じて母の顔を見た。母は少し寝れ、髪も引つめにして居る。伸子は、小聲で訊いた。

「赤ちゃんは何？」

母は、微かに間の悪さうな表情で、

「いゝえ、其がね」

と、低いなりに確かに云ひかけたが、

「いづれあとですつかり話すよ」

と叫くと、急に晴れぐし聲を張り上げて、下の娘を呼んだ。

「つや子ちゃん、つや子ちゃん、何處に居るの、お待ちかねのお姉ちやまがお歸りですよ」

そして、先へ立つて、父や弟達も居る部屋の前をあげた。

「可笑しな子だこと、今朝から彼那に大騒ぎをして待つて居たのに。——火のそばへ行くといゝわ。

生憎雨降りだねえ、今日は」

伸子は、自分の生れた家へ、一年ぶりで歸つて来たのであつた。彼女は、座敷や廊下を歩き乍ら、何故だか親類へ客にでも来たやうな、一種のそぐはなさを感した。伸子は、暖爐わきの長椅子にかけた。相對したもう一脚の方に父、弟が並んで居た。久しぶりで會つた懐しさは、互の腕に流れ合つて居た。が、さて何から切り出さう？ 伸子は笑ひ乍ら、

内の廣間は暖で華かで、亢奮して居る。その浮々した歡樂と、外の暗い冬の海の咆哮とを對照して、伸子は鋭く感じた。

一人の侍僕が、その室の入口に現はれた。手に紙切れを持つて居た。夕刻から、返電を心待ちにして居た伸子は、その方へ注意をひかれた。侍僕は暫く踊る人群の間を縫ひ、聽て元来た處から外へ出た。手に紙片を持つたまま、伸子は胸欄に沿つた低い椅子の一つから立ち上り、大階段の上まで出て見た。兩腕をぶらさげ、歩調に合わせて呑氣にその腕を、體の前で振り乍ら階段を登つて來た侍僕は、そこに佇んで居る伸子を見ると、職業的に容を改めた。

「佐々さんで被居ますか」

「——電報？」

「只今受信いたしましたさうです」

「どうも有難う」

伸子は直ぐそれを開き、立つたまゝで讀んだ。「ハハアンサンアンシンアレ——母安産安心あれ——。伸子は、自分の耳に、急に強く、空虚に、舞踏曲が響いて來るやうに感じた。二週間前にこれさへ來たのだつたら！ 然し、伸子は自分の感情を克服した。

母の顔を見る迄、伸子はその電報の打たれた日に、弟か妹かが生れたもの、と信じて居たのであつた。

窺れこそ見えるが、勿論母の様子は、一昨日新たな子を迎へた人ではなかつた。そして、又何故彼女は、伸子はその爲許りに、弾んだ呼吸も聞えるだらう程せき込んで歸つて來たのに、あゝ軽く、何氣なく云ひ紛らして仕舞つたのだらう。伸子は家ちゆうの空氣に、急に歸つて來た者を整はない準備で迎へるさわめきばかりを感じた。母には、何の爲に伸子が今頃歸つたか、解つて居るのだらうか。——伸子は、膝の上に抱き上げて居た妹を下した。彼女は、外に洩されない不満の吐息を深く内に吸ひ込みつゝ云つた。

「さあ——そろ／＼着物着換へようかしら……」

彼女は立ち上り、外套にくるまつたまゝで居る自分を見廻した。

「これちやあくつろがないし、何だか變だから。——私の着物は何處？」

「何しろ私が寝て居たから、どうも手の廻らないこと云つたら、お話の外だよ」
多計代は、卓子に兩手をつけて立ち上つた。

「さつき温めて置くように云つただけで、どんな有様だか」

伸子が出発する頃は普請中であつた部屋々々が、すつかり今は住み馴らされて居た。母の居間は、手綺麗な四疊半に成つて居た。低い茶室好みの襦が二人の背後で閉まると、伸子は、

「ねえ、どうしたの一體」

と云ひ出した。

「何だか行き違ひがあるやうね」

炬燵の火加減をなほすのにうつむいたまゝ、多計代は答へた。

「あゝ。——實はお前が、此那急に歸らうとは思つて居なかつたのでね」
「どうして？」

伸子は意外なことをきくと思つた。

「あの手紙を戴くとすぐ電報を出したのに、着かなかつたの」

「私は父様が其那ことを云つておやりになつたなんてこと、ついこの間までちつとも知らなかつたの

さ。——けれども、今度こそ覺悟したよ、豫定より俄に早くなつたので、いざと云ふ時、産婆さへ來

て居ないと云ふ始末だつたもの」

「いつだつたの？」

「十一月の廿八日——一月早かつた譯だね」

「……………」

伸子は何も知らず、其日、サンフランシスコに着いて居た。

多計代は、黙つて居る伸子をしげ／＼見ながら云つた。

「でもまあ、伸ちゃんもよく元通りになれたね、彼方で病氣をしたと聞いた時の私の心持つたらなかつたよ。あの時は、此方でも、家ちゆう枕を並べて居る有様でねえ」

多計代は、一寸言葉を途切らせた。

「其にお前……追々話して、お前の考へも聞かなければならないが……ひどい心配をしたよ」

伸子は、顔を赧らめた。

「遠くていろ／＼はつきりしなかつたから」

「其もさうだし、第一佃さんといふ人のことは、父様から一寸伺つて知つて居る丈ぢやあないか。それもあゝいふ人のいゝ方のおつしやることだから當にはならず、妙なことは聞くしよ。——どつちみち歸つたら判ると思つて、本當に、私は待ちかねたよ」

母の調子は慈愛深く、恨み乍ら許して居る暖さが籠つて居た。伸子は、初めて、自分が想像して居たとは全く違ふ意味で待たれて居たのを知つた。何だか家の氣分が、自分の心持としつくりしなかつた理由が氷解した。それと同時に、今迄、幾分神経的な鋭さで緊張して居た伸子は、親の温情が湯のやうに自分を圍むのを感じた。多計代は、娘に對するといふより寧ろ年下の若い女に好意ある擲揄をするといふ風に、笑ひを含んで云つた。

「——それでもよく感心に、一人で歸る氣になれたね」

「だつて大變だと思つたし……」

伸子は、母に面と向つて、佃の名を口に出す事を變に極りわるく感じ、省略して云つた。

「今はどうせ大學を離れられなかつたから」

「一人で却つてよかつたよ、いろ／＼相談しなければならぬからね、家としても重大な問題だから。父様はあゝいふ方だからお前には何も仰云るまいが、大變だつたのさ私ばかり——内と外でね」

多計代は、伸子が脱ぐ薄いブラウスや可愛いレース飾りのついた細々したものを、一々手にとつて眺めた。

「女のものは何處へ行つても綺麗だね、これは何と云ふもの？」

彼女は、出發の時、自分も一緒に手傳つてトランクにつめてやつたものを、伸子が身につけて居たのを認め、懐しさうに云つた。

「おや、まだそれを持つて居たの？」

「相變らず……着物なんぞ一向拵へなかつたのよ」

「私の上げた短冊はどうなつたらう」

「あるわ」

多計代は、伸子が出かけるといふ朝、かなし子よまさきくてあれ海遠くわけへだつとも母見まもれり」

といふ歌を一首、餞別として呉れたのであつた。

「奥様」

女中がそのとき、襖の外から母を呼んだ。

「そろ／＼御飯の御仕度が出来ました」

「行かうぢやないか」

「ええ。——でも赤ちやんを見たいわ、前に」

「ねんねだらうよ」

母は先に立つて、廊下を一曲りした座敷の唐紙を開けた。電燈を一隅によせて、薄暗く覆ひのしてある下で、看護婦が洗濯物をたゝんで居た。小さい枕屏風にかこまれて、針さしのやうに膨れ上つた赤い布團がある。伸子は、拔足をして近より、膝をついて、すや／＼睡つて居る嬰兒の顔を見た。小さくて、母似か父似かさへ判らず、妹といふ感じが適切になかつた。彼女は、背後からかぶさるやうに中腰になつて覗き込んで居る母に、顔だけ仰向けて囁いた。

「名、何ていふの」

「ゆき子としたのだけれど」

「お乳くさいのね」

皆の居る處に戻ると、父が機嫌よく冗談を云つた。

「やつとお出ましたね、大分内緒話があつたと見えるな」

伸子は次第にくつろぎと楽しさが心や體にしみ込むのを感じた。

三

金屬の何かを、小さい槌でも叩いて居るらしい、澄み渡つたカン、カンカンカンいふ連続的な音で、段々伸子は眼を醒した。人の手先が細かに動いて發する其音には濃やかさがあり、その音の爲に却つて朝の閑寂が増すやうであつた。伸子は、響の具合で、外は晴れて居るのを知つた。

今頃は、何が何をして居る時分だらう。一夜明けた今朝は、自分の歸つて來た意識が鮮やかに迫つて彼女は淋しい心持がした。

母は、食事部屋の卓子で手紙を書いて居た。

「お早う」

「どうしたい、よく眠れて？」

多計代は筆を置いて、硯を片よせ乍ら云つた。

「久しぶりだねえ、此那にして御飯一緒にたべるのは。晝間は淋しい位だよ、皆留守になつてしまふからね。——何をたべるかい」

「母様は何をあがるの」

「私はパンよ、この頃」

「ぢやあ私もさうするわ」

伸子は昨夜、母と床を並べて寝た。彼女達は眞暗な中でいろ／＼話した。今朝も、母の話題は無限にしかつた。伸子も胸一杯あることはあるのだ。けれども、それ等はどれも母の経験外のものだ。まして、

「ねえ母様、あの人今、どうして居るでせうね」

などと云へようか！ 一番云ひたい事を控へて居る爲、伸子は窮屈であつた。多計代は、久しぶり

で話對手を取り戻した悦びで、伸子のさういふ感情に無頓着に、さも愉快さうに云つた。

「可笑しいぢやないか、父様つたら今朝頻りに、伸子が昨夜何を話したつておきゝなさるんだよ」

「さうお、お父様を仲間はづれにしたからよ、きつと。——何て仰云つて、それで」

「何つて、話したことを又話して上げたの」

「満足なさつた？」

「特別に私と寝たいつて、お前が云つたらう。だもんで何か——お前が身持ちにでもなつたのかと思つたつて仰云るのさ」

多計代は、さう云ひ乍ら、何と突拍子もない笑ひ話ではないか、と云ふ風に笑つた。

伸子は妙な苦々しさを感した。若し、實際自分がさういふ體であつたら、このやうに、其那ことはあり得ないと思ひ込んで居るやうな母は、如何な顔をするであらう。彼女は、母の微妙な言葉の抑揚から、はつきり、自分の結婚が如何とられて居るかを理解した。昨日船まで出迎へに来て呉れた父が、そはついで、人目を憚るやうにして居たのと思ひ合はせ、伸子は厭な心持がした。

「本當に世間なんて厭なものさ、お前のことが知れると、津村の奥さんなんか、ふだん足踏もしたことないに早速やつて来てさ、それ見たことかと云はんばかりのことを云ふしね。會はなければ會は

ないで、猶更變に思はれるから、大きなおなかを抱へて、苦しいのを堪へて、一々會ふ思ひつたらなかつたよ」

「あの娘は我まゝ者ですから、泰然として居て下さればいいのよ」

多計代は、伸子がさう云つただけで、自分の受けた苦痛に對して感謝しないのが、不満らしかつた。むつとした調子で云つた。

「其はお前は遠くに居るんだし、すき勝手をして有頂天になつて居たんだから、泰然とでも何とでも出来るだらうが、私共は左様簡單には行きませんよ。これだけにして居れば、少しは體面といふこともあるからね」

伸子は、兩親の心遣ひをおろそかに思つて居る譯ではなかつたが、さう云ふ風に云はれては心外といふ心持がした。

「いろ／＼御心配をかけたのは本當に悪うございました。けれども、私は母様をないがしろにして、あゝしたのではなかつたのよ。他にしかたがなかつたから——」

「さうは思へないね。すきな者なら好きでいゝから、もう少し、私共の顔を立てゝ呉れる方法もあつたらうぢやあないか。第一、私は一度も會つたことも無い人だし——其に——」

多計代は深い疑ひを聲に現して云つた。

「その佃といふ男が私には疑問だよ。——私はかりぢやない、皆疑問をもつて居る」

伸子はもういつの間にか、佃は「さん」づけにする價値ない者、と心にきめたやうに、佃 佃と呼び捨てる母の口調が、悲しく可笑しかつた。

「どうして？ 細かく申上げたぢやあないの」

母は、鋭く伸子を見た。

「さうさ、お前は正直に云つてよこしたらう。けれども其はお前の見た——見たと思ふ佃さんだらう？ 佃さんがお前に話して聞かせた事、だらう？ 其が間違ひないその人の全部かい？」

伸子は、烈しい母の言葉を受け留めるやうに答へた。

「あの人は私に嘘はつかなくてよ」

「どうかさうであるように祈るよ。一生のことだからね。——私だつて、お前の愛する者はそのまゝ信じ度いさ。お前が愛すやうに愛しても上げたいさ、出来ることならね。けれども、疑ひがある以上、私はその疑ひがすつかり晴れる迄は信じませんよ。——私の性質だから。——これまでだつていつも、私一人が憎まれるものになつて、種々あぶない處を切りぬけて來たのだ」

伸子は、きつぱりした母の語氣に一種の壓迫を感じた。彼女が自分の意力で、今度のことまで、填せば壊せさうに信じて居るらしいのが、伸子を不安にした。伸子は、反問した。

「母様には何が一番疑問なの？——若し説明できる事ならした方がいゝわ。何故と云ふと……」

伸子は、豫期して居たものに愈々ぶつかつたのを感じた。

「今度のこととは私、遊びではないの。萬一、母様と私との意見が違つても、私の決心は變はらないの。だから出来る丈解り合ひませうね」

多計代は、紅茶をさして、一口飲んだ。

「……いつかは話さなければ成らない事だからそれもよからう——皆は、お前が騙されて居ると云つて居るよ」

「あの人は、自分に何もない事を、初めから隠しては居なくてよ」

「隠さないといふ事で、お前の子供らしい歡心を買つて居るのさ」

「まさか！」

「ちやあ何故、ちやんとした紳士らしく、お前が何と云つても、一先づは歸つて来てだね、私共の承諾を得てからにしないのだえ。——相當な親がついて居るから、どつちに轉んでも損はないと思へばこ

そ、お前を捉まへたのだらう」

伸子は、母の手をとつて、自分の手の中へ押しつけた。

「其は思ひ違ひよ、絶対に。それに斯ういふ事柄は、一方だけのものぢやない、私だつて、責任は半分あるのよ。第一、母様のやうに考へたら堪らないわ、私なんぞ、その爲に騙さうと思ふやうなもの、何も持つてやしないぢやありませんか」

「……ものには程度があつてね、零に比べれば一でも、ある部になりますよ」

多計代は、手をとられたまゝ、氣を許さず、じろく／＼伸子の顔や髪を眺めて居たが、やがて、

「だがまさか、大學に居るといふのは嘘ぢやあるまいね」

「え？」

「いゝえね、佃といふのは、洗濯屋だつて云つた人があるからさ」

伸子は、深い憤りを感じ乍ら、これには眞面目に對手されず、

「何とも分らなくつてよ」

と答へた。

「若しかすると親類ちゆうの洗濯ものを買ひしめる魂膽かもしれなくてよ」

四

伸子は、自分が變つて歸つて來たのを感じた。伸子の心と生活の中には何といふものが加はつた。両親の方でも何かさつぱりしないものがあつて、元の伸子に對するやうな心持になり切れない。さういふ日が續いた。

日が經つにつれ、何に對して多計代の感情が落付かず、混雜して居るのも、前後の事情に照せば無理ないと、伸子にも思へるやうになつて來た。伸子が手紙で云つてよこした事、佐々が話すこと、其等は、新聞だのその他から彼女の耳に入る噂とは、全然性質が反對なものであつた。自分の目で何を見たことのない多計代が、その孰れについて彼を判斷してよいか分らず、彼女に知れて居るのは良人の好物さや伸子の世間見すで、一本氣な點ばかりであつて見れば、つい、一番どうとも想像し易い何を、不

信と惡意とで考へる方に傾くのも、一應止むを得ない勢であつたらう。

けれども、伸子にして見れば、母が、娘の周圍に現れる男と云へば、きつと惡黨でもあるかのやうに沒常識な警戒心を抱くのが恐ろしかつた。何が貧しく、社會的背景も持たない爲、多計代は一層、彼女の疑惑を深めるのだと思ふと、伸子は公憤を覺えた。

再び伸子が手許にかへつたことは、彼女にとつて勿論悦びなのであつた。差し向ひになると、伸子が留守であつた間の寂しさや苦勞を、話さずには居られないらしかつた。話せばどうしても何のことに觸れずには居ない。何の名が出ると、多計代は平靜を失つた。

父が會社に出勤した後の永い晝間が、伸子にはかなり重荷となるのであつた。

「伸ちゃん」

多計代が居間から伸子を呼ぶ。伸子は大抵、自分の部屋に居た。母の憚らない呼び聲が、ぼんやり彼女に迷惑な心持を與へる。が、伸子は直ぐ立つて行き、そして、母の居間の唐紙をあけた。

「何御用」

多計代は、膝の上に染物の色本をくり擴げて居た。彼女は明るい障子の方に本を近づけ、頻りに色を見わけ乍ら云つた。

「喜久屋が来たんだがね」

「何をお染めんなるの」

「山前が一反あるから、羽織にでも仕ようかと思つて——どうも近頃は元と違つて、染草が悪いのか、氣に入つた色が尠ないねえ」

多計代は聽て、思ひ出したやうに伸子に訊ねた。

「さう云へば、お前の持つて行つた紫友禪の着物はどうなつたえ」

「あるわ」

「もうあれも着られまいね、いゝ模様だが——」

猶、色本に半ば氣を奪はれつゝ、

「どうする積りだへ、着物だつて少しはどうにか仕なくちやあなるまい」

「よくてよ、……いらぬわ」

「いらぬいつたつて、さうもゆくまい。……ぢやあまあこれにでもして置かうか」

多計代は、女中に白地の反物と色本とを渡し、筆筒をしめ乍ら、次第に考へが擴つてゆく口調で呟いた。

「——一體、佃さんのお國はどんな處なんだらうね」

「さあ……何故？ まだ行つて見ないから私も判らないわ」

「だつてさ、妙なお國風だね、兎に角斯うやつてお前が歸つて來たら、一應何とか御挨拶があつて然るべきだらうと思ふね。——それとも何かい、佃さんは親御に云つてやらないのかい？」

「其那ことなくてよ」

多計代は、自尊心を傷けられたやうな皮肉さで云つた。

「——嫁の親から御挨拶申上る迄、黙つて居らつしやるといふわけだらうか」

「何と云つて來ていゝのか、見當がつかないから黙つて居るんでせう。當人が歸つてども來れば、きつとちやんとするでせう」

伸子は仕方がないので、香氣らしく云つた、それが多計代を不快にした。彼女は、

「お前が同志は、それでもよからう、どうせ萬事普通と違ふのだから。——」

「けれども、私はこの間から考へて居るんだが、人並はづれた事が必ず正しいこととは定つて居ないからね。奇ばかり街ふのはたの迷惑だよ」

「奇なんぞ街つて居やしないわ。たゞ母様と私と性質も違ふし、ものゝ考へやうも違ふといふ丈ぢや

ないの」

「ぢやあ、お前は一から十まで自分のすることは正しいと信じて居るのかえ」

豫想もつかない事から、斯ういふ感情的な議論になることが多かつた。伸子も初は、いつも節度を保たうと努めた。けれども、多計代の熾烈な、對手を容赦しない性格は、最後には伸子をも、むきにさせずに置かなかつた。むきになると、伸子も母同様、屈しない激しい生れつきを現すのであつた。

一月下旬の或日の事であつた。

小さな事から、又話が激して來た。伸子は殆ど困惑して云つた。

「私が歸つてから、同じことばつかり繰返して居るやうなもんだわ。——もうやめませうよ、ね。……私、母様の御志はよく判つてゐます。けれども——斯う云ふ風に話すのはやめませうよ」

すると多計代は上氣した頬で突かゝるやうに、

「お前も變つたね——元は決して斯うではなかつた」

と云つた。

「お互にどこまでも、意見を交換するだけの真心と純粹さを持つて居た。それがお前の身上だつた。

誰の感化だか知らないが、新しい態度だね……」

伸子は胸の何處かを小突かれたやうに、感情が燃え立つのを感じた。多計代は、女ばかりが——或は娘に對して母ばかりが心得て居る本能で、いつも斯ういふ風に巧く、伸子の急處に毒針を突き立てた。

そして、對手を猛々しくする。然し、その日は、伸子もやつと自分を制して答へた。

「私は狹くて避けるんぢやないのよ。たゞ、議論のための議論のやうなことは仕ますまいと云ふの」

「其が勝手だと云ふんです——自分は散々好き放題をして、親の顔に泥を塗る。然しお前は冷静で居ると、其那注文が出来る義理かえ、抑々苦しい思ひをして、何のために外國へ迄やつたのか、少しは私の身になつても考へて見るがいい」

涙をこぼし、口惜しさうにその涙を拭く多計代の、年の竅れの現れた指つきを見ると、このやうな事で云ひ争ふ母娘の惨さが、伸子の心に徹へた。彼女は、向ひ合つて腰かけて居たのを立つて、母の膝の下に、絨氈の上に坐つた。そして、嫌めるやうに、自分を理解させようとするやうに云つた。

「ね、母様、それぢや一つ佃といふ人間を離れて考へて見て頂戴。どつか母様の知つて居らつしやる

人の中で、私が愛してもいゝとお思ひなさるやうな人があること？

一人でも自由に交渉させていいとお思ひになつたことがあつて？

ないでせう。どんな人だつて、その人が私と深い交渉を持ちさうになると、母様の目には價値のない者となつて仕舞ふんですもの」

「……大變な悪婆ですまないね」

ふいと傍を向きさうになる手をつかまへ、伸子は、

「其那意味ぢやなく、さ！」

と云つた。

「母様は大體、公平に云つて、一種の理想家すぎるのよ、私のこととなると。——ね？ 私の仕事と

か成功とかについて、どんなに御自分が澤山の希望をかけてゐらつしやるか——それは考へて下され

ば分るでせう？ 母様は、或點で御自分の生活では出来なかつたことを、私にさせたいと思つてゐら

つしやるのよ、ね？ さうでせう？」

「それはさういふところもあるだらう」

多計代は、これに對しては、憤りも出来ないといふ風に答へた。

「大いにあるのよ。母様には、戀愛なんかから超越して、孤り高く淨しと云ふやうな、私を見て居る

のが趣味なやうなところがあるのよ」

「何も獨りで居ると云ひやしません。いゝ人さへあれば、お前を啓發して呉れる人がありさへすれば、

いつだつて私はよろこんで迎へますよ」

「……結婚する氣持が——多分母様とは違ふのよ」

「それは仰云るまでもなくわかつて居るよ」

辛辣な調子に戻り乍ら、多計代は口を抉んだ。

「お前の考へはボルシエビキだ」

「——普通、娘さんはお嫁に行つて落付いて、良人と同化して、最も現在の社會に安定な生活を得よう

とするのが目的でせう？ だから同じ階級、同じ傳統をもつた家、又は少しか或は澤山、運命が許す丈

成り上ることを條件とする——違ふといふのはこゝなの……私は自分が育つたやうにして育ち、自分

が見て来たやうなものばかり見て来た、その親達も親達とそっくりだといふやうな男には、ちつとも

興味を感じない。それどころか不安よ。だから私が牽きつけられるときは、いつでもきつとその點だけ

でも何か違つたところがある者だといふことになつて仕舞ふの。——お分りになる？……だから、個

がよい、わるいは抜きにしたつて、この點で、どうせ母様は満足お出来なさらないだらうと思ふわ。私

は野蠻人だから、生活だつて何だつて、自分の手で自分の欲しいのを掴んで見なければ承知しない質

なのよ。……」

伸子は黙つた。多計代も黙つて居る。二人は永いことさうやつて、暖爐の低い焔が、時々ひら、ひ

ら、燃え上つて、四邊をぼんやり赤く照らす夕闇の中に居た。

五

空が晴れ渡つて、風が、椿の艶ある葉をゆるがして吹いた。
山吹がもしやく茂り、小枝の折れ、落葉等、雑然と重りあつて居る手入れされたことのない庭の隅に、杜若がぞつくり揃つた芽を出して居た。青々としたその芽生えのところだけは、特別日光が溜るかと思ふ程、明るく美しく見えた。——暖い。……眼を細め、その強い緑色の中にある明暗を眺めて居るうちに、不思議な烈しい感覚が伸子の全身を流れた。伸子は、喉につゝかけて来るやうなときめきを感じ乍ら、力一杯のびをした。彼女は、拳固を握つたまゝ、その腕をぐるりと振り廻した。腕が白く光つて震へた。
風が又渡つた。——眞竹の鋸がさやくと鳴つた。離れの縁側で、保が熱心に何かやつて居る。近よ

り乍ら伸子は、

「何やつてるの」

と、聲をかけた。

「——來たの」

あとけない生毛の渦巻のある横顔を見せ、保は、覗き込んで居る箱から目もはなさない。

「なあに」

伸子は弟の肩越しに首を延した。それは二尺に三尺位の苗箱であつた。細かい細かい黒土を見事に篩ひならした處に、四分程に延びた芽生えが、弱々しく、ひよろり、ひよろりと並んで居る。

「何の芽生え？……少し貧弱みたいね、いゝの、それで」

保は、始めて、

「ちつとも好かあないさ」

と、當惑さうな表情で伸子を顧みた。

「シクラメンの實生なんか、専門家だつてさう樂々ぢやあないのさ。だから僕なんか下手なのあたり

まへなんだけれど……悲観しちやうなあ」

伸子は、笑ひ出した。

「でも感心に、生えたぢやないの。——段々大きくなるんでせう？」

「——解らないさ、其の腐り易いんだもの。芽を出すに都合よく暖めると、すぐ泥に儘が生えちやふし。

——困つたことに、ほら斯ういふの、ね、變に勢がないでせう」

保は、箱の隅の凋れた一本の芽を指さした。

「何故斯うなるか原因が判らないの。泥や何か、本に書いてある通りに仕ただけだ」

保は十四歳であつた。彼は冬ぢゆう、この箱を縁側に持ち込んで火鉢を入れたり、硝子の蓋をした

りして、發芽を楽しんで居たのであつた。

思ひがけず相手が出來たので、保は盛にシクラメン培養のむづかしさを説明し始めた。此は生えて

も數年後でなければ花を持たない事、温度と湿度の調節が蘭栽培に劣らず困難なこと。彼は、暇さへ

あると抱へて歩いて居る園藝の本からよくも覚え込んだ知識を、雄辯に、而も處々で子供らしくこち

や／＼にし乍ら話すのだ。

「ね、だから温室なしぢやあ出來ないのあたりまへさ。——こなひだなんか僕の知らないうち、犬が

足を突込んで、根こぎにしたりするんだもの」

伸子は愛情から、短い受け答へをした。けれども、正直に云ふと、伸子は保の云ふ事を、半分も聽き

しめては居ないのであつた。彼女の心持は朝から均衡を失つて居た。注意が散漫になつて苦しいので、

部屋を出て來たのであつたが、三月下旬の庭の生動する雰圍氣の裡では、却つて彼女の内に纏つて居

る重い、激しい、同時に懶い心持が募るやうだ。

伸子は、離れを、ぐるりと風呂場の裏へ廻つた。石炭殻がザクリ、ザクリと大きな音を立てた。

「だれだい」

「私」

ガラリと窓が開き、つや子が、

「お姉ちやまあ」

と目を覗かせた。側に多計代の縞の羽織が見えた。

「保さんは？」

「フレイムの處で頻りに悲観して居るわ、シクラメンが腐るつて——」

つや子が、

「ね、お母ちやま、いゝでせう？ 大丈夫僕もういゝのよ、ねえ、お母ちやま！」

と云ふのが聞えた。つや子は、兄ばかりの中に居て、自分のことを、僕、僕と云ふのであつた。

「駄目ですよ、又細谷さんを呼ぶやうになりますよ」

「——何駄々こねてるの」

「外へ出たいつて云ふのさ、まだ起きて二日にしきやならないのに、外へなんか出ると又すぐごほん、ごほんになつて仕舞ふのに——仕様のない喘息やさん」

伸子は、ぶら／＼其處から女中部屋の横へ出た。障子が麗かに開け放され、すぐ窓際に、女中が向ひ合ひで縫物をして居た。二人ともうつむいて、焦茶地に黒く細かい緋の銘仙男物の着物と羽織を縫つて居る。それを見ると、伸子は制して居る感情が、その衣類に向つて迸るやうな動搖を感じた。佃の着物であつた。彼の歸る仕度にそうやつていそいで縫つて居る。——伸子は女達に氣づかれないやうに、客間の庭へ去つた——。

去年の十二月に歸つて来て以來、三月になるまで、時に伸子は、佃に會ひたく涙の出るやうなことがあつた。然し如何那に騒いだところで、彼の仕事に一段落つかなければ歸れないのだといふ諦めが、一種の支へになつて居た。ところが愈々、佃は四月早々歸朝するにきまつた。特に三月十九日、彼を載せ

た船がシアトルを出てから、伸子は壓搾されて来た待ち遠しさで、潰れさうに感じた。彼が横濱に着くまでの毎日が、恐るべき無聊、期待の餘りの、精神的不活潑のうちに過ぎた。

若し小遣ひでもたつぷりあつて、彼を賑やかに迎へる仕度でも出来たら、伸子は大分助かつたに違ひなかつた。けれども、彼女には金などちつともなかつた。佃の旅費に、伸子は自分の力でもつた金の他、相當な額を両親に出させて居た。

「私いろ／＼買ひたいものがあるのよ、お金頂戴」

などと、其故、云へる状態ではなかつたのであつた。第一、佐々の家で、佃が數日中に歸るといふことを悦んで居るものは、一人もなかつた。夜など、両親が何かひそ／＼話して居るところへ、何心なく伸子が入つて行く。彼等は急に黙り、

「何か用かへ」

と訊かれた。さういふ時、両親は、親といふより夫婦として強く伸子に感じられ、悲しく疎外された感情が彼女を襲ふ。自然に現はす道を塞がれたこの待ち遠しさで、伸子が獨り居て佃を想ふと、病的な熱さが心を苦しめるのであつた。

やつと二日になつた。その日は日曜日であつた。

眼がさめると伸子は、あゝもう今日一日だ！と思つた。今日一日……今日一日……その一日が何と自分を疲らすであらう！……伸子は人に顔を見られたり、口をきいたりするのがいやであつた。このまゝ寝て居るところへ、何が急に入つて来てくれたら、どんなに嬉しからう。憂鬱な位の機嫌で、伸子は食事部屋へ出て行つた。卓子の上に一人前の食器が出て居る。傍で多計代がカステラを切つて居た。

「——お客さま？」

「たてつゞけさ。——お休みでもこれだから、家に居らしちや何にもなりやしないね……」

「さうく」

と、多計代は急に、自分の前にある菓子折の包紙や水引をかきのけた。

「電報が来て居たよ」

「電報？」

「船からだらう。今そこに在つたのに……」

伸子は俄に動悸を感じ、一緒になつて其邊を探した。今になつて變事でもあつたのでは堪らない。「名があつたこと？」

「さあどうだつたか……」

その落付きやうが、伸子には不自然に思へ、不愉快であつた。電報は時事漫画の下から出て来た。發信人ツクダといふ文字を見て、伸子は幾分安心した。

「二カゴゴニウコウとある。」

「二日——二日つて云へば今日だわね」

「さうさ」

「變だわね……二日午後入港とあるんだけど……」

時計を見、伸子は一どに遮しい困惑した心持になつた。午後といふだけでは、午後一時なのか六時なのかさへ判明しない。

「私、訊いて見るわ」

伸子は、電話かける間も心配なやうにして、郵船會社に問合せた。若い事務員が、ぞんざいに、「今日入港します」と答へた。

「何時頃？ 夕方ですか」

「いや早いですよ、もう港外に居るでせう。お迎なら早くいらつしやらないと駄目ですよ」
伸子は、妙な顔をして電話口から戻つた。

「——矢張り今日なんですつて……」

「何だいその顔は」

多計代は、突立つて居る伸子を見上げて苦笑した。

「ぼんやりして居ちやあいけない、行くなら行くで、父様に申上るなりなんなりおしな」

部屋で着物を着換へ乍ら、伸子は不意打ちの気がした。如何に不意打ちにしろ、彼程待つて居た彼

が一分でも早く着くなら、飛び立つ程嬉しい筈なのに——。いざとなつて見ると、伸子は空想して居

たやうな歡喜が感じられないので、意外な思ひがした。彼が到頭歸つて来る——然し見ないうちには、心

にある彼、その彼が歸つて来るといふのさへ、變に信じられぬ。伸子は、十五年昔の或夏の晩方の光

景を思ひ出した。五年ぶりで父が英國から歸朝するといふので、八つの伸子は夜眠らなかつた。其朝、

吊ランプの下に鏡臺を出して髪を結つて居る母の後で、團扇で蚊を追ひ乍ら、まるで口をきかない母

が平常と違つて、可怖かつた覺えがある。——伸子は今、其朝の、母の複雑な、妻としての感情が理解さ

れた。

櫻木町行の電車はすいて居た。彼等と向ひ合つて、外國商會に勤めて居るらしい中年の道樂者らし
い男と、卅二三の夫人、あと數人の男が乗り合はせて居る許りであつた。電車は夕、カタ、と揺れ
て、暖かい日光に燦いて居る、東京と横濱との間を繋ぐ雜然とした風景の間を疾驅する。
佐々は、衣囊から小さいノウトを出して見て居た。暫くして伸子は訊いた。

「何時？」

「——さあまだ二時位なものだらう」

彼は、時計を出した。

「ほう、十分過ぎて居る……案外かゝつたね」

佐々は、人さし指を頁の間に挟んで持つたノウトで、軽く外套にくるまれた膝を叩き乍ら窓外を眺

めて居たが、不意に伸子の方に體を振り向け、低く情愛深く囁いた。

「——餘り充奮しちあいませんよ、人が見て居るから……」

彼は元の位置に體を戻し乍ら、稍高い聲でつけ加へた。

「同情すべきさ、お前に上氣せられては參るからね」

「さや……父様」

彼等は櫻木町から俵に乗つた。亂暴な港の俵夫は胸をのめらせ、支那の苦力のやうに叫び乍ら驅け出した。

コレア丸は丁度、岸壁に横づけになつたばかりであつた。

ガングボードをとりつけるところで、コレア丸から乗出した水夫が大聲で合圖を叫ぶ。其に答へつ、數人の男が石畳の上で、車輪付階段を押し居る。それを待ち切れず、感動的な、せつかちな、傍の思惑などかまつて居ない求め合ひの混雜が、そこ、こゝで起つて居た。伸子は父の腕を執り、どんく人波を分けて進んだ。眼では絶えず上甲板の欄干に沿うてびつしり並んだ顔の列の中に、佝を見出さうとし乍ら。

顔はいかにも澤山だ。それが重り合ひ、帽子や外套の色にまぎれて、とても一つ一つ、近眼の彼女には見分けられない。そのうち、迎へに出た方、出られた方、互に相手を見つけたと見え、嬉しさうにオーイ、オーイと叫んで帽子を振る男や、紋付の羽織で此方から辭儀をする婦人がある。船が大いので、並んだ船客の顔は小さく、とりこめられたやうに見えた。伸子は悲しくなり、

「お見えになつて？ お見えになつて？」と、度々父に訊いた。

「——此那ごたくの中なかに居ゐちやあ、向むかうからも見み難がたい、少すこしすいた處ところへ出でよう」

彼等は、前まへへ前まへへと押おす人ひとなだれをよけて、税關ぜいくわんの倉庫くら近く立たつた。視みて居ゐると、上甲板じやうがはんから短みじかい段だんを降くだりて、船首せんしゆの中甲板ちゆうがはんへ出て來きる一人ひとりの男おとこがある。黒くろい外套がいとう——山高帽やまたかぼう。伸子のぶこは覺おぼえず體からだごと右手みぎてをあげ、頭あたまの上うへで熱心ねつしんに振うり動うごかし乍ら、父ちちに告つげた。

「わかつてよ父様とうさま！ あすこ、あの黒くろいの」

彼も帽子ぼうしを脱とつて、彼等かれらに向むかひ、ゆるやかに大おほきく打うち振ふつた。更さらに強つよく、更さらに心こころをこめて手を振り乍ら、伸子のぶこは感動かんとどうでぞつとし、涙なみだを浮うべた。

六

自動車じどうしゃが、石垣いしがきについて坂さかの角かどを曲まつた。父ちちと佝つくだとの間あひだに挟はさまつて揺ゆられ乍ら、伸子のぶこは家うちが近ちかづくに連れ、深ふかまる懸念けんねんを感じかんじた。

初対面の佃と母とは、互に如何那印象を與へ合ふであらうか。伸子は、つまらない事だが、佃の顔色が汲えないのも、少し心配であつた。彼が話下手で、自分から暢やかに話題を提供する質でないのも心配であつた。

玄関に、母の指し圖で、改まつた顔の書生や女中が並んで出迎へた。佐々は、帽子を女中に渡し乍ら、きごちない空気を拂ふやうに氣軽く云つた。

「何年ぶりです、靴をぬがされるのは。——君なんぞはもう、足から風邪を引く方だな。日本ではまだまだこの厄介はのかない」

佃は、固くなつて、にこりともせず答へた。

「いゝやかまひません」

先に式臺へ上つて居た伸子は、彼の心に向つて合圖のスキツチでも押すやうに力を入れ「楽に！自然に！」と願つた。衣服を改めた多計代が、客間の入口に近い椅子の前に、彼等を迎へるために立つて居た。伸子は眞先に、

「ただ今」

と挨拶した。そして、佃を母に紹介した。佐々が傍から其を扶けた。

「妻です。——佃君——佃君には先も話した通り、いろ／＼お世話になりましたよ」

「左様ださうでございますね」

多計代は、大柄な體に重々しく威嚴を保つた様子で應答した。

「此度はまことに思ひがけない御縁でおめにかゝることになりました」

佃は、さういふ多計代の改まつた應待ぶりを適當に受け切れず、ちぐはぐに、言葉足らず窮屈さうに答へた。

「お父様には大變お世話になりました……うよろしく」

「まあかけ給へ。……いや、草臥れたことでせう。」

佐々は、妻に云ひかけた。

「佃君は大部船に弱いさうで、半分以上寝て來られたんださうだ」

「まあそれは／＼」

當人から何か言葉を期待するやうに、多計代は佃の方を見た。佃は、椅子の左右に肘をのせ、その手を胸の前方で組み、多計代を見て頷くやうにし乍ら、

「もう大丈夫でございます」